

大正十一年六月五日印刷納本 大正十一年七月一日發行
 共發社船の金 2-B88
 和=号
星の金
 號月七
 国立国会
 8.3
 図書館



inches
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 cm
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches
 Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
 © Kodak, 2007 TM, Kodak

Kodak Gray Scale
 A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
 © Kodak, 2007 TM, Kodak

C Y M

交蘭社發賣の繪はかき

岡本歸一先生執筆



交蘭社

東京市神田區南神保町十六
振替東京四〇二七九番

お伽繪はかき

第一輯

青い鳥

メイテルリンク作の童話劇『青い鳥』を先生が特に入念に繪はがきに書き現はされたる典雅美麗なる空前の繪はがきであります。

藝術繪はかき

第二輯

王様の馬

西條八十先生の童話『王様の馬』を繪はがきに書き直し、それに、音譜を添へたる新しい試みの詩、繪、作曲を具備した遺憾なき繪はがきです。

各組定價金二十五錢送料二錢(以下續いて來ます)

愛讀者の皆様に御禮申上げます

これまでの「金の船」は前月號から題を變へまして「金の星」として發行いたしました處、皆様から大層な御歓迎を受けまして、數萬部を忽ちにして賣りつくしました。實にお禮の申やうもございません。また、日本全国各地の愛讀者の皆様から、數知れぬお祝状をいただきました。厚く厚くお禮申上げます。

私どもは、これに力を得まして、ますます奮闘いたし、「金の星」を立派な雑誌にいたして、皆様の御聲援に酬いる覺悟でございます。

とりあへず、こゝに御禮申上げます。

「金の星」同人

岡本歸一
野口雨情
齋藤佐次郎

目次

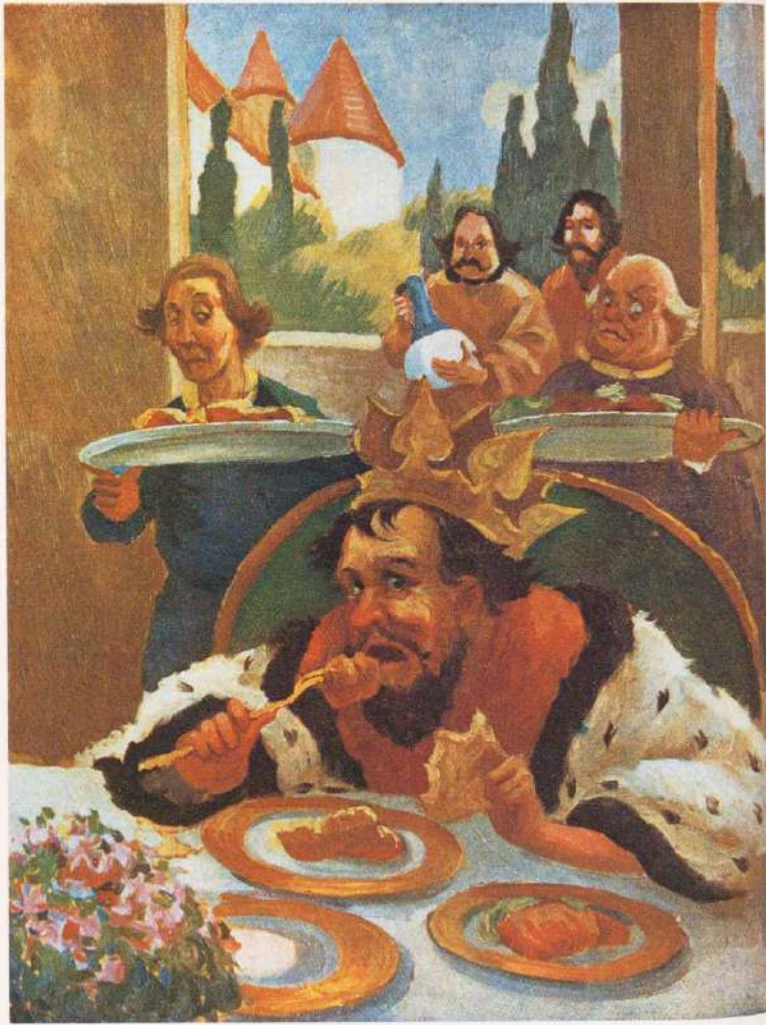
はれたくく虹が出た(表紙原色版)……………岡本歸一
 人違ひの王様(口繪三色版)……………野口雨情
 子守唄(曲譜)……………小島政二郎
 ふいの切腹(童話)……………沖野岩三郎
 大統領様へ(童話)……………岡本歸一
 猿の顔はなせ赤(童話)……………霜田史光
 王様と乞食(童話)……………長尾その子
 櫻の花(幼年詩)……………大八木庄三
 染屋……………楠山正雄
 青蛙と犬(童話)……………中島孤島
 黄金の鳩(童話劇)……………野口雨情選
 かへ(童話)……………



みねむり姫(童話)……………小澤尊子
 流された蟻(童話)……………植松壽樹
 ほたる(童話)……………空永橋卓介
 家なき子(名作童話)……………三宅房子
 義經の奥州下り(史劇)……………吉窪田空穂
 明日見の炭焼長者……………藤澤衛彦
 浮坊主(童話)……………若山牧水
 母と子(自由畫)……………山本鼎選
 おぢいさん(幼年詩)……………若山牧水選
 ちいさな餅り方……………編輯部選
 金の星講演部の報告……………八八
 通信……………九二

(附 録)
 長篇物語 父戀し(第六回)……………沖野岩三郎
 失望





人違ひの王様

岡本歸一畫

『己はお腹が空いた』と云つて、乞食の王様は家來に命じて、澤山のお料理を持って來させました。

乞食は生れて始めてこんな美味しいお料理を食へたので、うまい、うまいと舌を鳴しながら本當の王様がいつも召上る二倍ものお料理を食へてしまひました。

(王様と乞食の二十七頁を御覽下さい)



◇ り よ た ◇

(ら か 前 講 星 の 金)



東同(4)寺國佛州慶園(2)門大南城京内の信通旅の話童鮮朝生先野神(1)
 信通會演講諸童野平縣島福生先口野(3)橋棧一第山釜同(6)橋兵洗府葉
 欄信通(社船の金)所行發星の金(5) 信通會演講諸童堂會公市壱仙同(7)
 (いさ下覽御を事記演講)

水谷まさる氏著

少女畫報主筆として名聲噴々たる著者が熱血を注ぎし快著

詩物語

中形版箱入上製總柄
 挿畫入 優美本
 全 一冊
 定價金一圓五十錢
 送料 十二錢

新版

◆女學生諸嬢の熱烈なる懇望により、詩物語り、及詩日記に一大修正を加へていよいよ上梓發賣することを得たるは、新しき詩の愛好家諸君には、この上なき喜びなるべし。本書一名『詩の生れるまで』とも云ふべく又悲々哀々の想志を優情典雅なる詩中に見出でて清く美しき涙をそそぐ令人の心胸を描ける麗筆は、何人も涙なしに讀み能はざる名著である。

川路柳虹著

詩集 温室の花

名作叢書六篇

實價 九十錢
 送料 十錢

野口雨新著

童謡作法問答

童謡の作り方新書として今つて益書其價は其發行によ

實價 十二錢
 送料 十二錢

柳澤健著

現代の詩及詩人

新しい詩を作らむと欲する諸君が先づ第一に讀まざるべからざる好書

實價 十二錢
 送料 十二錢

西條八十著

童話集 不思議な窓

當代第一人者として定評ある氏が特に幼き者の爲めに本書を上梓されたり

實價 一圓半錢
 送料 十八錢

東京市神田區南神保町六十番 交蘭社 發行

(一の付前)金

著二謙原上

(全八冊) 四六判美本各冊
 ▲▲▲▲(1) 又半
 ▲▲▲▲(2) 幼夜ふ
 ▲▲▲▲(3) 知らぬに
 ▲▲▲▲(4) 御れひま
 國どとりへもりて
 定價八拾錢郵稅四錢
 ▲▲▲▲(5) 残るおとも
 ▲▲▲▲(6) 嬉曉るさ
 ▲▲▲▲(7) しのみまほ
 ▲▲▲▲(8) りよ近か
 しろしけ

物語

此物語は徒らな空想や理窟を避けて飽迄も自然に素直に子供の心に觸れたいと思ひます。巧みに詩情と實理とを併せ保ち興味と教訓とを並び活かしたいと思ひます。さうして自然の同情同感に訴へて美しい情緒と健全な道念を靜に植付けたいと思ひます。さうして純な魂を純なまゝによりよきより廣きより高き世界に導きたいと思ひます。此意味で出来るだけ兒童の心理をも考へ合せて精練した材料を集めた積りでござります。(編者)

(少女小説出づ!!!) やさしいの花よ谷間の姫百合、床し野の小白百合、げにそは我が乙女、あはれ姫百合小百合。而も芳烈なる其の香の初夏の野を、又谷を薫する氣高きよもし後の世に大正時代の女學生々々の眞想は、とならば此の初夏を、又谷を薫する氣高きよもし後の世に大波の胸は、巻中十數篇の小説の一つ一つに共鳴して、喜びに悲しみに涙に理智に目ざむる情緒の高の舞踏場たらんかし。美しき己れの姿を、此の一卷に願ひて此の世に少女たるのプライドを誇り玉へ。

姫百合小百合

葛原鹵新著
 恩地孝四郎裝幀
 菊半截布製三六〇頁餘
 定價壹圓七拾錢稅六錢

發兌元 東京市麴町區準町廿番地 洛陽堂 (目録往復) (呈進書葉)

(三の村前)は

三ツの誇り
 環女史は日本の誇り
 此レコードはニツホノホンの誇り
 そして藝術的匂ひの高い
 此レコードをお備へになることは
 皆様各御家庭の誇りでなければなりません



戀はやさしい野邊の花よ
 PIANO ANTIOO
 伊太利ナポリ民謡サンタルチア
 SOLE MIO
 ユーベルトの子守歌
 DILLE TU ROSA

ニツホノホン
 新録

信用ある蓄音器店は何れも
 鷺印レコードの専賣店なり
 株式会社 日本蓄音器商會

白眉社
編輯部編纂

音樂講話叢書

內容見本
進呈

西洋音樂の発展につれて音楽上の諸科目の知識を得やうとする江湖の要求を著者が爲めに生れたる叢書であります。類に互らず、簡単に要領を得るよう書いてあるのが本書の特色で、内容種類は音楽に關するあらゆるものを網羅してありますから、本叢書を座右に備へて置けば音楽の事一として分らぬものはないのです。

〔新刊〕

- (1) 樂譜の知識 (本譜早) 五十錢 送料四錢
- (2) オペラの話 八十錢 送料四錢
- (3) 聲樂研究法 八十錢 送料四錢
- (4) ピアノの習ひ方 八十錢 送料四錢
- (5) オーケストラの話 八十錢 送料四錢
- (6) 音樂解説辭典 一圓卅錢 送料六錢

- 〔刊續〕
- ◎音樂人名辭典 ◎小詠作曲法
 - ◎ヴァイオリンの習ひ方 ◎音階の話
 - ◎マンドリンギターの習ひ方 ◎日本音樂の話
 - ◎ハーモニカの習ひ方 ◎和聲學初步
 - ◎音樂の聽き方 ◎簡易音響學
 - ◎舞踊の話

中山氏作曲 三十錢 本居氏作曲 三十錢 新編 民謡 第八十錢 泰柳 編 五十錢
 兩情氏作曲 三十錢 中山氏作曲 三十錢 故郷の唄 附 旅人の唄 二十錢 佐々木氏作曲 二十錢 童謡唱歌 第六十錢 百眉 編 五十錢
 兩情氏作曲 三十錢 中山氏作曲 三十錢 童謡樂譜やまばと 三十錢 山本氏作曲 三十錢 創作曲譜 第四十錢 編 五十錢
 士屋氏作曲 三十錢 兩情氏作曲 三十錢 童謡樂譜やまばと 三十錢 山本氏作曲 三十錢 創作曲譜 第四十錢 編 五十錢

白眉出版社

東京市外下目四八
 振替東京四五九八

(四の付前)金

山村暮鳥著

〔定價金貳圓 送料十八錢〕

童謡萬物の世界

內容一斑
 童謡 外七十餘種
 雪話
 童話 ほうろく 外四種

童話集

イソブ童話 グリム童話
 アンデルゼン童話 トルストイ童話
 メエテルリンク童話 ワイルド童話

創作童話
 山田邦子著 笛を吹く天人 定價金壹圓 送料八錢
 小寺菊子著 豆人形 定價金壹圓 送料八錢
 井上芳子著 魔法の鏡 定價金壹圓 送料八錢

渡平民譯

〔定價金貳圓八十錢 送料十八錢〕

世界童話劇選集

第一卷內容
 白鳥姫
 アンストロク
 金の林檎
 アルチア
 アンと青髭

眞珠書房

東京市外下目四八
 振替東京四五九八

(五の付前)金

少年少女必讀の教育童話

若目三郎先生編三種

<p>童話 教育 親ごころ</p>	<p>童話 教育 黄金の砂</p>	<p>童話 フランス 長靴をはいた猫</p>
<p>「焼野の雄子夜の鶴」とか「子故の間に迷ふ親ごころ」とか云はれて、子を思ふ親の眞情には昔も今も變りはございませぬ。本書は著者が深い感激と努力とを以て書かれたものです。本書によつて、どなたも教へを享るに違ひありません。</p>	<p>本書は日本のよい少年少女の事を澤山書いたものです。内容は黄金の砂、銀太郎の家出、順禮娘、父の尺八、九郎判官、片輪人形等教訓になる面白い童話ばかりで、讀めば讀む程益々面白くなります。</p>	<p>本書はフランスの有名な童話です。長靴をはいた猫、青霧の鬼、かはい、赤帽子さん、魔女、ねむり森の姫、とさかの王子、一寸法師等外數種の面白い童話でうづまれ世界各國の少年少女に愛讀されて居る有名な童話です。</p>

四版六ノグス美本函定各價壹拾錢送各料二十錢

東京市京橋區目黒分店 振替東京三三二七五番 電話東京二七四九番

(前の付七)

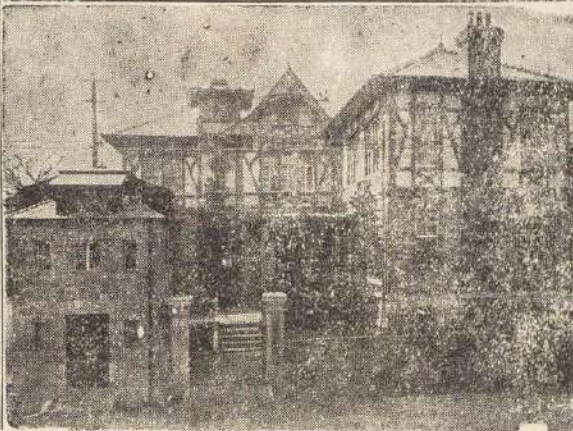
天下の青年は 大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導が良から
- 學制が正しいから
- 基礎が固から
- 講師が善から
- 卒業が早から
- 成功が速から

會長 尾崎 行雄

學監 大澤博士 山内博士 三宅博士 井上博士 浮田博士 岡田博士 大田博士

顧問 岡田博士 大田博士



創立二十一年 記念大特典提供 目下新學期開講

入會の絶好機 講義録見本つき 規則書無料送付

一人前の男となるには、さうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はさうしても生存競争の勝者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するに及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンと出来てゐる。それは創立以來二十年の古い経験のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京 駿河臺 茗茶の水電車通り
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇三
神田三〇〇〇四

子守唄

野口雨情

父さんなくとも

子はそだつ

母さんなくとも

子はそだつ

雀と遊んで

るるうちに

七のお歳の

日は暮れる

父さんなくとも

日は暮れる

なん／＼七の

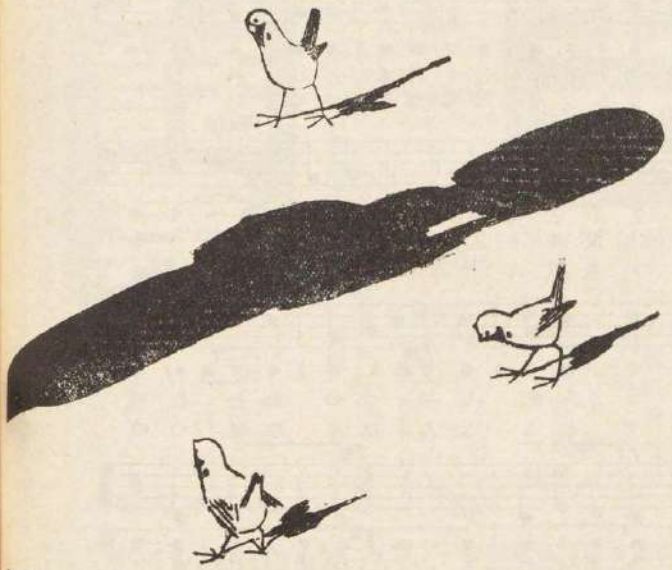
日は暮れる

母さんなくとも

日は暮れる

なん／＼七の

日は暮れる





腹切のいふ

郎二政島小

昔、會津藩に、川井勘十郎といふ侍がありました。獵が好きて、休みの日には、いつも鐵砲を肩に野山へ鳥打ちに出かけるのを何よりの楽しみにしてゐました。

今日も、朝からお城の裏山へ獵に行きましたが、どういふ譯か獲物がなくて、お晝過ぎまでにやつと二三羽しか取れませんでした。で、厭になつてしまつて、まだ日の暮れないうちに早く引きあけて來ました。

山をおりると、十文字ヶ原といふ廣い原になつてゐます。その原の中に、ところ／＼に藪だたみがあります。その藪に春の目を一ぱいに浴びながら、一匹の狐が晝寝をしてゐました。

それを見ると、勘十郎は、むら／＼といたづら心を起しました。肩の鐵砲をおろすと、急いで紙で玉を拵へて銃口に込めました。そして狐の耳もとで、ふいにポーンと引き金を引きました。

ふいを食つた狐は、手足を顫はせながら、夢中で一間ばかり

り上へ飛びあがりました。が、やがてドサツと横倒しに地面の上へ落ちると、

「キャン／＼……。」と啼き聲を立てました。しかし、啼きながらも、クルツと起き直るが早いか、遙か向ふに聳えてゐる五重塔の方へ、黄い小さな體を青草の中にチラ／＼させながら逃げて行きました。

そのうしろ姿を見送りながら、勘十郎は、

「ははは……。」と、さも愉快氣に笑ひました。

狐はもう大丈夫玉は着かないと思ふあたりまで逃げのびると、つと立ちどまつてうしろを振り返つて、勘十郎の姿をいま／＼しきりに眺めてゐました。しかし、そんなことには



勘十郎は氣が附きませんでした。

二

やがて家へ歸りついた勘十郎は、奥さんと子供と三人一しよに仲よくお膳に向つて、自分だけチビリ／＼お酒を飲みながら、上機嫌で、狐の驚いた時のをかしかつた有様を、身振りまじりで面白く話して聞かせました。さうしていゝ心持に酔つて寢床にはひりました。

ところが、その夜十時頃、ドン／＼と門を敲く者がありました。奥さんが目をさまして行つて見ると門の向ふが晝のやうにポーンと明るくなつてゐました。

「どなた？」と聞くと、

「拙者は目付役の片山彌平次でございます。殿様の御用で参り申した。早速

御門をお開きなさいい。」

と、いふ返事でした。

奥さんは驚いてこのことを夫に傳へました。勘十郎も驚いて、急いで衣服を改め袴を付けて出迎へました。

門を開けると、——明るかつた筈です。そこら一面高張提灯、箱提灯で埋まつてゐました。

「これは、片山氏にはかゝる夜中お役目御苦勞に存じます。どうぞこちらへお通り下され。」

かういふ主人の案内につれて、片山彌平次をはじめ七八人の侍は、奥座敷へ通りました。立間には家來の家が残りました。

座につくが否や、彌平次は形を改めて、

「さて、川井氏、殿様は貴殿に對してきついお腹立ちぢやぞ。

貴殿今日の午後十文字ヶ原で鐵砲を打つたであらう。——あすこは予が鷹狩をすべき野ぢや。予が家來である以上それを知らぬ筈はない。知りながら鐵砲を放つとは怪しからぬ振舞ぢや。切腹を申し付けい、との御命令ぢや。有り難くお受けなさいい。」

これが彌平次の口上でした。

思ひも寄らぬ殿様の御命令に、勘十郎は暫くは言葉も出ませんでした。

が、稍あつて、

「憚りながら片山氏、そりや殿様のお言葉とも存じませぬ。」

「ナニ、殿様に對し無禮を申す御所存か。」

「いえ、左様ではござりませぬ。成程今日午後、たしかに私鐵砲を放りました。なれど、それには譯がござります。且つ放ちましたる玉は眞の玉ではござりませぬ。紙玉でござります。篤とお調べの上、切腹の儀お許し下さりませう、お願いいたしまする。」

「ならん。今になつて左様な言譯しても追ツつかんわ。第一紙玉などと、子供騙しのやうな言譯通ると思ふか。眞の玉で打つた音が紙の玉で打つた音か、その區別が殿様に分らんと思ひをるか。不所存者奴が……。」

扇子を膝に構へて、彌平次はキツと睨みつけました。

「ハッ。」

と、勘十郎はその場に平伏しましたが、



「何を申すも、皆わたくしの不心得から起りましたこと。誠に

のことを申し上げても、お聞き入れなくば、致し方ござりませぬ。有り難く切腹お受け致します。つきましては、武士の身嗜み、行水に身を淨めまして後、潔く切腹いたしたく存

じます。何卒暫くの御猶豫を……。」

無論許してくれるものと思つて、これだけのことを勘十郎が願ひ出たところが、

「いや、一刻の猶豫も相成り申さぬ。御身が言譯聞いてゐた

爲め思はぬ時刻を費し申した。さぞ殿様にはお待ち兼ねであらう。いざ、御用意召されい。それがし介錯仕らん。」

情もなく、かう云ひ放つたまま、彌平次は羽織を脱ぎ捨て、袴の股立を取つて、勘十郎のうしろへ廻りました。

あまりのことに、隣座敷では奥さんと子供とがワツと泣き倒れました。

しかし、かうなつては、もうどうすることも出来ませんでした。

勘十郎はいさぎよく覺悟をして、肌を抜いで脇差を取り上げました。

三



その時でした。ふいに二匹の犬が座敷へ躍り込んで来ました。

これは、勘十郎が平素から可愛がつてる番犬で、一三度狼を噛み殺したことさへある強い犬でした。

二匹の犬は、激しく彌平次に吠えかゝりました。勘十郎はびつくりして、

「しッ。しッ。」と一生懸命に制しましたが、犬はそんなことには頓着なく、

「をう……。」と叫びざま、ヒラリと身を躍らしめて、二匹一時に彌平次に飛びかゝりました。

と、今の今まで、しよんほり坐

つた勘十郎のうしろに、刀を不動剣に構へて威張り返つてゐた彌平次の姿がバツと消えたかと思ふと、ふいにキャン／＼といふ獣の啼き聲が聞えました。

見ると、そこには、二匹の犬に首ツ玉と胸中とを噛み裂かれた一匹の古狐が、血に染まつて轉がつてゐました。

「さては。」と思つて、勘十郎が振り返つて見ると、彌平次の供をして居並んでゐた侍たちの姿もついでに消え失せてゐました。

立派な侍の姿の代りに、そこには、犬に追はれて座敷の中を逃げまはる哀れな七匹の狐が



るばかりでした。

「よくも化かし居つたな。」

と、勘十郎は手頃の棒をおツ取るが早いか、犬と一しよ、逃げまはる狐を追ひまはして、とうとうみんな殺してしまひました。

それから勘十郎は、下男に云ひつけて、玄關に待つてゐる彌平次の家來どもに氣附かれないうやうに、表の門を締めさせました。

さうして置いて、犬を眞先に立て、ふいに玄關を襲ひました。

こゝでも狐はあらか方噛み殺され、殴り殺されてしまひました。後で死骸を数へて見たら、みんなで四十六匹あつたさうです。

(おはり)

大統領様へ

沖野岩三郎



二

一〇

或日の事、ジミイとフレツデイとエルジイの三人はつれ立つて、町の方へ散歩に行きました。すると向ふの方を一人の青年が、鈴を鳴らしながら、

「號外、號外々々々々！」と言つて走つて行くのを見ました。

「何だらう？ 何の號外だらう？」と云つて三人は立停つて

見てゐますと、一人の紳士が、その號外賣を呼びとめて、號外を一枚買ひました。三人は紳士のところへ駆け寄つて、

「小父さん、何です？ 何の號外です？」と問ひました。すると、紳士はニツコリ笑つて、

「戦争が休みになつた。休戦だ！ お目出たい。これでもう世界は平和だ！」と申しました。

三人は顔を見合せました。そして、ドンドンと祖父さまの所へ駆けつけました。

「祖父さま、僕のお父様は大丈夫よ！」とジミイが大聲で言ひますと、フレツデイも、

「討死しないで歸つて來ますよ！」と言ひました。

「祖父さま、本當に嬉しいのネ。」とエルジイは申しました。

何の事だか、さつぱり解らないので、祖父様は凹んだ眼をしよほくさせながら、

「何を？ どうしたといふんだい？」と訊きました。

「休戦々々！ 僕達の手紙を讀んで、大統領様は戦争を止したんだよ。」とジミイは顔を紅くして云ひました。

「休戦だ！ それは有難い！ ところで手紙を出したツてそれは一體どういふ事かい？」

祖父さまは、三人の孫達の顔を眺めながら言ひました。けれども三人は顔を見合つて、くすくす笑ふだけで、何にも言ひませんでした。

間もなく戰場にゐる三人から、祖父さまのところへ手紙が届きました。それにはいよ／＼戦争も休戦になつたので、近いうちに歸るといふ事を、大變嬉しいさうに書いてありました。此手紙を受取た祖父さんは、三人の孫を自分の家に集めて、

「さア、ジミイ、フレツデイ、エルジイ、今日はネ。あなた方に十錢銀貨を一つづつ與けるから、それで、何でも自分の欲しいと思ふものを買つてらっしゃい。そして今日は、祖父

さまと四人で、ダンスでもして遊びませう。」と申しました。

三人は大變喜びました。早速十錢銀貨を一つづつ握つて、

ブリングスの町へ出かけて行きました。

フレツデイは言ひました。

「僕はネ、あの公園の西の店に賣つてる國旗を買ふんだよ、十錢の國旗を……」

エルジイは言ひました。

「あたしはネ、公園の所にある、お花屋へ行つて十錢の花束を買ふわヨ。」

ジミイは言ひました。

「僕はネ、その花屋から半町程向ふのお菓子屋へ行つて、チョコレートを買ふんだ。大きなチョコレートが十錢に四つだよ。」

三人はめい／＼に異つた目的で、一つの道を歩きました。そしてフレツデイは旗を買ひました。エルジイは女の子に相應しい花束を買ひました。

ジミイがチョコレートを買ひに行かうとしますと、俄かに公園の方から、何千人とも知れない人数が、洪水のやうに溢

二

一一



れて出て来ました。

「何だらう？ 何だらう？」と云つてゐるうちに、立派な自動車が、ブー、ブーと笛を鳴らしながら公園の門のところから静かに動いて来ました。

立つてゐた警官は姿勢を正して敬禮しました。歩いてゐた兵隊さんは立停つて敬禮しました。

「大統領、大統領」と誰かが言ひました。

「大統領様だ！」とジミイは叫びました。

「僕の手紙を読んでくれた、あの大統領殿だ！」とフレツデイは大聲で言ひました。

「あ、あ、行つて面會して来ませう。」とエルジイは、申しました。

「僕も……」

「僕も……」

ジミイとフレツデイは、エルジイの後に續きました。けれども三人が群衆を掻分けて車道の所へ出た時は、もう自動車は三四十間も向ふの方を走つてゐました。

「大統領様！」と言ひながら、三人は駆け出しました。けれ

ども小さい子供の足は、早い自動車には追いつきません。見る見る二町ばかりも取残されました。

「待つて下さい……」

フレツデイは叫び続けながら走るうちに、三回も五回も轉びました。轉ぶ度に大事の旗を地べたに打ちつけるので、旗は泥だらけになりました。

「大統領様……」

ジミイは走つてゐるうちに、五回も七回も轉びました。轉んでもチョコレートを買ふ十錢銀貨は、確かり握つてゐます。

「待つて頂戴ナ」

泣聲をしながら走つてゐるエルジイは、七回も八回も轉びました。轉ぶたびに手に持つてゐる花束を地べたに打ちつけました。だから花は皆な散つてしまつて、莖がべたべたになつてしまひました。けれどもエルジイはそれを捨てませんでした。

三人がピリンダスの停車場へ駆けつけた時は、丁度大統領様の乗つた汽車が、動き出さうとする所でした。

車掌が片手を舉げて、合圖の笛を吹かうとするところへ、

「待つて下さーい……」と言つて、三人は駆け込みました。その時大統領様は、汽車の窓から顔を出して、右の手に帽子をもつて、それを高く差上げてゐました。

「大統領様有難うございました。お禮にこれを差上げます！」と言つて、泥だらけの國旗を差出しました。

にっこり笑つた大統領様は、直ぐ帽子を左の手に持ち換へて、其の國旗を受取りながら、

「サンキュー！」と申しました。

「大統領様！ これ花束よ！ 花は散つてしまつたけど、花束よ！ 差上げます。あたし、エルジイです。」

エルジイは、べしよ／＼になつた花の莖ばかりを差出ししました。

エルジイといふ言葉を聞いた大統領様は、ちつとエルジイの顔を見ましたが、

「アイ、サンキュー！」と言つて、その花束でない莖束を受取りました。

「僕も、僕も……」と言つて、うろ／＼あたりを見廻してゐ

「そんな汚ないハンカチーフでもいいのか？」

言ひながらフレツヂイは褐色に汚れたハンカチーフを取出して振りました。ジミイも汗だのインキだのでグシヨ／＼に汚れてゐるハンカチーフを振りました。

やがて汽車は見えなくなりました。で、三人は、

「さア、歸らう、歸らう。」と言つてゐますと、そこへ煙突のやうな背の高い人が、ことり／＼と歩いて來ました。それはビルンダスの町の市長様でした。其次にデブ君のやうによく肥えた助役様が、どすん／＼と歩いて來ました。三番目の人は、お煎餅のやうに薄ツペラで、腰にサーベルを下けてゐました。

三人はふいと後を振向いて吃驚しました。で、急いで駆け出さうとしますと、煙突のやうな市長様は、ひよいとジミイを後から抱へて高く差上げました。デブ君のやうな助役様はフレツヂイを掴んで差上げました。お煎餅のやうな警部さんはエルジイを抱き上げました。

「御免下さい、御免下さい、僕はチョコレートを買ふ積りだつたのです。」とジミイは泣き出しました。

たジミイは、

「大統領様、これ、チョコレートを買ふお錢だ！ あけます！ あけます！ 僕、ジミイよ。手紙をあけたジミイよ！」と一生懸命になつて言ひながら、可愛い紅葉のやうな手を開きました。紅い掌の上には、白い十錢銀貨が載つてゐました。

「おう、ジミイ！」と言つて、その十錢銀貨を受取つた大統領様は、靜かに、

「アイ、サンク、ユー、ヴェリ、マツチ」と申しました。

汽車は靜に動き出しました。大統領様は帽子を片手に差上げてそれを振りました。

ジミイも帽子を振る積りで頭に手をやつて見ましたが、帽子は疾うの音に何處かへ飛散つて頭の上にはありませんでした。フレツヂイも自分の頭の上に帽子の載つてゐない事に気がつきました。

二人は致方ありませんから、おかつぱの髪を掴んでそれを振る眞似を致しました。するとエルジイはポケットから、ハンカチーフを取り出して、

「大統領様！ 左様なら！」と言ひながら打振りました。

「泣く事はない。お靜かになさい」と市長様は言ひました。

「御免なさい、御免なさい、僕は轉んだもんだから、あんなに泥だらけになつたのです。あれでも買つて一時間も経たないんです。新しい國旗なんですから。」とフレツヂイは泣聲で言ひました。

「泣く事はない。お靜かになさい。」と助役さんは云ひました。

「御免なさい、御免なさい。私の花束には花が咲いてゐたのですけど……轉んちやつた時、落ちてしまつたのです。紅い花も白い花もそれから紫も黄色も……」とエルジイは涙を流しながら申しました。

「泣く事はない。お靜かになさい」と警部さんは言ひました。

三人は何うなる事かと心配してゐますと、市長様は大きな聲で、

「諸君！」と言ひました。停車場には大統領様を見送りに來た多勢が、此場の有様を不思議さうに見てゐました。市長様は大きな聲で、

「諸君は二十分前に、公園の中で大統領の御演説をお聴きになりましたでせう。そのお話の中に、(もう)世界は平和になる

べき筈である。戦争は止さなければならぬ時である。私の机の上には、早く戦争を止して下さいといふ手紙が何百何千となく来てゐる。ところが私は三週間程前に、此の町の郵便局の消印ある子供の書いた三通の手紙を受取りました」と仰しやつた事をお記憶でございませう。大統領は申されました。(其の手紙には、私のお父様は、たった一人だからネ。と書いてありました。私は思はず泣かされました)かう仰しやつ



た事をお忘れでございませぬまい。諸君! その三人の子供と申すのは、此の子供さん達であります。」市長様の演説が終ると、群衆はどっどと聲を揚げて三人の爲に喝采しました。のみならず多勢が押かけて来て、三人の小さい手を握りました。或人はデパートメント、ストアから孫さんの爲めに買って来た。新しい帽子をジミーに被せました。或人はお嬢さんの爲に買って来た立派な外套をエルジイに着せました。或人は手を引いてゐた息子子のマントを脱いでフレツテイに着せました。三人のポケットには銀貨やチョコレートや、ボンボンで一ぱいになりました。

「諸君!」とデブ君のやうな助役様は申しました。すると群衆は喝采を鎮めました。「諸君、此の三人の子供さん達を、市役所の自動車に乗せて、其のおうちまで送つてあげては如何でせう?」と、申しました。



ブーウと自動車が唸つて動き出すと、群衆の中で自動車に乗つて大統領を見送りに来た人達は皆な我も我もと市長様の自動車について行きました。

ジミーは一番前の自動車の中から後を振り返つて見ますと、一つ、五つ、九つ、十、十五、二十、三十、五十……数へ切れない程澤山の自動車がついて来るぢや

群衆は賛成々と申しました。で、すぐ市役所の立派な自動車に三人を乗せました。そして市長様は尋ねました。「あなた方のお家は何處ですか?」「僕達のお祖父様は、あの町外れの大きな椎の樹のある所に居るんです。」

と、ジミーは答へました。「ああ、あの鳥の巢のある所ですか。」と、警部さんは申しました。「さうです。さうです。よく御承知ネ。」と、エルジイは申しました。

ありませんか。

こんな美しい自動車に初めて乗つたフレツテイは、嬉しくツてくぐぐ堪らないもんですから、思はず聲を張りあげて、「鳥なぜ啼くの。」と唄ひ出しました。ジミーも調子を合せて唄ひました。エルジイも、手拍手を取りながら唄ひました。

市長様も助役様も警部様も、いつしか聲を出して鳥の歌と一緒に唄ひました。五十臺の自動車が、ジミーの家へ着いた時、祖父さんは何んな顔をして呆れて居たでせうか。(なほり)



(二) 其處へひよつこり狸がやつて來まして向を見ると、今までついぞ見た事もないお尻の赤い變な奴がゐますので、いきなり傍へ行きまして、

「君、君は一體全體何んだい。われわれの種族かね。それにしてお尻が赤いね。不思議だねエ。」と、云ひました。

お猿は變な事をきくもんだなと思ひながら、

「僕達の仲間はみんなかうなんだ。これが當然でちつとも不思議はないよ。」と云ひながら、狸のお尻を一寸のぞいて見ると眞黒です。

「あら變だね君、君どうかしたのぢやないのかね、君のお尻は黒いぞ。」と云つてゐます所へ、狐のこゝくやつて來ました。



い赤あせふは顔かの
一 歸 本 屋

(一) あの顔とお尻が眞赤なので有名なお猿も、もとはお尻だけ赤くつて顔はあんなに赤くはなかつたのださうです。

それちやどうしてあんなに顔が赤くなつたかと申しますと、その譯はかうです。

御影山の森といふ大きな森の中には、昔からいろいろな獸が澤山すんでゐましたが、お猿たちはまだ一匹もゐませんでした。

所が或日何處をどう迷つて來ましたのか、お猿が一匹森の中でまごころしてゐました。



(四)そこへ兎が一匹来ましたので、
 猴「君、ちよつと君のお尻を見せて呉れ給へな。」と云乍ら自分のお尻は兎に見せない様にして、覗きました。兎は變な奴だと少し薄氣味悪くなつて来て「僕のお尻を見てどうするんだい。」と尋ねますと「いや何でも無い。どうもありがたう。」といきなり逃げ出しました。兎はその後姿を見ますと、手でお尻を押へて逃げて行きますので、追ひかけ出しますと、以前の狸や狐までが澤山の仲間を連れて一緒にお猿を追ひかけながら皆でお尻が赤いくとからかひましたので、お猿はもう恥しくつて、顔から火が出るほど眞赤になり、それつきり直らずに、今でも赤いのださうです。



(三)狸は自分のお尻の黒いのが變だと云はれて少し腹を立て、居ましたので、いきなり狐をひつばつて來まして「狐君々々、此奴のお尻を見給へ、赤いんだよ。」と云ひました。すると狐はお猿のお尻をつくつく眺めて「いや、なるほどこれは奇體だ。ふん、妙な奴もあるものだね。後學の爲め仲間に見せてやる必要がある。一つ皆をよんでやらう。」と大きな聲で呼び出しましたので、お猿さんは自分だけどうしてこんなにさわがれたりするのかと、なんだか恥しくなつてこそく木へ登つて逃げ出しました。そしてなぜあんなに外の奴は不思議がるのか、自分の仲間はみんなかうなのにと、いくら考へても譯がわかりません。



王様と乞食

霜田史光

昔、或所に大層風變りな王様がありまして、御自身で時々いろ／＼な姿に變装して街を歩いたり、また御殿の中で多くの家來達を驚かせたりしては喜んで居りました。

或日、澤山の家來を連れて山へ獵にゆきました。王様はこの日も何かうま／＼と變装して家來達を驚かしてやりたいものとしきりに考へてゐましたが、思ひついたことがあつたと見えて、こつそりお獨りで村の方へ出掛けてゆきました。すると村の中程まで來ますと、小川の水で體を洗つてゐる乞食がありました。王様は、忽ちその乞食に近づいて申しました。

「これこれ、乞食。」

乞食はかう呼びかけられて、随分

失敬な言葉を使ふ奴だなど思つて、ふと見上げると、黄金の冠を冠つた王様でしたから、慌て、水の中から禮をしました。すると王様は、

「お前すまないがその着物を俺に貸してくれんか。」と云ひましたので乞食は驚いて、

「へえ、王様、この着物ですか、この汚い私の着物……」

「あゝ、さうだよ。」

「それはもうもう決して差支へありませんが、いくら乞食だからと申ししても裸でゐる譯にはいきませんから、何か更りを下さればいつでもお貸し申しませう。」

成程と思つて王様は當惑しました。しかし今の場合着物の持ち合せもありませんので、

「それぢや、俺の着物をやらう。」

と云つて、王様は立派な着物をお脱ぎになり、乞食のほろ

着物と取り換へました。ところがこの乞食は、頬から頰にかけて眞黒な鬚が生へてゐる所などは、王様によく似てゐるものですから、かう立派な王様の着物を着た所を見ると、まるで本當の王様のやうでした。

王様は乞食にお金をやつて、王冠を風呂敷に包んで腰に下げ、ぶら／＼とお城の方へ出掛けました。王様は變装して人達を驚かした時は、いつも最後には王冠を出して冠つて見せて王様だと云ふことを知らすのです。

王様はだん／＼歩いて行きますと、向ふからかなりい、役についてゐる御身分の家來がやつて來ました。王様は此奴一つ試してやらうとお思ひになつて、

「もし、もし、私は今朝から御飯も戴かずにゐます。どうぞ御恵み下さいまし。」

と云つて見ますと、その家來は大層怒つて、

「何んだ、この乞食。飯が食へなけりや死んでしまへ……」と申しました。王様は黙つて引つ込んでしまひましたが、初めてこの家來の悪い心を知つて、今込すつかり信用してゐたのが間違つてゐたことに気がつきました。

暫らく行きますと、また一人のい、役についてゐる家來が五六人の手下を連れて獵から歸つて來るのに逢ひました。家來達は今日王様が急に見えなくなつたことを話し合つてゐました。そして、あの風變りの王様のことだから、さつさとお

獨りでお城へお歸りになつたのだらうと云つてゐました。王様はまたその家來に近づきまして、さつきのやうなことを申しますと、この家來も大層怒つて、

「汚い、馬鹿、お前なんぞにやるお儀があるなら溝へ捨て、しまはア。」

と喚鳴りました。王様はこの家來も恐ろしく無慈悲な心を持つてゐる奴だと思ひになりました。

また暫らく行きますと、いろ／＼な荷物を背負つてやつて來る一人の武士に逢ひました。この武士は、役も悪く従つて服装も立派ではありませぬ。王様はその武士に近づいて、さつきのやうに申しますと、

「それはお氣の毒なことだ。」



恰度よい、此處に残りのパンが一つあるから、これでもお食べなさい。そして、これで何か温かいものでも食べたらよからう。」

と云つて、少しばかりのお金をくれました。王様はこれまた實に心のいゝ男だと思ひまして、お禮をいつたあとで、

「あなた様のお名前を教へて下さい。」

と申しました。しかし、その武士は、

「なアに、そんな立派な名前ぢやないから。」と云つて、どん／＼行つてしまひました。王様はその時、武士の額に二つの黒子のあるのを見て置きました。王様の乞食はだん／＼歩いて行つて、お城の近くへまゐりました。

お話を變つて、先刻の乞食は王様の着物を着て、一足飛びにお城の御門に駆けつけました。門番は、

「それ、王様の御歸りだ。」と云つて大勢出迎へました。すると僂の王様は大きな聲で、

「俺が村の橋を通つたら乞食奴が來て、俺の冠を奪つて行つた。お前途これから行つてその乞食をつかまへて王冠をとり返して參れ。」

と申しましたので、家來共はそれは一大事だと何十人も揃つて門を飛び出し、村の方へと駆けて行きました。

乞食の王様は、

「俺はお腹が空いたから。」と云つて家來に命じまして、澤山のお料理を持つて來させました。乞食は生れて初めてこんな



來い。」

と云ひました。家來は益々變に思ひました。と云ふのは、王様はいつでもお料理を召上る前にコップに一杯位はお酒をお飲みになるけれども、今までお料理を召上つたあとでお酒

美味しいお料理を食べるのですから、うまい、うまいと舌を鳴らしながら、本當の王様がいつも召上る三倍もの御料理を食べてしまひました。乞食は家來に、
「金貨を澤山持つて來い。」
と云ひました。家來は、王様は金貨を何になさるのだらうと思議に思ひましたが、御命令だからその通り澤山の金貨を袋に入れて持つて來ました。乞食はそれを手にとつて見て、ほく／＼喜んでゐました。そしてまた、
「おい、極く上等のお酒を持つて

を召上ることはなかつたからです。所がこの乞食は、實際御腹が空いてゐたので、先に御料理を食べて、お金をとることが出来たから、すぐに逃げて歸らうかと思つたのですが、家來がそばについてゐるので、逃げ出す譯に行きませんから、酒にでも酔つた上で何んとかしようと思つたのです。

「乞食の玉様は、酒を飲んですつかり酔つてしまひました。そしてもう何も彼も忘れてしまつて、其處へ汚らしく寢てしまひました。家來は立派な蒲團をもつて來てその上へ掛けて去りました。」

乞食になつた本當の



王様はすたくくと御城の御門の方へやつて來ますと、大勢の武士がどやどやと駈けて來ました。

「この乞食に違ひない。不都合な奴だ。」

と云つて、矢庭に王様の腰に下けてゐた王冠を奪ひとりました。王様は驚いて、「こらく、何をいたす。俺は王だ。」

と云ひますと、兵士達は大聲で笑つて、「間拔け奴！俺は王だ？聞いてあきれらあは、ハ、ハ、ハ、おい早く行かう。」

と云つて、王様をうんと突き飛ばして置いてどんく駈けて行つてしまひました。王様は仕方がないので、お

城の御門の所へ行つて門番に、

「俺は王冠をとられてしまつた。」

と申しながら門を入らうとしますと門番は、

「この乞食だな、王様の御冠を奪つた奴は。本當なら縛り上げて牢屋へ叩つ込むのだが、特別に堪辨してやるから早くあつちへ行つてしまへ！」と云ふので、王様はいよく驚いてしまつて、

「おい、間違へちや困るよ、俺は王だよ。」

「此奴、いけ圖々しい奴だな、王様はとつきの昔御歸りになつてゐらア。」

「何？王がもう歸つて居ると？それは怪しからん。さては先刻の乞食が企んだな。」

「何を云つてるやアがるんだい、この乞食奴！貴様夢でも見てゐるんだらう。さつさへ行つてしまへ……。」

と云つて、門番はいきなり門をびしやんと閉めてしまひました。王様は泣きたいほど情なくなつて、今更あんな悪戯をしなければよかつたと後悔をいたしました。王様は仕方がありませんので、また村の方へ歩いてゆきました。その内にお

腹が空いてきましたので、先刻武士に貰つたパンを取り出して食べなければならなくなりました。その夜は橋の下に一夜を明しました。昨日までは金銀で飾り立てた寢室で暖い羽蒲團にくるまつて樂々と寢られた王の身分が、一寸した間違ひから、乞食となつて石の下に眠らなければならぬとは何といふ情ないことだらうと王様はつくづく思ひました。

王様の乞食はその翌日家來の家へ行つたり街の人を捕へたりして「俺は王だ、俺は王だ」と云つても誰一人信用する者もありませんでした。王様は仕方がないので、それから毎日本當の乞食となつて貰つて歩きました。そして乞食の間違ひからは「王様乞食」と綽名を付けられました。

王様になつた乞食は御城へ入つて、すつかり王様を氣取つて暮しました。乞食は自分が化けてゐるのだと思ふと、餘程王様らしくしないと、乞食と云ふことがわかつてしまひますから、言葉使ひから、歩きつき、それから御飯の食べ工合まで、わざと重々しく氣取つてやりました。家來達は皆きちんと禮儀正しくするので、乞食は無暗にごろりと横になること

も出来ず、冗談一つ云ふことも出来ません。

「乞食はだん／＼と苦しくなつて来ました。一寸散歩しようとしても吃度家來の一人や二人はついて来るので、乞食はもう窮屈で窮屈で堪らなくなりました。」

「王様つて役目は随分つらい役目だ。」と乞食はしみ／＼思ひました。そして乞食の頭には野原の青い草原が浮んで来ました。そこで自由に寝轉ろんで皆んなと歌を唄つたり、冗談を



云つたりしてゐた頃を思ひ出しました。今迄厭だ厭だと思つてゐた野原の生活が今はまたとない幸福のやうに思はれて来ました。「あゝ、王様より乞食の方がどんなに幸せだか知れない。」と思つて、乞食はもう

我慢がし切れなくなつたので、どん／＼と駆け出してお城の門を出てゆきました。家來達は王様はどうしたのだらうと思つて、これもまたその後を追つて駆けてゆきました。乞食は家來が追ひかけて来るのを知つたので、力いっぱい駆けて駆け通しました。街を出て、村に入り、村を出て森の入口まで来た時に、後を振り返つて見ますと、もう家來達の姿は見えませんでした。乞食はやれ／＼よかつたと思つてほつとしました。

「これで俺も本當に安心した。王様なんて、あんな窮屈なものももう懲々だ。俺にとつちやアお城が牢獄で、かうした野原や森が立派なお城だ。あつはつはつは。」

「誰だ、笑つてるのは。」

と云ふ聲がしましたので、見ると木の蔭の草の中に一人の乞食が寝轉ろんでゐました。多分よく眠つてゐたのが、大きな笑ひ聲で眼を覺まされてしまつたらしいのです。王様になつた乞食は仲間の聲だと思つたので、「やア。」と嬉しさに聲を掛けました。すると寝てゐた乞食

は顔をあげて王様

になつた乞食を一

眼見るなり、

「貴様ッ」

と云つ

て、いき

なり飛び

起きて胸

倉をむん

づと掴み

ました。

見ると、

それは乞

食になつてしまつ

た本當の王様だつ

たのです。

「乞食は吃驚してしまひました。乞食は吃驚してしまひました。只今すぐに王冠とお着物と



をお返し申しますから、どうぞ勘辨して下さい。」

と云つて、すぐに王冠とお着物とを王様に返しました。王様は乞食があまり素直なので不思議に思ひました。

「お前は どうしてこんな所へ逃げて来たのだ。」

と訊ねました。

「へえ、王様、わたしはあんな窮屈な職業はとて我慢がな

りません。」

「何……窮屈な職業だと？」

王様はをかしくなつて云ひました。

「矢つ張りお前は乞食が適當してゐるんだ。」

「ほんたうにさうです。王様、わたしがつまらない望みを起

したのが間違ひでした。」

と云つて乞食は、お城の中のことを、詳しく王様に話しました。

そして、

「王様、早くお歸りなさいまし、家來達が心配してゐますか

ら。そして家來達はわたしが身替りになつたことを誰一人知

らないのですから、どうぞ何事もなかつた様子をしてお歸り

になつて下さい。」

「よし、よし、承知した。」

と王様は申しまして、再び立派な王様の姿になつて急いでお城の方へ歩いてゆきました。すると家来達が、大勢駈けて来るのに逢ひました。

「陛下、あなた様はどうなすつたのでございます。急にお城を抜けて駈け出したりなぞなさいまして、私共は大變心配いたしました。」

「何もうまい、俺は一寸運動に出たんだ。」

「へえー」

と云つて、家来達は呆氣にとられました。

運動するなら、お城の中に廣い運動場があるのに、なんでこんな所へ駈けて出たのだらうと、家来は不思議に思ひました。王様はお城へお歸りになると、すぐに多くの家来を集めまして、

「額に二つの黒子のある者は此處へ出て来い。」

と申しました。先日乞食になつた王様にパンを與へたその武士は、確が脚でも受けるのではないかと恐る／＼王様の前

へ出ました。

すると王様は先日自分が乞食に變装したことを話して、その武士の情深いことを大層お讚めになり、澤山のお褒美を下さいました。そしてその武士を政治をする立派な役目に直しました。

それと同時にその位にゐる以前の家来と、武士の頭をしてゐた家来とは、

「お前達は下々に無慈悲だから役を下ける。」と仰言いました。すつと悪い役に直してしまひました。

王様はまた或日澤山の乞食をお城に集めてお馳走をなさいました。

勿論王様に化けた乞食も、その中にゐりました。王様は乞食達と愉快さうに話をなさいました。

家来達も、多くの乞食達も、王様が何んで乞食などにお馳走をなさるのか、さつぱり判りません。誰も彼も不思議に思ひました。

その理由を知つてゐるのは王様御自身と、王様に化けたことのある乞食とばかりでした。(をばり)

幼年 櫻の花 (推薦)

東京市外東中野一六七五

長尾その子

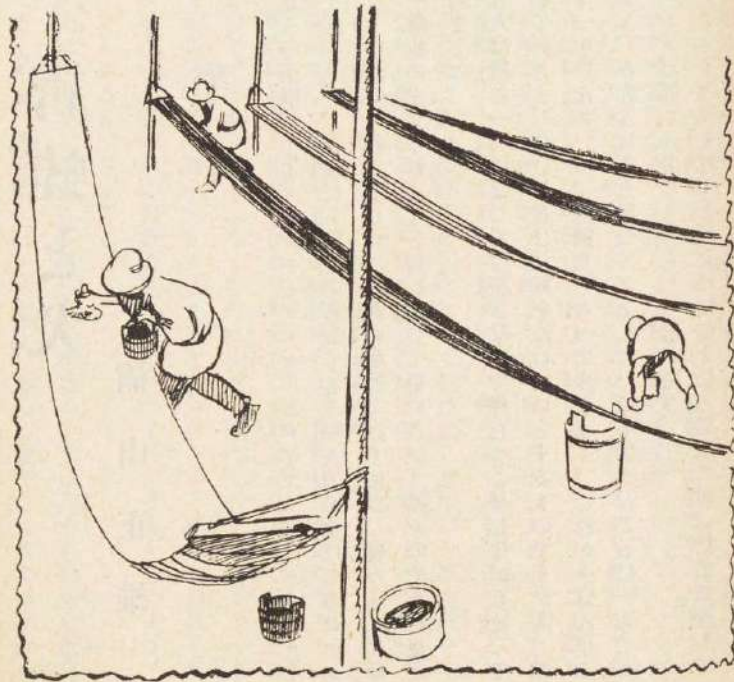
櫻の木がつゞいてる
今は花がさかりです
きれいな花のその下を
電車がゴォ〜通つてる

幼年 染屋 (推薦)

京都市城巽小学校寄五

大八木庄三

私の家は染屋です
品物ボチャ〜染める時
にはかに風が吹いて来て
青いばかしくなりました



青蛙と犬

楠山正雄

青蛙



五人の子供が——ロージエとマルセルとジャックとベルナルとエチエンヌが、お友だち同士そろつてもう一人のお友だちのジャンのうちへ遊びに行きました。五人の通つて行く道は、青々とした草原や牧場の中をうね／＼と折れ曲つて黄いろいリボンのやうに見えるてゐました。

五人は横に一列になつて、小さな肩で押しつこをしながら並んで歩いて行きました。お互ひに列をぬけまいとするものですから、みんな一生けんめいに、歩調をそろへて歩きます。これが一ばん早くていゝ、みんなはさう思つてゐました。でも困つたことに一人、エチエンヌは体が小さくて少しづつ後れます。

エチエンヌはそれでも列をはなれまいと思つて短い足をできるだけのばして、まづかになつて歩きました。おまけにせつせと兩腕をふ

つて勢ひをつけて見ました。けれどあせればあせるほどおくれまゝです。とう／＼一人あとにとりのこされてしまひました。あんまり體がちひらやすがるからで、どうしようもないのです。

そんなら大きな子供たちが、あとから追ひつけるやうに待つてゐてやつたらよさ／＼うなものだとあなたはいふでせう。それはよさ／＼うなものです。子供たちはなかく／＼そんなことはしません。中でも一ばん體の大きい強い奴が「進め」といひます。するとそのあとから中ぐらゐに強い奴が一しよになつて駆け出します。一ばん弱い奴はいつもあとにとりのこされる、これが世の中の當りまへです。

でもまあおきくなさい、この先にお話があるのです。ふとこの四人の先に立つた強者どもが何か往來の上で見つけたものがありました。これはぢつと坐つてはゐないでだしぬけにびよんびよんといふ出しました。とぶはずです、これは小さな蛙でした。往來をつゞきつて路ばたの草原の中へとび込まうといふのです。草原をぬけて畦道のそばの小溝の中の自分の家までかへつて行かうといふのです。そこでとぶこと、とぶこと。

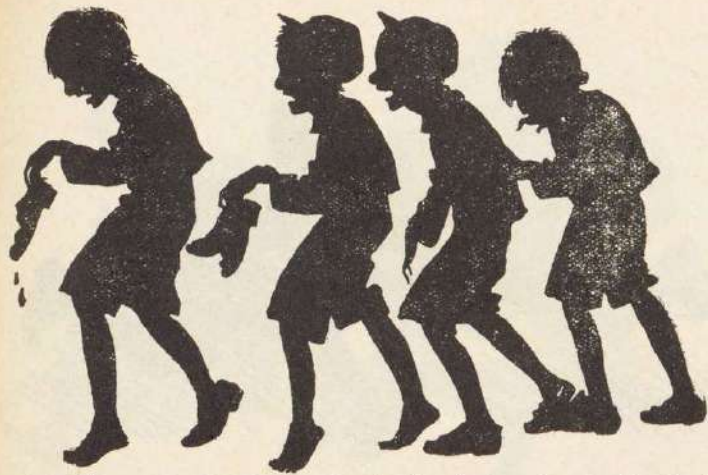
青蛙でした。それは夏のはじめの若葉のやうに生々しい青い色をしてゐました。青い葉っぱが地の上に落ちて風でとんでゐるのかと





ジャックリリスとミローとは、ずいぶん古くからのお友だちでした。お友だちといつても、人間同士ではありません。ジャックリリスといふのは小さい女の子でミローといふのは大きな犬の名前です。でもこの二人は同じ田舎に生れて、子供の時から一つ世界に育つて来ました。ですからお互ひに氣ごころを知り合つてゐるのです。

一體二人はいつから知り合ひになつたのか、二人ともおぼえてはゐませんでした。それは犬にはとてもおぼえきれないむかしのことです、子供にだつてむづかしいことでした。それにそんなことをおぼえてゐる必要もないので、なんでも世界がはじまつてからこつち二人はお友だちなので、二人がお友だちになる前に、一體世界があつたものかどうか二人ともそんなことを考へたことはあり



思はれるくらゐでした。この葉っぱのやうに勢ひよくとぶ青蛙にさはれて四人の子供たちはいつの間にか往來からそれて、草原の中にはいつて行きました。するうち足のうらがじめ／＼するので氣がついて見ると、いつの間にか小さな水草の一本が生えた溝のやうなところへはいり込んでゐました。草をふむと、／＼と下から水づいて来て、力も入れられないのに靴がする／＼泥の中にはいりましたも二足三足歩いて行けば、おそらく膝まで泥にはまつてしまふでせう。青蛙はとうにどこか草の中にかくれてしまひました。まだそこらにゐるのかもしれないが、草だか蛙だか同じやうな色をしてゐて見分けがつかないのです。

でも四人はもう青蛙どころのさわぎではありません。靴も靴下もズボンもインキでそめたやうにまつくろになつてしまひました。この草原の妖女が四人のいたづら兒にとぶ泥のゲートルをはかせたのでせう。

そこへはあ／＼息をきりながら、エチエンヌがやつと追ひついて来ました。そして、四人のお友だちのみじめな有様を見ると、一しよにかなしくなりなりました。

これで訪問も、散歩も、けふの計畫はすつかりだめになりました。いきにはばかに元氣のよかつた強い子供たちがかへりは大しよげにしよげかへつて泥だらけの重たい足をひきすつて行く前に立つて、こんどは弱いエチエンヌが軽い、しやん／＼した足取で駆け出して行く順番になつたのです。

犬

ジャックリリスとミローとは、ずいぶん古くからのお友だちでし

た。お友だちといつても、人間同士ではありません。ジャックリリスといふのは小さい女の子でミローといふのは大きな犬の名前です。でもこの二人は同じ田舎に生れて、子供の時から一つ世界に育つて来ました。ですからお互ひに氣ごころを知り合つてゐるのです。

一體二人はいつから知り合ひになつたのか、二人ともおぼえてはゐませんでした。それは犬にはとてもおぼえきれないむかしのことです、子供にだつてむづかしいことでした。それにそんなことをおぼえてゐる必要もないので、なんでも世界がはじまつてからこつち二人はお友だちなので、二人がお友だちになる前に、一體世界があつたものかどうか二人ともそんなことを考へたことはあり



するとある日のこと、ジャックリリーヌはそれこそふしぎな出来事に出會つて、こはくなるほどびつくりしました。それはふしぎな智慧をもつたむかしの人間の生れかはりで、毛の生えた森の神さまのミローが、どうしたのか、首に環をはめられて、體に鎖をつけられて、井戸のそばの木に縛りつけられてゐるのです。女の子があきれてはんやりながめてゐますと、犬は正直さうな、すなほな目で見返しました。

この犬はきつと自分が神さまだといふことを知らないものだから、おとなしく首環だの鎖だのを人間の勝手につけさせて、黙つて辛抱してゐるのでせう。でも、ジャックリリーヌは何だかおそろしくなつて、犬のそばへよれなくなりました。

神さまのやうな、ふしぎな智慧をもつたお友達が罪人のやうに鎖でつながれたりなんぞして、みんなにひどい目にあひはしないかしら。

こんなことを思ひながら、がっかりしたやうに、首をうなだれてゐる犬のすがたを見ると、なんだか、きふに悲しくなりました。

(おぼり)



三六

ませんでした。なんでも二人の考へるやうにすると、世界はこの子たちと同じやうにまだごく若くつて、おもしろいことばかりでした。

ミローは犬ですけれど、人間のジャックリリーヌよりもずつと體も大きいし、力もつよいのです。犬が前足を子供の肩にのせると犬の頭から胸までが、その肩の上からぬつと出るくらゐです。おそろく女の子はたゞ三日で犬にたべられてしまふでせう。でもいくら體は小さくても、女の子には神さまのやうなえらい徳があつてけつして粗末にはならないのだと犬は考へてゐました。犬は女の子を尊敬してもゐましたし好いてもゐました。よく顔をなめたりするのでも、心から好いてゐるからです。

子供もまた犬が力がつよくつてその上親切なので好きでした。大へんえらい犬だと思つて尊敬してゐました。じつさい犬は女の子の知らない世の中の秘密をいろ／＼知つてゐました。

何かふしぎな智慧が犬にはあるやうでした。なんだかむかし人間のまだゐないごく古い時分住んでゐた別の世界の人間の生れかはりか、それとも毛のはえた森の神さまか何かなのではないかとも思つてゐました。

童話 黄金の鳩

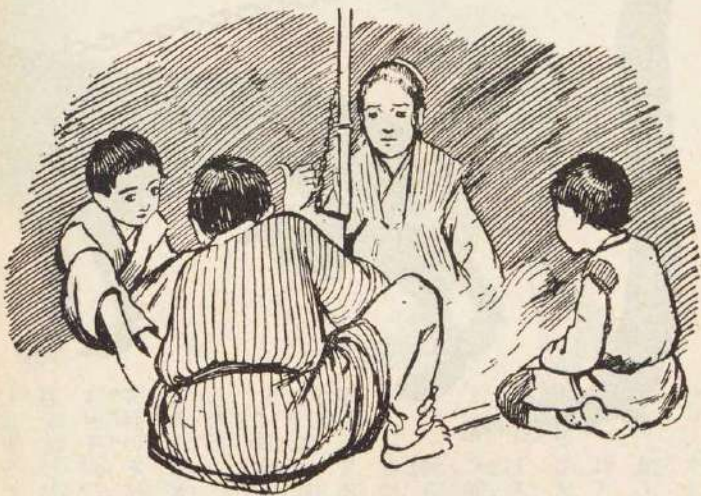
中島 孤島

(登場人物)

樵夫のおかみさん
 樵夫 夫
 繼子長吉
 弟 留吉
 矮人

第一場 山小屋

(山の麓に小さな山小屋があつて、樵夫の夫婦と二人の子が住んでなりました。兄の長吉は、今のお母さんには繼子なので、弟の留吉の方が可愛がつて、長吉のことは、鈍間だの、馬鹿だのといつてゐました。いつも早起きのお父さんが、今朝はまだ寝てゐます。二人の子供は、圍爐裡の側で、お母さんの手傳ひをして、火をくべてゐました。そこへお父さんは蒲團の中から苦しまうに



父「ちやア留が行つて来い!

(お母さんはそれを聞いて、驚いたやうにお父さんの方へ顔を向けてました。)

母「この子をやるんですつて、あんな薄暗い林へ?

父「うむ、留に行つてもらはうよ、長吉ちやア駄目さうだから。」

(それを聞くと、留吉はもうえらいつもりになつて、駄々をこね出すのでした。)

留吉「僕をやるんなら、お辨當に海苔巻をこしらへてくれなけりやアいやだ! それから鮭の大きな切身もね!

(お母さんは目を細くして留吉の方を見ながら。)

母「そりやア、何でもこしらへてあげるよ、お前のことだもの!

(お父さんは笑つて。)

父「ハツ、ハツ、ハツ、それちやア木を伐りに行くんちやアなくつて、辨當を食ひに行くやうなものだ!

留吉「お父さん、だつて食はずにちやア、仕事は出来ないだらう!

(留吉はお父さんをやりこめるつもりで、かういふと、お母さんはすぐに留吉に加勢します。)

留出して来ました。)

父「困つたなア! 昨日林で轉んだ時には、そんなでもないと思つたが、今朝になつたらひどく痛み出して来たよ。こんなあんばいぢやア、とても町へは出られさうもない。困つたなア!

(お母さんは、驚いて、お父さんの方をふり向いて、お父さんの顔から、痛さうになげ出してゐる足の方ですつと見おろしました。)

母「本當に困つたねえ! お前さんが町へ出られなかつたもんなら、家中が干乾になつちまふよ!

父「今日一日も休んだら、いゝかも知れないから、おれの代りに子供を林へやつて見ようよ。」

(心配さうにこの話を聞いてゐた長吉は、お父さんの顔を見ていました。)

長吉「お父さん! おらが行くよ!

(弟の留吉はそばから口を出して、いつもの通り兄さんを馬鹿にします。)

留吉「お前のやうな鈍間に木が伐れるもんか。茨藪でも刈つて来るんだらう!

(お父さんは留吉の方をちつと見て言ひました。)

母「さうとも、留のいふ通りだよ、(といってお父さんの方を睨めながら)お前さんは何でさう人情がないんだらう？」

父「まア、どのくらゐ稼げるか、見てるべえ！ 失敗つたら長吉をやるだ。」

(それを聞いて、お母さんは長吉の方を睨めつけました。)

母「長吉、お前の鈍物にも困つちまふよ。お前さへ人並なら弟にこんな苦勞をさせることはないんだがねえ！

長吉「おらだつて、行けるよ！

母「お前になが出来るものか！ 利口ぶつたことをおいひでない。馬鹿のくせに！(といって長吉をたしなめておいて、留吉の方へ向き)さア、留や、早く支度をおし、お母さんが草鞋を立て、あげるからね！ お前は本當に孝行者だよ！ (お母さんはかういつて、お父さんと長吉の方を睨めつけながら立つて行きました。)

第二場 林

(留吉が大きな斧なかついで、林の中から出て来ました。左の手には大切さうにお辨當の包をなぐへてゐます。留吉は斧をほぶり出して、草の上へ坐りこみました。)

留吉「あ、中々骨が折れる！まア一つ辨當でも食べてゆつくりやらかすとしよう。(といひながらお辨當の包をあけて、中のぞきました)あつたく！海苔巻に、鮭の切身に、玉子焼か！(と大きな聲でいひましたが、誰かに聞かれやしなかつたかと思つて、急に口を抑へて四邊を見まはしながら)まア、誰も聞いてゐなくつてよかつた！ どちら一つ御馳走にならうか。

(かう獨語をいひながら、お辨當を食べようとする、林の中で人の聲がしました。)

聲「えへん！

(留吉はあわて、お辨當の蓋をして、きよろきよろと見まはしました。)

留吉「あ、びつくりした！ 何だらう？

聲「えへん！

(また林の中で同じ聲がしたので、留吉は聲のした方へ顔を向けると、林の中から、白い衣服を着て、妙な笑つた帽子を被つた、長い髭を生やした、小さな老人が、よぼよぼと出て来ました。老人は留吉の前へ来ると、叮嚀におじぎをしました。)

老人「今日は！

(留吉は坐つたまゝで、じろくくと老人の様子をながめてゐました。)

留吉「今日は！

老人「一人で御遊山ですか？

留吉「いえ、僕は遊びになんぞ来やしな！ 僕はお父さんの代りに木を伐りに来たでんす！

老人「ほう、それは感心だ！ 少し手傳つてあげようか？

留吉「僕は他人に手傳つてもらふのは大嫌ひです！

老人「ほう、それは困つたな！(といひながら、腰をのぼして)實はお前の仲間になりたいと思つて、来たんだが……

(留吉は氣味が悪さうに、じろくくと老人の姿を眺めながら)

留吉「仲間になりたいつて？

(老人は留吉の顔を見て、うなづきながら)

老人「さうなんだよ！ わしはな、今朝からもう大分歩いて来たで、腹が減つて倒れさうなんだ。お前が大きな辨當をもつてるのを見たから、少し分けてもらはうと思つて来たのさ！

留吉「お氣の毒だが、それは駄目です。この中には僕の分きりつきや入つてゐないんだから。

老人「握飯の欠片でもいゝんだが、少し分けてもらへまいか？ どうだらうの？

留吉「いけない！、僕だつて、遊びに来たんぢやないから

か？ どうだらうの？

留吉「いけない！、僕だつて、遊びに来たんぢやないから



このくらゐは食はなけりや、力が抜けて、木が伐れやしな
い！
（それを聞くと、老人は目を眞赤にして、留吉の顔を見つけれ
がら、手を振上げて脅すやうな聲でいひました。）
老人「覚えてゐろ！ うつかりすると、辨當も、手もなくな
つちまふぞ！」

（かう言つて、老人はすたくと行つてしまひました。留吉は老
人の後を見送つてゐたが）

留吉「いま／＼しい老爺だ！ それでもとう／＼おつばらつ
てやつた！ どれ！ 辨當にしようか。（と言ひながら、お辨當
の蓋をあけて見て、びつくりしたやうに）おや！ どうしたんだ
らう？ 海苔巻がみんな棒切になつちやつた！ 玉子焼が木
の葉に！ 蛙の切身が木片に變つちやつた！（と言ひながら、
一つ／＼林だの、木の葉だの、木片だのをつまみ出して、草の上へ
棄てる）ほんとにいま／＼しい老爺だ！ みんなあの老爺の
仕業にちがひない！ あいつはきつと魔法使だらう。それ
でなけりや天狗だ！ さうならさうだつて、早くいへば、玉
子焼の一切ぐらゐは分けてやつたのに！ ほんとに損しち
やつたなア！ もう駄目だ！ 仕様がな！ 「ちえッ」だ！
（といつて留吉は立つて草の上を歩いてゐたが）仕方がないから

(歌)

うそだと思ふなら
山へ来て見させ
山ぢやつゝじの花ざかり
林ぢや野火かと間違へて
雉はけんく
山鳥はほろく

（長吉は手拭で頬被りをして、左の手に小さなお辨當をぶらさ
げてゐます。そしてかう歌ひながら、昨日留吉が坐つてお辨當を
つかはうとした草土手のところまで来ると、長吉は留吉と同じや
うに草の上へ斧を置いて、坐りかけました。）
長吉「どつら一休みして、辨當でもつかはうか（といつて、草
の上へ腰をおろして、足をうんと踏みのばしながら）やれ／＼く
たびれた！ 父さんは足をいためるし、留の奴は餘計な怪
我なんかしやがるし、お母アはぶつ／＼いふし、おらに行
つてこいといふから、来たんだが、二人前の仕事をしべえ
と思ふと、中々樂ぢやアねえよ！ けれども思つたよりは
仕事が遅んだから、あとはもう些とべい伐りやアいゝん
だ！ まアあれだけしておけば、もう安心だ！（といひな

早く木を伐つて歸るとしよう！ さつき見ておいたやつを
伐つて行かうよ。
（かう言つて留吉はまた斧をかついで、林の中へ入つて行きまし
た。暫くすると、林の中で「アッ！ しまつた！」といふ聲が聞
えたかと思ふうちに、留吉が左の手を抑へながら、顔をしかめて
林から出て來ました。）

留吉「あゝ／＼あぶなかつた！ もう少しで腕を落してしま
ふところだつた！ 今日はまだ何といふ悪い日なんだら
う！ 早く家へ行つて、醫者を呼んで來てもらはなくては
ア！
（留吉は左の手を痛さうに抱へながら、惜々と山路を下つて行き
ました。）

第三場 林

（留吉は怪我をして歸つた翌日でした。今度は兄の長吉が、お父
さんの代りに、木を伐りに來て、朝から林の中で働いてゐたが、
もう正午時分になつたので、斧をかついで、何か唄ひながら、林
の中から出て來ました。）

（お辨當の包をほどいて） さア、大急ぎで腹をこしらへ
ておいて、一いきに片づけてしまはう（辨當の蓋をあけて見
て）何が入つてると思つたら、梅干一つか！ なアに梅干
で澤山だ。腹の減つた時は、何でもうまいからなア！
（かう言つて、長吉は辨當を食へかけると、林の中で人の聲がし
ました。）
聲「えへん！
（長吉は不思議さうにあたりを見廻しながら）

長吉「おや！ 何か言つたやうだつたが、誰か來たのか知
ら！ こんな時は誰でもいゝから、仲間があるといゝなア！
（といつてゐるうちに）
聲「えへん！
（と同じ聲がして、林の中から昨日の老人が出來ました。そし
てよほ／＼と長吉の前へ來て、叮嚀におじぎをしました。）
老人「今日は！
（長吉は老人の姿を見ると、あわてゝ頬被りを脱つて、挨拶をし
ます。）

長吉「今日は！
老人「お前さんはお一人かな？
長吉「はい、一人きりです。」

老人「お前さんも仲間はお嫌ひな方かな？
 長吉「どうして〜、わしはさつきから、誰でもいいから、仲間がくりやアい〜と思つてゐたところなんだ。
 老人「ほう、それはよかつた！ (といひながら、長吉の方へぐつと顔を出して) 實はな、わしは今朝から何も食はないので、腹が減つてたまらないんだ。(といつて、長吉の持つたお



辨當の中をのぞき込むやうにして) どうかね、その辨當を少し分けてもらふわけにはなるまいかね？
 (それを聞くと、長吉は氣の毒さうに老人の顔を見て、いひました。)
 長吉「あなたに食べられるかどうか分らないが、こんなものによければ、みんな食べて下さい。(といつて、お辨當を老人の前へ出して) わしなんぞは、なアに一度ぐらゐる食はなくつたつて平氣なんだ、なれてゐるから。
 (老人はそれを聞くと感心したやうにほんんと手を拍つていひました。)
 老人「お前は感心な子だ！ お前の志は受けたよ。辨當の中をこらん！
 (長吉はさういひられて、手に持つたお辨當の中をのぞいて見ました。)
 長吉「おや！ どうしたんだらう？
 海苔巻に、玉子焼に、鮭の切身に……こんなものはなかつた筈だつたが、どうしたんだらう？」

(かういつて不思議さうにしてゐる長吉の顔を見て、老人はにこにこ笑ひながら、)

老人「長吉！ それはお前の親切のむくいだ。わしはただお前の親切をためして見たのだ。お前は感心な子だから、もつと好い運をさづけてやる。あすこに (といつて林の方を指さしながら) 栗の大木があるだらう。あれを伐つて見なさい！ するとあの木の根子に何かあるから、それを持つて歸りなさい！ いゝかね？ 左様なら！

(といひすて、老人はすたく〜と行つてしまひました。長吉は老人の後を見送つてゐたが)

長吉「驚いたなア！ (といつて溜息をついて) あの人はきつと魔法使ひだ！ それでも面白い老爺さんだ！ (といひながらもう一度お辨當の中をのぞいて見て) あるぞ〜！ これはうまさうだ！ (といつて、海苔巻や玉子焼をつまんでは食べ、つまんでは食べてゐたが、そのうちにみんな平けてしまつて) ああ、うまかつた！ それちやア一つ仕事にかかるとしよ

う！
 (かういひながら、長吉はお辨當の殻をそこへおいて、斧を持つて「うんとこしよ」と立上つて、前と同じ歌をうたひながら、林の中へ入つて行きました。)

(歌)

うそだと思ふなら、
 山へ来て見させ、
 山ぢやつゝじの花ざかり、
 林ぢや野火かと間違へて、
 雉はげんく、
 山鳥はほろく、

(長吉の姿が見えなくなると、續いて林の中から木を伐る音が聞えて來ました。暫くすると、長吉は、右の手に金色の羽をした鳩を抱へ、左の手に金色の卵の入つた集を持つて、跳りながら林の中から出て來ます。)

長吉「黄金の卵に、黄金の鳩！ 美麗だ、美麗だ、美麗だなア！ (と足拍子を取りながら、前の草土手のところまで來たが) もう父さんは木なんぞ伐らなくつたつてもいゝや！ 早く歸つてみんなに見せてやるべい！

(といひながら、長吉は黄金の鳩と黄金の卵を抱へて歸つて行きました。)

第四場 山小屋



(樵夫と樵夫のおかみさんが、圍爐裡の前に坐つてゐると、その近くに留吉は、縋帯をした左の手を、首から吊しながら蒲團の上へ起き上つてゐます。おかみさんは始終心配さうに留吉のそばか

り見てゐたが、そのうちにかう言ひました)
母「留や、何か少したべて見ないかえ？」
(留吉はお母さんの甘い言葉をきくと、急に苦しさうな聲を出して、うなりながら)

留吉「うんにや、何も食たかアないよ！
母「まア、さういはずに、我慢して食べて見ろよ、お前の大好きなお饅頭でもこしらへてやるべえから。

(かういふはれても、留吉はまだ苦しさうに顔をしかめながら、黙つてゐます。お父さんは火を見つめて、何か考へてゐたが、ひとりごとのやうに)

父「長吉がうんと伐つて来てくれなけりやア、困つちまふぞ！
母「長吉になにが伐れるのですか！せめて辨當の代だけでも、かせいで来てくれれば、儲けものですよ！

(かういつてゐるところへ、長吉が黄金の鳩と巢を兩手に抱へて歸つて来ました。お父さんは長吉の姿を見ると、待ちかねたやうに)

父「長吉、歸つたかや！ やれ／＼苦勞の苦勞！ (といつて、じろ／＼と長吉の方を見ながら) どうだ、うまく伐れたか？

長吉「あ、伐れたよ！ (といひながら、圍爐裡のところまで来て) だが、父さん、それよりかもつとい、物を見つけて来ただよ。これを見なさい！ (といつて、黄金の鳩と卵をお父さんの目の前に出して) こんな鳩をつかまへて来ただよ。

(これを聞いて、お父さんも、お母さんも、留吉も、一どに鳩の方へ目を向きました。)

留吉「あッ、黄金の鳩だ！
母「それから黄金の卵も！

父「そんなものをどこで捕へた？
長吉「木の根子にすくんでゐただよ！
母「留や！ (と留吉の方を見て) どうしてお前には見つからなかつたらう？

留吉「怪我さへしなかつたら、僕が見つけたんだ。
父「長吉！ それでもよく見つかつたなア！
長吉「父さん！ 白い衣服を着た小さな老人が教へてくれたんだもの！
(それを聞いて、留吉は側を向いて、獨言のやうに)

留吉「あ、馬鹿を見た！ 辨當を分けてやるんだつけ！ (といつたが、つか／＼と長吉の方へ寄つて来て、大きな聲でいひました) その人が僕にも教へたんだ。僕に取るつもりで教へてくれたんだから、こつちへ渡すのが本當だ！
(かういつて、留吉はいきなり右の手で鳩をつかまうとしたので、長吉は驚いて、體の後へひくと、留吉は引張られるやうにしてもう少しで前へのめりさうになりました。)

留吉「あ、あ、どうしたんだらう？ 手が鳩の身體にくつついてはなれなくなつちやつた！
(お母さんはそれを見るとびつくりして立つて来ました。)

母「まア、お前どうしたの？
(といひながら、留吉の手を鳩の體からはなさうとしました。)

留吉「あ、痛い／＼！ お母ア、はなしてくれ！
(お母さんは手をはなさうとしたが、自分の手もしつかりと鳩の體へくつついてしまつてはなれません。)

母「おや！ あたしの手もはなれないよ。
(それを見て、今度はお父さんが俯ひ出して来ました。)

父「これ！ 何をしてゐるんだ！
(といひながら、側へよつて、二人の手をつかまへてはなさうとしました。)



母「あ、痛い！ お前さん、駄目ですよ！ 父「おや！ こりやいけない！ おれの手もくつついちゃつた！

母「それならなさい！ 長吉をやれば、きつと馬鹿なことをして来るといつたんだが、案の通りこんな物を持つて来たぢやありませんか！

（長吉は三人の手が、鳩の體へくつついてしまったのを見て、笑ひながら）

長吉「おらが鳩をとらうと思つたからだよ！

留吉「おい、兄ちゃん！ 後生だからお前の鳩をはなしとくれよ！ 長吉「だつておらがどうしべえ？ おらがしたことちやアねえもの！

（といふうちに、前の場の老人が、戸の蔭から出て来ました。さうして長吉の方へ進みながら聲をかけました。）

老人「それはわしがしたんだ！ その鳩はわしのものだ！

（これを聞いて、お父さんも、お母さんも、留吉も一どに老人の方へ目を向けました。）

留吉「あ、あの魔法使ひだ！ 母「お前がしたんだつて？ 父「お前さんの鳩だつて？ 老人「さうだ！ 長吉は溫和しくつて、よく働いて、そして親切な子供だから、わしがあの鳩を褒美にやつたのだ！ 留吉のやうな自分勝手な、不人情な意情者とは、譯がちがふからな！

（かういふれて、留吉は恨めしさうに老人の顔をながめながらいきました。）



をつくすものだ！（といつて、長吉の手をとりながら）長吉はわしが寶の山へつれて行つてやる。だが、お前たちは（と三人に向つて）一生山小屋で暮すがいい。お前たちには黄金の鳩は見つかりつこはない！

（かう言つて、老人は長吉の手を曳いて、歩き出しました。同時に黄金の鳩は三人の手の下から飛立つて、三人は一どに尻餅をつきました。）

（幕）

◆童謡

野口雨情選

かへる

宮城縣 赤本路 灯

さあさ雨ふる
ビヨーン／＼／＼
みんなて歸ろよ
ビヨーン／＼／＼
おゝばこかつこで
ビヨーン／＼／＼

小鳥の國

大阪市 都外川 淳

煙のお米を
とつてつた
雀がお米を
とつてつた
目白の巡査が
追ひかけた

唐辛煙

仙臺市 櫻田はるを

唐辛煙の
赤とんぼ
秋のお祭賑かね
とんほのお祭
賑かね

梅雨ばれ

東京 大井須美子

梅雨ばれ
小ばれ
夏日和
蛙がはらわた
はしてゐた

静な晩

京都市 水内敷之助

静な晩です夜中です
外には淋しく
坊さまの
お鐘がひとりでないです

こつこつ駈ける

三重縣 佐藤 掠彦

姫りむねる
子尊澤小



(入選)

君子さんは大變に可愛い、子供でした。君子さんが寝てゐる時のお顔は女神様の様でした。其可愛い、君子さんは、海が一番好きでした。あの白く飛び散るしぶきが……。

或日君子さんは、近くの海岸へ行くために松林を通りますと、砂の上に、一つキヤラメルがころがって居ました。キヤラメルは君子さんを見ると、
「お嬢さんどちらへ。」と聲をかけました。君子さんは、
「アノ美しい海へ。」とニコ／＼しながら答へました。するとキヤラメルは、「およしなさい、今日は大變波が荒うございますよ。」とをしまへました。「有難う。」と君子さ

んは答へたばかりで、海の方にとんで行きました。だつて、とてもあの美しい海を見ずになど歸れなかつたのですもの。

君子さんが海邊につきますと、いつもより波は少し荒れて居りましたが、美しい海に來たので、君子さんはうれしくて學校でならつた海の唱歌を歌つて居りました。波の方では、朝から一人も海が荒いので來なかつたのに、こんなに可愛い、子供が來たので、ドン／＼波を君子さんの方に寄せて來ました。

君子さんはびつくりして、逃げようとする間もなく一つの大浪は君子さんを攫らつて海へかへりました。それから君子さんは何も知りませんでした。波達は君子さんの側で、「するぶん可愛い、子だね。」などいろ／＼と君子さんをとりまいてお話をしてゐましたが、あたりが暗くなつて、向ふからお月様がおのほりになると、
「又しかられるよ。」と念いでいたつら波達はお家へ歸りました。

お月様が御出になると、あたりの波は静かになりました。お月様は、美しい銀の浪をサアツとお流しになりました。すると、其中から美しい人魚が一人出て、美しい聲で不思議な唄を歌つて遊んで居りましたが、その人魚は浪の上をワツリ／＼と浮いてゐる物に氣がつかしました。

それはまだ人魚が見た事もないほど美しいそして可愛い、君子さんでした。人魚は星の御殿のお姫様が天からお落ちになつたのだと思つて、つめたくなつた君子さんを抱いて眞珠の御殿に歸りました。眞珠の御殿といふのは龍宮城から五千里も離

馬々小馬

とつとと駈ける

櫻の花が ちら／＼散るに

とつとと駈ける

日暮

群馬縣 左部壽一郎

お山は一面 雪の雲
野原はすつかり雪筵
冷い風が吹いてたが
今日も日暮になつちやつた

椰子の木

瓜哇 三上よしを

椰子の木は
ヒヨロ ヒヨロ 高い
せい高だ
瘦つほで せい高だ

雲雀の子

東京 福多眞砂子

おしやべり おしやべり
雲雀の子
米糠三谷つかんだら
掬入するのは
よさつしやい

めじろ

京都府 玉井紫水

悲しい聲で啼く鳥は
あれは何鳥
めじろ鳥
小さな子供がございます

啼いた鳥

仙臺市 南日よね

いま啼いた鳥
どれのうちの
どれだ
おつきく口あいて
もう一遍啼いてみる



れた所に美しくそびえて居りました。そして、其名のどほり何處も彼處も眞珠ばかりでした。

眞珠の御殿の王様は、君子さんを柔かなおふとんに寝かして不思議な「命の水」を取り出してふりかけました。すると今までスヤ／＼と夢路をたどつてゐた君子さんは、美しい瞳をバツチリとひらいてあたりを見廻しましたが、君子さんの大切なお母様は見つけ出す事が出来ませんでした。この眞珠の御殿には、御姫様がゐらつしやらないので、君子さんとうとう眞珠御殿の乙姫様にする事になりました。君子さんの御病氣がなほると、人魚の侍女に導かれて乙姫様の美しい玉座につきました。然しあまりあたりが光りか／＼やくので、眼を開けてゐる事が出来ませんでした。君子さんも可愛い、眼をつぶつて居りましたので、いつかそれが御殿中に廣がつて、君子さんの事を「るねむり姫」と呼ぶやうになりました。それから幾年立つた事でせう。君子さんのお母さんの髪の毛も白く、白毛で一ぱいになりました。けれども、君子さんは小さい時海に遊びにいつたきりもどりませんでした。お母様はおろ／＼泣きながら海邊を皆などお探しになりましたが、波間にゆら／＼と、君子さんのはいてゐた赤い下駄がうごいてゐるばかりで、波達は知らん顔をして居りましたし、又松林のキャラメルも砂にうつまつて見えなくなりました。お母さんはいつても「君子は海の女王になつたのだらう。」と、老の涙をこぼしました。

と、老の涙をこぼしました。



流さたれ蟻

植松壽樹

太郎さんと花子さんが裏の草原で遊んで居りました。そこは柔かな草が一面に生えた草原で、黄色の蒲公英、紫の葎、あかい櫻草などが刺繍をしたやうに咲き出して居りました。裸足になつてその上を歩いて居ると、足の底が冷々として何かに優しくくすぐられるやうな心持が何とも云ひやうもありません。二人は花束をこしらへて見たり、駆けつこをして見たり、スケートのやうに草の上を滑る真似をしたりなどして遊んで居ました。暖かい日がほかくと照りつけて、だんだんに身體がだるく好い心持に疲れて来たものですから、花子さんは到頭草の上に坐りこんでしまひました。「やあ、額から汗が出て居らア。もう草臥れたのかい、花ちゃん弱いなア。」

と太郎さんは笑ひながら、まだ負けない氣になつて鹹立などをして居りました。

「少し休みませうよ、私草臥れたのよ」

花子さんはハンカチで汗を拭きながら答へました。

そこは恰度綺麗な流の畔で、はこべ、増草などが毛氈を敷いた様にはびこつて居ります。星の形をした白いはこべの花、深い海の様な色をした増草の花、花は細かでも撒き散らした様に澤山咲いてゐるのが、一ぱいに日を受けて眩しい位でした。

太郎さんは花子さんの傍に並んで坐りながら、「あ、花ちゃんの家の二階が見えるね、蒲團が乾してあるね。」

と町の方を指しました。杉の生えた小山の麓に、一かたまりの人家が並んで、土蔵の白壁などが處々に光つて居ります。

「あら、太郎さんとこの松の木も見えるわ。あの半鐘の側のがさうでせう。」
と花子さんも町の方を指しました。町の真中のあたりに火の見櫓が立つて、その上に鳶が一羽ゆるやかに輪を回して舞つ

て居るのが見えました。

二人が町の方を眺めながら坐つて居る間に、太郎さんは何心なく草の葉をむしつては前の流に投げ込んで居ましたが、やがて、其の草の葉がもつれ合つて流れて行くのに眼がつくと急に立ち上つて、

「花ちゃん、舟を拵へて流さない？」

さう云ふなり、先に立つて歩き出しました。流れの少し下の方には一叢の葎が青々と芽を出して居るのです。太郎さんが其の葉を摘んで小さな舟を拵へて居るところへ花子さんも来たので、二人がかりで葎の葉の舟を拵へました。いくつもいくつも拵へました。

それから、その一番拙に出来たのから順々に流しはじめました。先に流したのが見えなくなると次のを流し、それが見えなくなるまで見送つてから又追ひかけて後を流すやうにして居りました。皆好い鹽梅に流れて行きました。葎のまはりも靜かに廻つて、柳の枝の水の中に垂れたのを避けて、板橋の架つてゐる下あたりまで行くと、何れも見えなくなるのでした。

たうとう一番巧く出来た舟が二つ残りました。太郎さんはそれを唯流してしまふのは惜しくて、何か乗せて流したら面白いだらうと云ふ氣がして来ました。恰度足もとに蟻が澤山這つて居たので、早速一匹捉へて舟の中に放しました。それを見て居た花子さんは驚いて、

「あら、そんな可哀さうなことをするものぢやなくつてよ。お止しなさいよ。」

と云ひながら、今流さうとして居る太郎さんの手を抑へました。

「可哀さう？ 嘘云つてらア、蟻なんか神経が無いから平氣ですよ。」

と強情な太郎さんは構はず流してしまひました。逃げ場を探して小さな舟の中をまご／＼して居る蟻を見ると、太郎さんは面白くて堪りませんでした。それで、花子さんの止めるのも聞かずに、残りの舟の中にも又一匹の蟻を乗せて流してしまひました。

「随分残酷なことをする人ね、太郎さんは。私も一緒に遊ばないわ。」

さう云つて花子さんは向ふを向いてしまひました。

「残酷だなんて生意氣な言葉を知つてるね、蟻なんか蟲ぢやないか、へへんだ。」

太郎さんは負けずに云ひ返して、その儘草の上にごろりと仰向きに寝ころぶのでした。「花ちやん怒つたの知ら？」などと、考へながら、空を流れて行く雲を眺めて居ると、次第に眠氣がさして来て、遂好い心持にう／＼として來ました。雲雀の聲許り何處ともなく樂しさうに聞えて居るのでした。

二

何時の間にか、太郎さんは小川の縁をぶら／＼と歩いて居りました。小川は草原の中から菜の花畑の中にはいり、やがて猫柳の茂つた下を流れて、その先で小さな水車場の方へと分れて行くのでした。

ふと氣がついて見ると、水の中へ折れ曲つて居る菜の花の先に引か／＼つて、小さな葦の葉の舟が今にも巻き込まれさうに水に揉まれ／＼して居ります。

「僕の流した舟だな」



と氣がつくと、急に足を止めて注意せずには居られませんでした。

「こんな處へ流れて來たのかなア。外の舟はどうなつたらう？」

などと思ひながら、今にもそこを離れて流れ出しさうに見えたり、引つくり返つて水に吞まれさうに見えたりするのを、はら／＼して眺めて居りました。すると不意に

「そら、しつかり捉り給へ、そらッ」

と云ふ聲が聞えました。見ると、舟の中に一匹の蟻が居て、丁度舟の引か／＼つた菜の花の先にすがり付いて助からうとし

て居るのを、菜の花の先にも蟻が一匹居て、頻りに氣を揉んで居るのです。

「い、かい。そら、そこだ。」

と云つたのは菜の花に居る蟻でした。その蟻は後脚で菜の花に捉つて、前脚で舟の中の蟻の前脚を捉へて引き上げようとして居るのです。菜の花も舟も水に揉まれて、止む間もなく動いて居りますから容易のことではありません。

漸くのこと、舟の中の蟻は上の蟻の前脚にぶら下るやうに捉つて、舟を離れることが出来ました。そのはずみに、舟は菜の花の先を離れたと思ふ間に忽ち引くり返つて水の中にまぎれてしまひました。

二匹の蟻は、それから花を傳ひ葉を傳ひ、莖を傳つて漸く岸まで這つて來ました。二匹は暫くの間抱き合ふばかりに身體を寄せて、無事に助つたことを喜ぶやうに見えました。

「お互にとんだ災難だつたね。」と一匹が云ひました。

「然し、怪我がなくて先づ仕合せだよ。」と一匹が答へました。

「もう少しで水車に巻き込まれるところだつた。僕はどうしようかと思つたよ。時に、君は何處で上陸したの？」

「それぢや、花子さんの家は見えるかい？ 荷圓が乾してあるだらう。」

「矢つ張り見えない。」

さう答へて置いて、黄色に咲き揃つた花の上を彼方此方歩き廻りながら、方々を眺めて居りましたが、急になさけない聲を出して、

「駄目だ〜。」と叫んで、轉がるやうに下へ下りて來るのでした。

「こゝは島だよ。折角命が助かつたと思つたら矢張り駄目だつた。あゝもう家へ歸れないんだ。」

さう云つた聲は泣聲になつてゐました。二匹は又髻をつき合せてしく〜泣いて居るやうに見えました。

そこへ何處から出て來たのか、不意に大きな蟻が一匹あらはれました。大きな蟻！ あの二匹の蟻の十倍もありさうな大きな蟻です。眞黒な鐵の甲を着たやうな體、針金のやうな脚、角のやうな髻を振りたてゝ大きな口をモグ〜して居る様子はまるで蟻の中の鬼とでも云はれさうに見えました。

二匹の蟻はこの大蟻が近づいて來たのに氣が付くと、ギョ

「僕の舟は初めから水がはいつてるのだから、とても駄目だと思つて居たら、果して難船しちまつた。それでも好い鹽梅に岸に流れ着いたので助かつたよ。あゝ苦しかった。」

さう云つて、お互に親しさうに髻と髻とを觸れ合つて喜んで居ります。

「一體こゝは何處だらう？ 随分遠い處へ來ちまつたね。君歸り道を知つてるかい？」と一匹が心細さうに聞きました。

「そりや、此の川を流れて來たのだから、この川に副いて上つて行けば歸れるさ。だけど、あんまり遠いと途中で草臥れてしまふね。」

と一匹が答へて暫く其處等を見廻して居ましたが、やがて其處で一番高く伸びた菜の花のところへ走つて行つて、するすると上り始めました。

「オーイ、君、半鐘が見えるかい？」

と下から一生懸命の聲で聞きました。漸く一番てつべんまで這ひ上つた蟻は、黄色い花の上で背伸びして川上の方を眺めました。

「見えないよ。」

ツとして急に逃げ出さうとしました。

「逃けたところで、どうせ島の中だよ、ハツハツハツ……」

大蟻は大きく笑ひながら憎々しい程落ち付いて居るのでしたが、二匹の方ではもう一生懸命です。何處と云ふ目的もなく夢我夢中で駆け出しました。然し何分大きさが違ふので、いくら精一杯に逃げて見ても駄目でした。大蟻の方では慥々として歩いて來ます。何時でも捉まへようと思へば捉まるのを、わざと冗談半分に追ひ廻して面白がつて居ると云つた恰好でした。

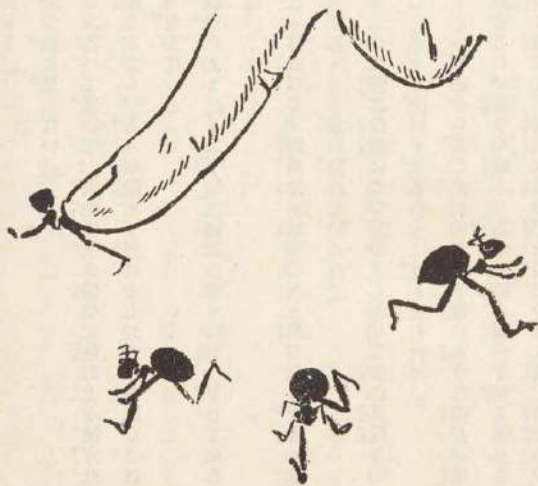
すると、死物狂ひで逃げて行く二匹の蟻の行手に、まあ、どうでせう、同じやうな大蟻が、何時の何に出て來たのか、一列に並んで待ち構へて居るのです。二匹はいよ〜、絶體絶命になつてしまひました。

「あゝ、いよ〜駄目だ。」さう云つた一匹は脚がすくんで、へたばつてしまひました。

「そんな弱いことどうする。しつかり仕給へ。ナーニ、かうなつたら命の續く限り闘ふばかりだ。」

と一匹が友達の手を引立てゝ闘しました。然し、一匹の方は

もう腰が抜けて立つことも出来ないやうでした。
『よし。さあ、かうなつたら何でも来い。』と意氣地のない友達をかばふやうにして、身構へながら叫びました。



六〇
太郎さんは、今迄はどうなることかと面白半分に見て居りましたが、こゝまで来ると流石に可哀さうだなと云ふ氣がして来ました。これは援けてやらなければなるまい、と思つて居るうちに、もう、喧嘩が始つて居るのでした。小さい蟻はなか／＼勇敢でした。大勢の大蟻の中へ突進して、脚に噛みついたり、尻に噛みついたり、誰彼の見境もなく攻めつけるものですから、大蟻の方では味方同士で脚を踏まれて轉けたり、鉢合せをして眼がくらんだり、却て一方ならぬ混雜になりました。

『援けて呉れ！』

と不意に叫び聲を出したものがありません。それは腰を抜かした蟻を、三匹ばかりの大蟻が引摺つて逃けるところでした。

『あ、著生め、友達を、』と云ひながら勇敢な小蟻は大蟻の圍み突き破つて其の跡を追ひかけました。

太郎さんは、もう黙つて見ては居られなくなりました。そこで、いきなり手を伸ばして、一匹の大蟻を指の先で押しつぶしました。意外な敵に一時は驚いて亂れ立ちましたが直ぐに盛り返して、今度は太郎さんの指のまはりへ一度に集つて



て居るうちに、何時の間にかぞろ／＼腕の方へ這ひ上つて来ました。これは失敗つたと思ふうちに、もう彼方此方をチクチクと噛みはじめるのでした。

『あ、痛い〜。』

太郎さんは思はず腕を振り廻して、蟻を振り離さうとしました。

三

『何して居るの？ 寝ながら腕を振り廻したりしてさ、をかきな太郎さん。』

さう云ひながら、花子さんが顔を覗き込んで居ました。太郎さんは、眼を開いて見ると先刻の流れの縁に失張り寝ころんで居るのでした。

『夢を見てたんでせう？ 太郎さん。花子さんは笑ひながら聞きました。』

太郎さんは起き上つて、暫くはキョトンとした顔をしながら、蟻に噛まれたと思つた右の腕を擦つて居りました。その顔がかしいと云つて花子さんは腹を抱へて笑ひました。

来ました。

『此奴め、此奴め。』と云ひながら、太郎さんは手當り次第に押しつぶして居りましたが、あまり其れにばかり氣をとられ

太郎さんは今の夢の話詳しくしてから、

「先刻の蟻は本當に可哀さうなことをしてしまつたね。今の夢見たやうに何處かで慮められて居るかも知れないよ。」としてみふくとした調子で云ふのでした。

「だから援けにおいでなさいよ。」

「援けにつたつて、今のは夢だもの。僕の流した蟻は何處へ行つたか分りやしない。だけど」と太郎さんは一寸考へて、

「だけど、この下の方に島があるか知ら？ 菜の花の咲いた島か？」

「あるかも知れないわ、遠い／＼ところに。」

花子さんは夢を見るやうな眼付で、流れの下の方をすつと見渡しました。さうして、

「島へでも流れ着いて居ると可哀さうね。」

と淋しさうな顔をして云ひ出しました。それから暫く二人で何か相談して居りましたが、今度は丈夫な助け舟を拵へて流してやらうと云ふことに決めて、二人は大急ぎで家へ歸つて

来ました。

太郎さんは早速お母さんにねだつて、羊羹の折とお箸とを

出して戴きました。羊羹の折は其の儘舟になりました。三本

のお箸は三ところにてたられて立派な帆柱になりました。それから、今度は兄さんから赤いインキと紙とを借りて来て小さな旗を澤山拵へました。それを糸に貼りつけて、帆柱から帆柱へ張り廻したので、忽ち綺麗な満艦飾が出来上りました

「さあ、よし。」太郎さんは、それを手にすると勇み立つてもう直ぐに出かけようとするのでしたが、

「一寸お待ちなさいよ。」と花子さんに呼び止められました。花子さんの手で真中の一番高い帆柱の先に、大きな旗が貼りつけられました。その旗には赤いインキで

タスケアネ、タスケアネ

と書かれました。今年二年生になつた花子さんが一生懸命に書いたので大層巧い字が書けました。

「これで好い／＼、花ちゃんは巧いね。」太郎さんは感心して云ひました。

捧げるやうにして舟を持つた太郎さんの後について、花子さんも息を切らしながら駆けて行きました。

草原では相變らず雲雀が長閑に啼つて居りました。(をほり)

ほたる (童話)

永橋 卓介

ゆらり ゆらりと

大 螢

草の中から

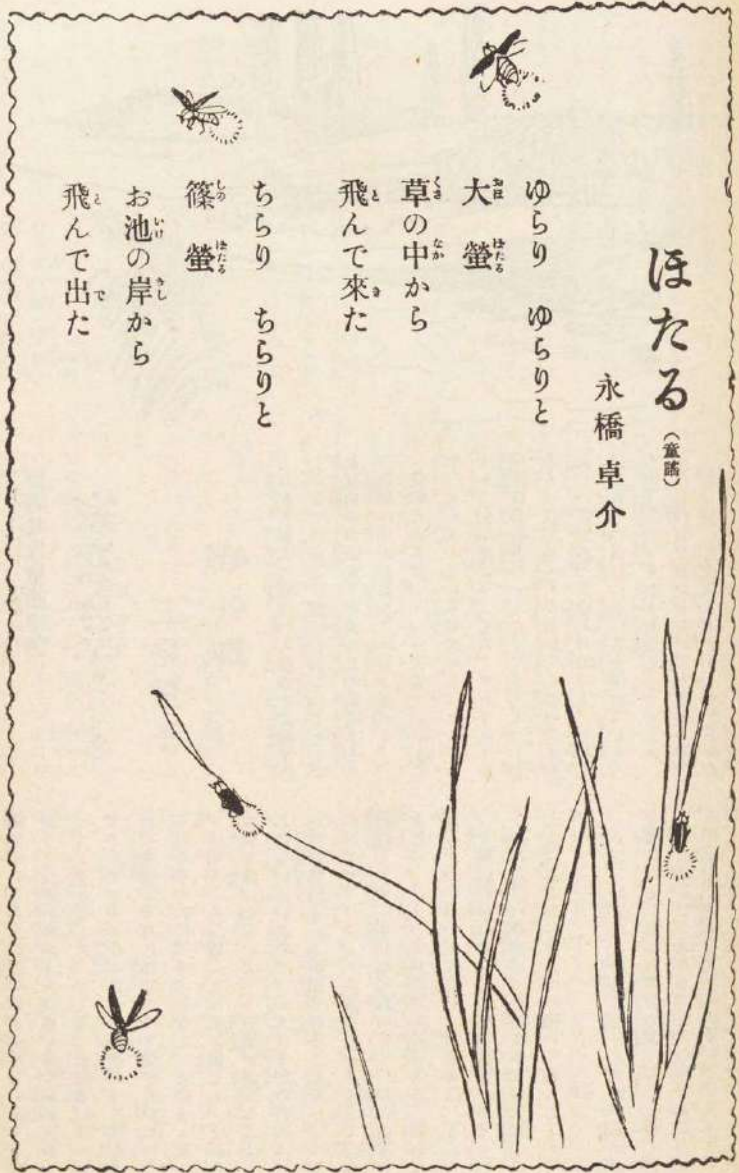
飛んで来た

ちらり ちらりと

篠 螢

お池の岸から

飛んで出た



家なき子 (つぐき)

三宅房子

船の旅



私が貴婦人に救はれて船の上で暮すことになつたお話の前にしました。そこで私は次のお話をする前に此の貴婦人とその病氣の子のお話をし置きます。貴婦人の名はミリガン夫人といひました。そして、その病氣の子はアルチュールといふ名の子でした。アルチュール少年は貴婦人の一人の子です。もつとも夫人にはもう一人長男があつたのですが、悲しい譯があつて亡したのです。その子は生れて六月目に人にさらはれてしまつたのでした。それから後どうなつたか、未だに行方がわからないのであるのです。間もなく大男のアルチュールが生まれましたが、始終病身で、お母さんは此の子

の爲めにどんなに困つたか知れないのでした。たうとうアルチュールは重い腰の病氣にかゝつてしまひました。そこで、お医者者のすゝめでアルチュール少年は、始終板の上に寝かされて身體をそれに結びつけて置かなければならなくなつたのです。しかし、そのまゝ家の中に閉ぢこめて置いては氣が鬱々し、それに空氣も悪いのでいよく病氣が重くなるかもしれないといふので、夫人は子供のために、「白鳥號」といふ綺麗な船をこしらへて、それに乘せてフランスの國の中のいよ／＼な川を旅行して歩く事になつたのです。川の兩岸の景色は、病人の子供が目を開いてさへあれば、病ながらに目の前を動いて行くので、どんなに身體のためによかつたか知れないのでした。これだけ、事柄は、私がミリガン夫人と一しよにある間に少しづつ聞いて知つたことでした。

さて、お話がまた元に戻りますが、私が船で暮すことになつた翌日の朝、私は早く目を覺しました。見ると、自分の寝てゐるところは船の中の小さな綺麗な部屋でした。あゝ、さうだつた。自分は昨日貴婦人に救はれて、

船の横で寝て居た所になつたのだつて、とはじめて思ひ出したやうにあつたのを見ました。一座の連中の犬や猿達は、昨夜はどんな風にして通したらう！ さう思つて私は見に行きました。犬や猿は朝が長い間の自分達の家で、もあるやうにいゝ氣持ちに寝てゐます。大連は私が傍へ行つた時、すぐに跳ね起きました。が、猿のジョーリケールだけは、目を片方だけ開けてゐる様に、少しも動かないので、す。わざとラッパのやうな大きな聲をかいいてゐます。

私はをかしくつて堪りませんでした。が、その譯はすぐとわかりました。昨夜寝る時に私の部屋へつれて行つて一しよに寝せてやらなかつたので、それを怒つてわざとふて寝をしてゐる事がわかりました。朝飯がすむと間もなく、船は静かに水の上を走りはじめました。岸でちいびいゝ、鳴いてゐる小鳥の叫や、水が船にあたつてちやぶん／＼いふ水音や、それから馬の首につけた鈴のちやりん／＼いふ音が、それは／＼心地よく私の耳にひびきました。私は船の甲板へ出で見ました。そして、深い水の中を覗き込

んでゐると、船の舷を呼ぶ者があるのです。誰かしろと思つて見ると、アルチュール少年でした。アルチュールは板の上に乘せられて逃げ出されてゐたのです。「君、よく寝られたかい。草原に寝るよりか。」と、アルチュール少年が尋ねました。お母さんのミリガン夫人がそこにおりましたから、私は半分は夫人に挨拶をするつもりで、よく眠れたことを丁寧に話しました。「それから犬はどうしたらう。アルチュール少年が心配してまた尋ねましたから、私は犬と猿を呼びました。犬も猿も返じて來ました。しかし、猿はまた芝居をさせられるのぢやないかと思つて、しかめつ面をしてゐます。でも、アルチュールは嬉しそうに、犬や猿を眺めてゐました。間もなく、ミリガン夫人は息子を日蔭のところへ連れて行つて、自分もその傍に坐りました。「さア、これから私達は日課をはじめますから、あなたは犬と猿をあちらへ連れて行つて下さい。」と、夫人がいひましたから、私はみんなを連れて船先の方へ退きました。あの

病の影を病人の子供にどんな日課をさせるのだらうと、私は不思議に思ひました。私が船先のところで見ると、夫人は手に本を持つて息子にそれを教へてゐるので、しばらくさうしてゐましたが、しかし、アルチュール少年にはさうともそれが覺えられないと見えて、「母様、僕出來ません。僕ほんとに出來ないのです。僕病氣なんです。」と、泣くやうにしていつてゐます。「いゝえ、あなたは身體は病氣でも、頭まで病氣ではありません。病人だからといつてだん／＼馬鹿になるやうな子は私は嫌ひです。」で、母様、僕出來ません。本當に出來ないんです。」たうとうアルチュールは泣出してしまひました。ミリガン夫人は悲しそうに立つてゐましたが、本をアルチュールに渡してそのまゝ行つてしまひました。アルチュールの泣いてゐる聲が、私のところまで聞えて來ました。あれ程までに可愛がつてゐる母親が、どうしてあの可哀さうな子供にこれ程嚴格なのだらうと、私は不思議に思ひました。アルチュールの覺えられないの

は、病気のせいなのにも私は思ひました。

ふと、アルチユールが私のあるのを見つけて
知らしてやりました。アルチユールはニコニコと笑つて、また本の方を見ておもしろいことが出来たと同じやうに考へを一つに集めることが出来ないと見えて、目ばかりに本から離れて川のこららの岩や向うの岸を見てゐます。

「君、僕はこれが覚えられないんだ。でも覚えたいんだ。」アルチユールは本を指しながら私の方を見て、ふいに云ひました。そこで私は、アルチユールの傍まで行つて、
「この話はそんなに難しくはありせんよ。」と、いひました。

「うん、むづかしい、……大變むづかしいんだ。」

でも、僕は随分やさしいと思ひますよ。あなたのお母様が讀んでいらつしやる時、私は聞いてゐて大抵覚えてしまひましたよ。」

でも、アルチユールはそれを信じないやうに笑つてゐますから、
「では言つて見ませうか。」と私がいひました。
「出来るもんか。」



「やつて見ますから、あなた本をよく見てあらつしやい。」

アルチユールはちつと本を見つめました。私が本の中の話を空ですらしくいつた時、アルチユールはびつくりして、私を見てゐました。

「やア、君知つてゐるんだな。どうして覚えてたんだい。」
「あなたのお母様が讀んでいらつしやる間は一生懸命に聞いてゐました。そこらの物を見廻したりなんぞしないで聞いてゐたのです。」

アルチユールは赤い顔をしました。
「僕も君のやうにやつて見よう。だけれど一言の言葉などどうしてさう覚えてか、いつて聞かせてくれ給へな。」

私はそれをどう説明していいか解りませんでした。けれど、やれるだけ説明して見ようと思つてかういひました。

「このお話は何の話でせう。羊のことですか。それエ。だから何よりも先きに私は羊のことを考へました。それから次には、羊が何を考へたか考へたのです。羊山の羊は安全な場所

を見つて居たので、
「母様、僕すつかり覚えてました。此のルミが教へてくれたのです。」アルチユールは母親を見ると、また嬉しそうに叫びました。

ミリガン夫人はびつくりして私の顔を見ました。夫人には何のことかさつぱり分らないので、その譯を聞かうとしてゐる間に、アルチユールは嬉しくつて堪らないやうに「狼」と山羊のお話を語つてはじめました。

私はちつとミリガン夫人の顔を見てゐました。夫人の美しい顔は最初笑つてゐましたが、そのうちに目に一ぱい涙が浮んで来ました。アルチユールがお話をすつかり語つて終つて、おしまひに羊飼が唄ふ悲しい歌まで唄つた時、夫人はたうとう泣出してしまひました。夫人は私の傍まで来て、キユツと私の手を握りしめました。そして、

「あなたはいゝ子です。」と私に向つていひました。

あゝ、この時から私はこの家族のためになくてならない者になつたのだし

た。昨夕までは宿無しの小僧で、一座の犬や

中に住んがゐた。」といふのですから、羊が檻の中で安心してころがって眠つてゐた事が見えて来ます。さういふ風に目に浮べると忘れません。

「本當にさうだ、僕には見えるよ。黒い羊だの、白い羊だの、それから檻も格子も見えるよ。」アルチユールは嬉しくつて堪らないやうに叫びました。そこで、私は勢を得てまた話してあげました。

「羊の番をするのは何ですか。」
「犬さ。」
「羊が檻の中に入れて番をしないでも済む時、犬は何をするでせう。」

「何にも仕事がないさ。」
「それで犬は眠つてゐてもいいでせう。ですから、犬は眠つてゐました」といふのです。

「さうだ譯はないな。」
「えゝ、全く譯がないのです。」

アルチユールは手を拍つて喜びました。
「あゝさうだ、君と一しよにやればきつと覚えられるのだ。母様はどんなに喜ぶだらう。」

たうとうアルチユールは、お話をすつかり覚えてしまひました。丁度そのへミリガン夫人

を連れて船の側までやつて来て、たい何人の子供を慰めるだけの者であつたのに、今はもう全くの必要なアルチユールの友達となる事が出来たのでした。

私は今思出しても、この船の上でミリガン夫人やアルチユール少年と過したあの時分が自分の少年時代で一番愉快な時であつたと思ひます。アルチユールは私を心から愛してくれました。私の方でもアルチユールが病氣で可哀さうだと思ふ同情からでなく、自然と兄弟のやうに思ふやうになりました。二人は喧嘩一つした事ありませんでした。アルチユールは身分のいゝ家の子にありがちな威張つた處が少しもなかつたのです。

船の旅は本當に愉快でした。一時間と退屈した事ありませんでした。疲れたこともありませんでした。朝から晩まで、私は楽しかつたのです。景色の面白い處へ来ると、船は殊にゆつくり進みます。どこで泊つて、い

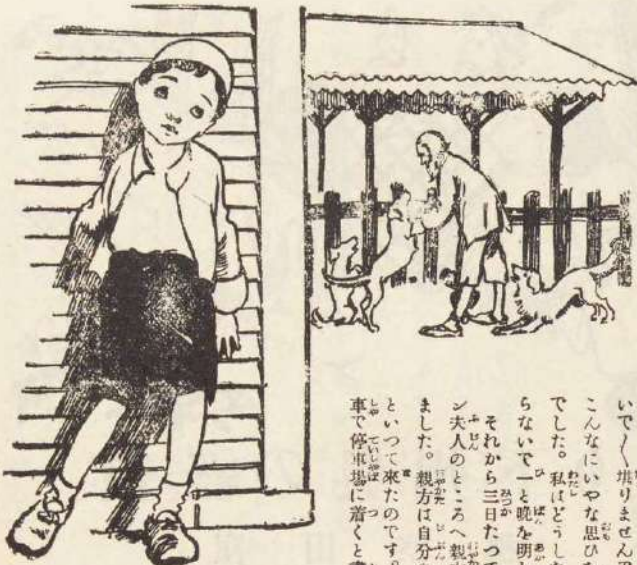
つ何處へ着かなければならないといふ事もありませんから、毎日同じ極つた食事の時間には露臺の上を集つて靜かに兩岸の景色を眺めながら、おいしい御馳走を食べるのです。日

が沈むとまじります。そして、日が昇ると船はまた動き出します。

この間の私は全く仕合せでした。私には家もないし、父さんも母さんもないのですからせめては友達でもあつたらどんなに嬉しい事だらうと長い間思つてゐたのに、今はそのお友達も出来たのです。私は本當に幸福でした。けれども、何といふ不幸なことであらう。私にはかういふ楽しい日をいづまでも續けて行く事が出来ないやうに生れてゐるのでした。私がまた昔の森しに返らなければならぬ日が、だん／＼に近づいて來ました。

棄子の悲しみ

楽しい旅をつとけてゐると、日の立つのが本當に早く思はれました。親方が監獄から出て來る日はすん／＼近づいて來ました。今は船で旅をしてゐますから、毎日の旅が何の苦勞もなく樂に出來ますが、親方を海に行くのには此長い道をとほ／＼歩いて歸らなければならぬのかと思ふと私は堪らない氣がしました。さうなれば、メリガン夫人やアルチユールとも別れなければならぬのです。



その辛さは、養親の母さんと別れた時とちつとも違はないのだと思つて、本當に悲しい氣がしました。

私はある日、たうとう思ひ切つてメリガン夫人にツールグの町(監獄のある町)へはどの位の日数がかかるだらうと訊いて見ました。親方が監獄から出る日には、その門のところで待つてゐようと思つたからです。アルチユールは私が歸るといふ事を知つて驚いていびました。

「歸つちやいやだ。ねエルミ、歸つてしまつてはいやだ。」アルチユールはしく／＼泣き出しました。

私は仕方なく、自分が親方のものになつてゐる事や、それから親方が、金を出して私を兩親から借りてゐるのだからどうしても歸らなければならぬ事を話したのです。けれど私は、本當は棄子で、親がないのだといふ事は決して話してませんでした。私は自分が棄子で、往來で拾はれたのだと話す事は死ぬほかに恥しく思つてゐたのです。棄兒はみんなから輕蔑されてゐます。ですから、もし私が棄兒であると知つたらメリガン夫人やアルチ

ユールは、その内に彼等の間に來たので、みんなに別れて私は自分の部屋へ歸つて來ました。しかし、自分一人になつても、私は氣がふさいで／＼堪りませんでした。船に乗つてからこんなにいやな思ひをした事は全くはじめてでした。私はどうしたらいいか、さつぱり分らないで一晩を明してしまひました。

それから三日たつての事でしたが、メリガン夫人のところへ親方から送附の手紙が届きました。親方は自分の方から來て逢ひに來るといつて來たのです。次の土曜日の二時の汽車で停車場に着くと書いてありました。

間もなく土曜日となりましたので、私は犬や猿をつれて停車場へ迎ひに行きました。私は大變に興奮してゐました。今日で自分の運命がきめられるのだと思ふと、胸がどき／＼しました。私は犬を紐でつないで、猿は上着

ユールは、きつと私を嫁に逢ひないと思ひました。「母親、ルミはどうしても此處に止めて置かなければ駄目ですよ。」と、アルチユールはいくども／＼いび續けてゐます。

メリガン夫人もいびました。「私もルミを此處に止めて置きたいのです。でも、ルミの親方が手離してくれませんかどうかそれが心配です。ですから、かうしませう。私はこれから直ぐに手紙を書いて、ルミの親方に此處へ來て貰ふやうに頼みませう。此方から出かけて行けばいいのだけれど、今はそれが出来ないから、その譯を書いて汽車賃を送つて來て貰ふことにしましやう。その上で親方が承知してくれたら、今度はこの子の兩親に相談して、一生家の子になつてくれるやうに頼みませう。」

メリガン夫人のおしまひの言葉は私をあわてさせました。兩親に相談されたら、私が棄兒だといふ事がわかつてしまふではありませんか。ああ、棄兒！ 棄兒！ それが知れればアルチユールもメリガン夫人も私をどうして相手にしてくれなくなるでせう。

の手に次れて、新居の扉はしん／＼と閉つて汽車の着くのを待つてゐました。その時、ふいに指つてゐた紐が急にひかれたので、あつと思つて手を離すと、犬達があわて／＼吠えながら駆出して行きました。見ると、汽車から降りて親方が向から來たのです。犬達は親方の手や足にとびかゝつてわい／＼騒いでゐます。親方は私を目つけると、手早く犬をどけて駆けて來ました。

「ああ、よく無事でゐてくれた。親方は私の身體を抱きしめて慰めかひました。」

親方はこれまで一度だつて私に辛くあつた事はありませんでした。こんなにやさしくしてくれた事は全くなかつたのです。私は感動して思はず涙で目が一ぱいになりました。私の親方の顔を見つめました。監獄に入つてゐる間に親方はすっかり年をとつてしまひました。春中も曲つたし、顔は青いし、唇には血の氣が少しもありませんでした。

「ルミ、私は随分變つたらう。監獄は決して愉快なところではなかつた。けれども大丈夫だよ。これからすつかり元氣になるから、かういつて親方は淋しく笑ひました。(續く)



義経の奥州下り

窪田空穂

(つゞき)

板鼻へ着いたときは、その日も夕方になりました。そこには家が何軒もありましたが人目に着き易い家ばかりでした。人目に着かない家をほしいと思つて見まはすと、そこから少し引込んだところに小さい山があつて、その山の裾に、氣の利いた家が一軒あるのを見つけました。義経はその家へ行きました。荒い竹垣をめぐらして、開戸をつけて、庭には池があつて、水鳥がどつさり飼つてある家でした。義経は庭口から入つて、縁のところへ立つて、

「おみます」といふと、中から、十二三の、餘り賤しくはない女の子が出て来て、

「何ういふ御用でございます」と聞きました。

「この家にはお前より大人の者は居ないか。居たら、出てもらひたい。」

義経がさう云ふと、女の子は引込みました。暫くすると、奥の間の障子を細目にあけて、十八九ばかりの、上品な女が顔を少し見せて、

「何ういふ御用でございます」と改めて聞きました。義経は「私は京の者で、この國の多胡といふところへ人を尋ねて来た者だが、この邊の様子は分らないし、日も暮れてしまつた。」と晩泊めてもらひたい。」

さういつて頼むと、女は、

「おやすいことでございますが、唯今主人が留守なので、お受けを致しかねます。尤も夜中ごろには戻つてまゐりませうが、主人は至つて情のない人でございますから、入らつしやるのを見ましたら、何んなことを申上げるかも分りません。それだと却つてお氣の毒でございますから、何うぞ他の家へ入らつして下さいまし。」

「御主人がお歸りになつて、いけないと云はれたら、その時こそ、何處へでも出て行かう。」

義経はさう云つて聞かないので、女は困つてしまひました。「今夜」と晩だけ、何うぞ泊めてくれ、見懸けて頼むのだから、

さう云つて義経は、すつと家へ上つてしまひました。女は何うすることもできませんでした。それで奥へ行つて

主人の妻にそのことを話しますと、妻は、

「これも何かの因縁でせう。かまひません。廊下ではいけない。座敷へお通しをして、おもてなしをなさい。」

と云ひつけました。女は云はれる通りに、座敷へ案内して酒や肴を運んでもてなしましたが、義経は少しも手をつけませんでした。女はまた、

「この家の主人は悪い人でございます。見つけられないやうにお氣をお附けなさいまし。お燈火をお消しになつて、障子をお閉めになつてお休みなさいまし。そして鶏が啼きましたら、すぐにお志の方へお立ちなさいまし。」

「承知した。」と義経は答へました。しかし心の中では「この女のそれ程怖がつてる男といふのは、いつたい何れ程の男だらう。隣ほどの家でも火を放つて焼き拂つて来たくらゐではないか。妻が情があつて泊めたのに、主人が厭やだなどといつたら、何の爲に持つてる刀だ、これがあるではないか。」と思つて、刀を抜きかけて、膝の下に敷いて、そして直垂の袖を肩へ懸けて、空廻入りをして、主人の歸るのを待つてゐました。閉めておけと注意された障子は、態と一ばいに

あけておきました。消せといはれた燈火は、一さう明るくしておきました。そして、「もう歸るか、歸るか」と思つて待つてゐました。

十二時頃になると、主人の男がそこへ現れて來ました。開戸をあけて庭へ入つて來るのを見ると、年は二十四五、淺黄の直垂を着て、蒔黄練の腹巻(鎧)をして、太刀を腰にして、大きな槍を杖に突いてゐました。同じやうな家來が四五人後に躰いてゐましたが、何れも、鍔、長刀、棒などを手に持つてゐて、たつた今、切り合ひをして來たばかりらしい様子に見えました。

「女の身では怖がるも無理はない、此奴はしつかり者だ。」と義經は思ひました。

入つて來た主人は、座敷に人がゐるのを見ると、そこへ近づかうとして、沓脱へ上りました。すると寢入つた風をしてゐた義經は、大きく目を見開いて、太刀を手に持つて、

「こゝへ來い。」と云ひました。

主人はそれには返事もしませんでした。そして、障子を閉めて急いで奥の方へ入つて行きました。

「さうか、お前は物の分らない女だとはかり思つてゐたのに、たつて頼むといつた心持を汲んで泊めたといふのは感心なことだ。いかにも、何んなことがあらうとも今夜だけは泊めて上げよう。」

主人と妻の話は障子越しに聞いてゐた義經は、「これは神か佛かが自分を守つて下さるのだらう。主人の言葉次第では、何んな事が起つたかも知れないものを」と思ひました。

又、主人の聲で、

「たしかにあの方は、普通の方ではない。それに、近いと三日、遠くても七日のあひだに、生き死にの中を通つて來た人らしい。自分もかうして世間から隠れてゐる身分なので、命のあぶないやうな目には絶えず逢つてゐる。お氣晴しにお酒を上げよう。」

さう云つて、酒肴を用意して、小さい女に銚子を持たせ、大人の女を先に立たせて、主人は義經のゐる座敷へ來ました。そして義經に酒をすすめました。

義經は少しも飲みませんでした。

「酒をお上り下さいまし、御用心をなさいますやうですが、

「女をとがめて、何かいふのだらう。何んなことを云ふのか。」と義經はそちらへ耳を寄せて聞きました。

主人の聲で、

「おい、おい。」と寢てゐる妻を起すのが聞えました。暫く返事がありませんでしたが、やうやう目が覺めたやうに、

「何です。」と妻のいふのが聞えました。

「あの座敷に寢てゐる人は何ういふ人だ。」

「知らない人です。」

「知らない人を、主人の留守に、自分だけの計らひで泊めるといふことがあるか。」

主人は怒つた口調でさういひました。

「騒ぎが始まるのだらう。」と義經は思つてゐると、妻の聲で「知らない人ですが、日は暮れてしまふ。行くところは遠いと云つて困つておるでになりました。貴方がいらつしやらない時にお泊めしては、何う仰やるか分らないので、お断りしますと、見懸けて頼むのだと云はれますので、たつてお断りするの極りが悪いと思つてお泊めしたので。何んなことがあつても、今夜」と晩はお泊めませう。」

「私がかうした變な恰好はいたしてをりますが、ここに居ります以上、何のやうにも御守護はいたします。おいおい、誰か居ないか。」

さう呼ぶと、さつき見懸けた四五人の家來が出て來ました。主人は、

「お客様をするのだ。お客様は御用心をしていらつしやる。

お前たちは今夜は寢ずに御守護をしろ。」

「畏りました。」と云つて、家來たちは弓に弦を懸けなどしました。

主人は自分も、座敷の戸をあけ拂ひ、燈火をつけ添へて明るくし、腹巻(鎧)を側に置き、弓には弦を張り、刀は膝の下に置き、風の音、犬の聲にも氣を附けて、家來に出て見させました。そしてその夜は寢ずに明しました。

「此奴は餘程しつかり者だ。」と義經は思ひました。

夜が明けると義經はそこを立たうとしました。主人はいろいろに云つて止めるので、つひ三日逗留してしまひました。

或時、主人は義經に向つて云ひました。

「あなたは都の何ういふ方でゐらつしやいます。私は都には外に知つてゐる人はありませんから、ついでの時はお尋ない

たしませう。又中仙道からお上りになるならば碓氷峠まで、東海道からならば足柄(關所のある山)まで、お供を致しませう。」「さう云はれると義経は、

「この男は二心など決してない者らしい。身の上を打明けよう」と思つて、

「自分は奥州の方へ下る者だ。實は平治の亂で亡びた下野の左馬頭義朝の末の子で牛若といふもので、鞍馬寺で學問をしてゐるが今は元服して、左馬の九郎義経といふ者だ。奥州の秀衡を頼まうと思つて下る途中だ。今度、圖らず懇意になつたので、嬉しく思つてゐる。」と云ふと、主人は驚いて、

「これは何うも。」と云ひながら義経の前へ寄つて、直垂の袖をしつかりとつかまへて、暫くは何も言はずに、涙をばらはらと落してゐるだけでした。

「何ういたしませう。此方からお伺ひしなければ、知らずにしまふところでした。あなたは私どもの爲には親代々の御主人でいらしたのですに。かう申せば、何ういふ者だらうと思召すでせう。私の親は伊勢の大神宮の神主で、伊勢の義連と申す者でした。或年都へ上り、清水へ参詣しました時、九條



その積りでゐろ。」

義経は、義盛を供に連れて、奥州へ向ひました。二人は名所の見物をしながら、奥州へ入つて行きますと、或日の明方、先へ行く旅人の一群を見かけました。側へ近づいて見る

の上人の御輿の通られるのに、馬から下りなかつたといふので不敬の罪にされ、上野の成島へ流されました。父はお赦しがなくして久しく此方にゐるうちに死んでしまひましたが、その時私はまだ母の胎にをりました。十三で元服いたしました。が、その時母から父の身の上を聞きまして、伊勢の義連の子だといふところから伊勢の三郎義盛と名を附けました。又その時から、父は左馬頭殿(義朝)から格別にお目を懸けられてゐた者だと聞きまして源氏が懐かしくてたまりませんが、唯今は平家の世の中で、源氏は皆落ちりぢりになつていらつしやいますので、お尋ね申す方法もなく居りました。圖らず今お目に懸ることのできましたのは、八幡大菩薩(源氏の守り神)のお引き合せと存じます。」

主人の義盛は、奥へ行つて妻にもそのことの嬉しさを話しました。

「あの方は何ういふ方かと思つてゐたら、自分に取つては親代々の御主人だつた。今、奥州へお下りになる途中だと仰やるから、自分もお供をして行く。多分來年の春は歸つて來られようと思ふが、さきさきの事は何うなつて行くか分らない

と、それは吉次でした。義経は吉次と別れて九日目にまた一しよになつたのでした。吉次は義経を見ると、頗りに嬉しがりました。義経も嬉しい氣がするのです。

吉次は義盛に目を着けて、

「お供の人は何ういふ人です。」

と義経に尋ねました。義経は、

「上野の足柄の者だ。」

と云ひますと、吉次は、

「今にもうお供は入りますまい。」

と云つて、義経は向つて、

「殿が奥州へお着きになつた後で、尋ねて入らつしやい。國に残つてゐる御家族が心配して居られませう。いよいよ旗おけを遊ばした時に、お供をなさつたら宜しいでせう。」

と勧めました。義経も一しよになつて歸るやうに勧めたので、伊勢の三郎はそこから上野へ引返しました。

義経は又吉次を供にして、秀衡のゐる平へと向つて行くのでした。(つづく)

明日見の炭焼長者(甲斐)

藤澤衛彦



今からちやうど二千二百十一年の昔、あの神々しい富士山が一夜のうちに、突然ひよつこりと湧き出でました。その湧き出た時、ド、ド、ドーンといふ異様な響が、あたりに響き聞えました。その時ならぬ響を用いて、今の甲斐

山が湧き出でたので、大きな目を見張つて二度びつくりしました。同じ郡の賑問の村人達は、不思議な音楽で大層賑やかなやうだが、何事だらうと雨戸を繰つて見て、「やあ、お山の移轉だ。」と言つてたまげました。

それで、近くの村々のおせつかいが、「おーい、此村の衆よ、出来り上手見ませ、(出て上の方を御覧)はんでぼんて(急いで急いで)と觸れて歩きましたが、此村の人達は、誰もかれも、「明日にせい、明日見よ」と答へて、その日には、誰一人、出て見るものがありませんでした。ところが、その又翌日には、もう此村からは、見ようとしても見られないやうに、富士山が、そつと消れてしまひました。それで、此村は、何處から永久に富士の雷

有名な炭焼松五郎が、その生れ故郷のこの明日見村に後、富士の拜める裾野に炭焼をはじめましたのは、やがて其後のお話だと書かれてあります。毎日毎日燃いてゐる炭焼の煙が、富士の山よりも高く立ち昇つて、それが、遠く、都の方からも認められました。不思議の煙だといふので、天子様が、陰陽師に占ばせましたら、御縁遠い皇女様のお舞様になられる方の立てる煙だといふことで、皇女様は、はる／＼煙を前に見知らぬお舞様をお尋ねの旅に上られました。途中、何のおつつかもなく、裾野におこしあそばし、松五郎の炭屋をお訪ねなさいましたところ、折あしく、松五郎は、故郷の明日見村に行つた留守でございまして、それで、皇女様が、「主人はおぼすや。」とお尋ねなさいますと、留守居の者が、「明日見にござらつしやり奉ります。」と答へました。留守居の者は、松五郎は明日見村に行つて留守でございまして、といったつもりなのですが、皇女様は、「明日見に來い。」との

「明日見にござらつしやり奉ります。」と答へました。留守居の者は、松五郎は明日見村に行つて留守でございまして、といったつもりなのですが、皇女様は、「明日見に來い。」との

驚きましたし、本栗の里といふところでは、人々が、地面に平に伏して、ぶる／＼顛へた有様が、穂栗の平つくばつたやうに見えたといふので、今でも其地は、それ／＼さういふ名で呼ばれるといふことです。たゞ獨り、今の南都留の明日見村の人達は、かゝりは、一向そんな音にも驚かず、世間の騒がしさも氣にとめず、其日は、ちやうど村中どんなたの日(勞れを休める日)だといふので、翌朝になつても、誰一人、出て其不思議の山の湧き出たのを見ようとする者がありませんでした。



浮坊主

若山牧水

海からあがれば

濡坊主

砂にまろべば

砂坊主

かんく照らされ

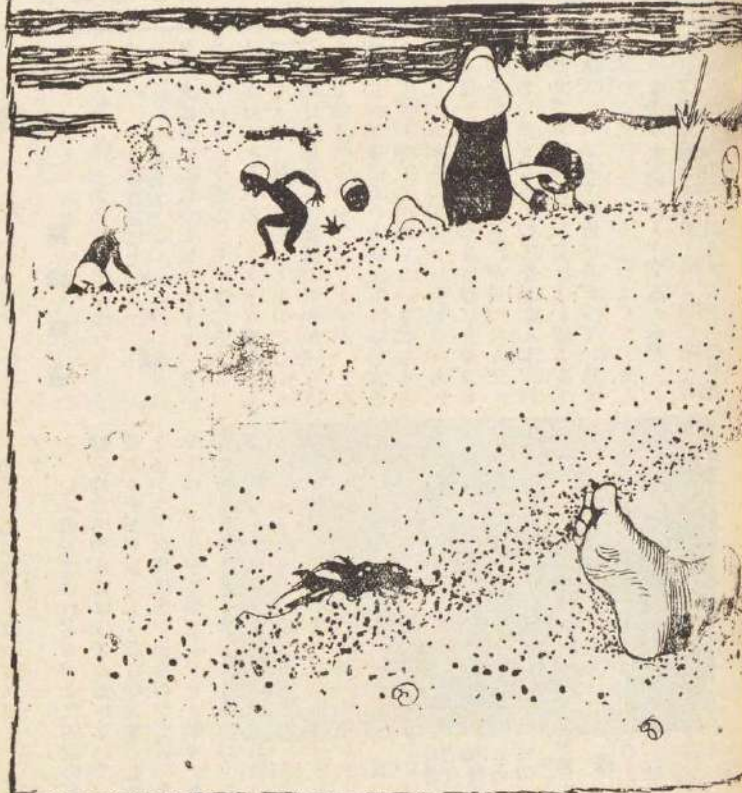
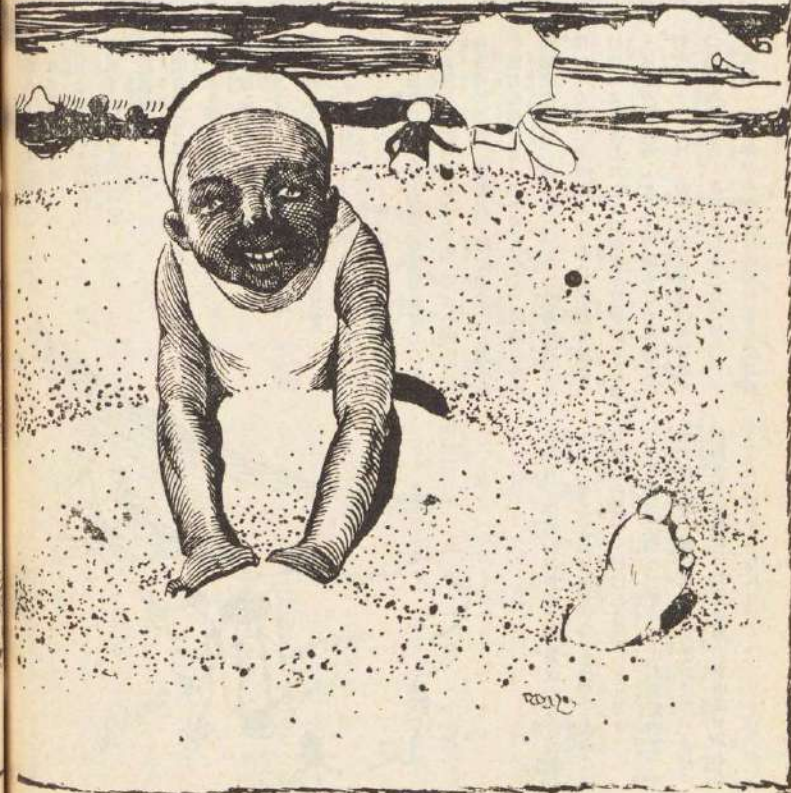
黒坊主

どぶんと飛びこみや

海坊主

ぶうかりぶかりと

浮坊主





詩年幼
選水牧山若

おぢいさん (賞)

長野縣上伊那郡 藤原あやめ
東春近校尋三

私のうちのおぢいさんは

少ししらがになつた

おぢいさんは今年

六十九ださうです

評、さうですか、どうぞだいじにしておあ

げなさい。(牧水)

新芽 (賞)

香川縣本田郡 大熊又平
水田校高一

ざくろの木には

新芽のさかり

青桐は時候を忘れて

出ないのか

評、短けれどよくこころもちが出てゐま

す。(牧水)

芽 (賞)

新潟縣中頸城郡名 中島フジノ
香山村妙高校尋六

赤い小さな芽が出た

これは何の芽 ほたんの芽

黄色の小さな芽が出た

これは何の芽 水仙の芽

評、調子がよくて、美しい。(牧水)

サカミチノオウマ

東京市慶應義 柳 武彦
塾幼稚舎一年

オウマがサカミチアガレナイ

オジサンガビシヤビシヤ

オコツテル

クルマチトツテヤリヤ

アガレルヨ

評、ホントウニサウアスネ。(牧水)

おたより

茨城縣筑波 銚川文子
田井校尋六

お姉さま

綴方 編輯部選

ちいさ(人)の名 (賞)

長野縣飯田 水野 戒 三
小學校高二

私が火ばちにあたつて居りますと、「ちい
さ、ちいさ、ややこ、ちいさ、ちいさ、
どこへ行つたんだろ」と大きな聲でよん
でをります。私は何んだと思つてしやう
じを明けて見たら吉野館の子守が、「ちい
さ、ちいさ」といつて居りますが、こん
どは実戸のところへ来て「うくさい友と
どこへいつたんづろ、さいさだな」と
いつて、又おもての方へ「ちいさ、ちい
さ」と一生懸命になつてよびよるゆきま
す。その内に「ちいさ」が居つたと見え
て、「ちいさどこへいつてをつたんな、わ
しやあさぎさがしたに」といひながら
二人で、仲よく下の方へさがつていきま
した。

ちゆちゆむちやん (賞)

千葉縣匝根郡白 河野 文吉
濱小學校尋六

モヂヤがモヂヤ()になりません指を動
かして居るつもりで指よりも眼のまはり
方が本當にモヂヤ()してゐます。そし
てちゆちゆむちやんの眼は小さくて笑ふ
と縁のやうになりますから誰れだつて一
しよになつてにこにこしない人はござい
ません。ちゆちゆむちやんは誰にだつて
だつこをしてもらひます。

ちゆちゆむちやんの名は進さんといふ
のですけれども、自分では舌がまはらな
いでちゆちゆむちやんといつて居るので
す。ちゆちゆむちやんは私の弟です。

おもちつき

千葉縣東金 北村 房江
小學校尋五

昨日はおもちつきであつた。お母さん
一人でやれないから二人たのんだ。

三時からつきはじめたときいた。

私が目をさますと、おもちをつつきねの
音がベツトラコ()ときこえた。

「あゝもうおもちをついてるのけえ」と

いふとおばあさんは「いまからおきたつ

てしようがねえ」

「おきしねえ」と、大きな聲でいつたら

「お寺の蟲は雨さへ降ればモヂヤ()モ
ヂヤ。」
と、いふのですけれども、まだ四歳のち
ゆちゆむちやんにはうまく云へないで、
それが一層可愛らしい感じがします。丸々
とふとつた指は肉が張り切つて居て自
分ではしてゐるつもりでせうがモヂヤ



母と子 (賞) 長野縣小野村 柳澤しと

ほうやがおきてしまつた。

「おばあちゃん()」とないてゐる。私

が「ほうやおもちついでゐるからなかな

いでゐるなよ」といふと「ねえちやんうさ

ぎ()しらへて」といつた。

「あゝこさへてあけるよ」といふともう

だまつて、にこ()顔を見せてゐる。

だい所の方でだけだが、

「するぶんよいもちです、だからほねが

おれない」といつてゐた。その時と子

のなきごえがした。あん()とない

てゐるとお母さんが来て、

「ムコヨ()」といつてちちをのませた

又だい所の方で「まだふけません」もう

ぢき上ります」といふこゑがした。私は

まただれも上りませといつたのでだれか

来たのかと思つた。おばあさんだれが来

たかい「だれもこないよ」さうかい「も

うひとねむりねむりな」あゝ」といつた

時ほうやはうと()とねむりにはひつた

皆のはないびきがつてゐる。

このごろのこと

大阪府谷川 龜田 花子
小學校尋二

美代子は大きくなりました
なんでも話がわかります
おかへりなちやいと父さんに
おじぎするのを知つてます
お姉さま

美代子は大きくなりました
する分おいたが上手です
きのふも荷馬車がとほつたら
ヨタクしながらおつかけた

評、何といふ可愛い、おたよりでせう。ただの手紙よりどれだけ嬉しいか解らない。(牧水)

つくし

長野縣上伊那郡 鹿兒島 みちゑ
東春近校尋二

つくし早く芽を出しよ
こゝは砂原よいとこだ
川原の小鳥が
おつかないか

評、きれいな歌。(牧水)

春の雨

長野縣上伊那郡 下平 愛子
東春近校尋三

春の雨は
ほそいかはい、雨で
たくさんふつてくるので
美しい

わら屋根

新潟縣中頸城郡 川久保 ミツイ
香山村妙高校尋六

わら屋根が子をうんだ
草の子をたくさんうんだ
青いツンツン草をも
ペン／＼草をもうんだ

春が来たので、ビイビイうんだ
評、わら屋根はなかにいそがしい(牧水)

さしやこ

今治市第二 近藤 美代
小學校尋五

ばちばちと
きもちのよいほどよく出来る
指からさしやこがのぞいてる

さくらの花

山梨縣北巨摩 篠原 良信
郡多摩校尋五

このごろはだんだんあたたかになつてきました。れんげのはもたんほほのはも田にできてきました。白いはなもさいてきました。私のおとうともれんげがさいたらつみにいかうといつてたのしんでゐます。私のおかあさんもあつたかくなつたからせんたくがらくだといつてゐます。私もおさうぢがたいへんらくになりました。あつたかくなると私はいつもふくをきるのであります。

二人の姉妹

若狭國高 松本 せい
濱校高二

夕食がすむと登美子は爐の傍でコクリコクリとやりかける。さあともちやんもうねよかいな」と私達がいはいのものなら大へん、大きな聲で「イヤン／＼おばんとよ」とつゞけさまにいふ。こんな風なので登美子は私達をそばへもよりつけない。それにくらべて妹の秀子は、いつもおとなしくて、皆に可愛がられてゐる。



弟(賞) 東京小石川高 高木しけ子
田老松町十六

ニコ／＼と笑ひながら幼ないながらも、いろんなことをいふ。それが皆にとつては、大變面白く可愛いものである。そして夜はいつまでも起きてゐる。又いくらねむくても、少しえんりよ深いのでねむたいとはいはぬ。いつもお母さんが「秀ちゃんもうねたいのやろ」といはれると「フン」と小さく返事する。すると私が待つてゐるとばかりに「秀ちゃんおせちやんとねんねしようか、ねやねや」と頼むやうな調子でいふ。(けれども

僕の家の桃の木

三重縣桑名町立 不破 金城
第二小學校尋三

僕の家には桃の木があります。この木は僕の五歳の時お母さんがお里から持つておいでになりました。その時は花が咲いて桃はなりませんでした。去年は桃が三十二じゆくしました。花が散つてしまふと桃になるのがたのしみです。僕は毎朝顔を洗つてから桃の實のなるのをたのしみに見て居ります。

捨てられた子猫

福井縣速原郡 菅原 一夫
奥名田村高一

子供が四五人で竹でつゝいたり、唾を吐かけたりして居る。それは二匹の死んだ子猫であつた。子猫はかはい、初聲を上げて生れ出たのであつたが、無情な人間の爲に此の裏道へすてられたのであつた。あゝ冷たい夜露はどんなに寒かつたであらう。どんなに苦しく、悲鳴を上げながら死んであらう。ひもじくて母の乳房を探したであらう。僕はすぐさま走つていつて見ると、子供等は下駄で河の中へけ

僕の友

秋田縣坊澤 高 桑 豊
小學校尋五

自分の用がある時はしらん顔してゐる。妹も同じやうにいふけれどやつぱり大きい方がいゝのか、いつも「おせちやんとや」といふ。私は得意さうに秀子を寝着にきかへさせて室へつれて行く。そしておこたの中へ入ると「おせちやん電車も汽車もと歌てんな」とこれは高濱鐵道開通式の時の歌といふ。私はすぐ「うれしい／＼開通式よ」と開通式のうたをうたふ。するとうれしさうに笑ひながらそれを聞いてゐる。その次は桃太郎、もし／＼龜よといふ様な順序で、いつもねさうな時にはうたうてやると、いつのまにか可愛い、いびきを立て、すやく／＼とねむつてしまふのである。

僕の友人は毎月一度より見られませんが、そして、いつも東京から來ます。けれど、も途中で居なくなることもありま。

友達の名を知つて居る人は内地でも千萬人以上は居ると思ひます。友達の名は「金の星」。可愛いこ本です。

おてんとうさんが出た
さくらの花
目をさませ

小鳥

長野縣下伊那郡飯
田町上飯田校尋五 安達菊江

私が一日かゝつて
考へた小鳥のわなの所に
小鳥が澤山よつて居る
早くわなにかゝれ
小さい鳥よ

雲

長野縣上伊那郡
東春近校尋三 井上八重子

雲は空に
さら／＼ちつた
きれいにちつた
しづかにちつた

はり

香川縣木田郡
木田校尋五 小河桃江

赤い／＼はり箱を
そつとひらいて見ましたら

細い／＼はりさんが
頭をそろへて
スヤ／＼ねてゐます

野口先生

茨城縣眞壁郡
若柳校尋五 栗野タケ

野口先生きた時は
いつのまにか
うれしくなつた

けむり

香川縣木田郡
木田校尋五 藤澤ミツエ

かあさん
おまをたく
そのけむり
青い／＼
空へ
飛んで行く

山

長野縣上伊那郡
東春近校尋三 井上幸子

さびしい／＼お山の
だれだか遠くで
枝をおしよつてゐる
私も
一人でさびしくなつた

り落して了つた。後になり前になりか
くれたり見えたりしながら流れて行
く。聞けばのら猫の子であると言ふ。

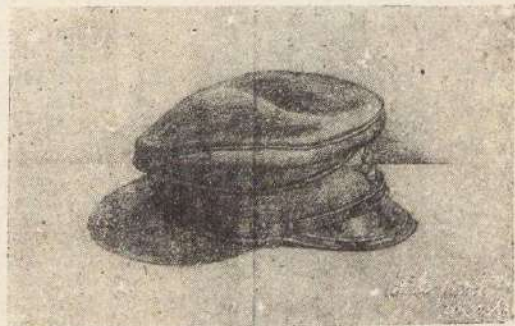
清さん

埼玉縣志木
小學校尋四 鈴木精一

清さんと僕と遊んでゐると、藤ちゃん
とたあちやんとが口をそろへて、僕に
「藤ちゃん五年の三枝にやられるぞ」
（やられるとはいぢ）と云ひますから、僕
は「僕は昨日健ちゃん達とけんくわは
しないよ。」といひましたら、たあちや
んは

「だつて精ちゃんは、おれ等の方に
たからけんくわはしなくても三枝にや
られるから、なあ藤ちゃん。」
といひます。藤ちゃんは、「おらやられ
ても（いぢめら）向はないんだ。」と言
つてます。

僕は「たあちやんなんかいぢめられても
向はない方がいゝぞ。いくら二人でかゝ
つても三枝にはかなはないからな」と言
ひました。清さんはだまつて聞いてゐま
した。たあちやんは「藤ちゃんおれは健



八四 (賞) 子帽 東京市東區
銀座六丁目二
樋口信助



峯島さき (賞) 吉岡
千葉縣東金
岡と

のに。といふと、たあ
ちやんは「持つてゐた
かい／＼。」と言ひはり
ました。藤ちゃんは
「持つてゐたい／＼。」
と言ひはりました。多
分三枝にぢめられる
のがつらいからあんな
事を言ふんだらう、と
僕は思ひました。

清さんは「精ちゃん、
三枝がいめちたらお父つちやん（お父つち
やんとは三輪先生の事です）三輪先生は我校の
先生なのです。」にいつてやるからなあ。」と
いつて僕に力をつけました。

ねずみ

東京市麻布
飯倉校尋三 山口延二

夜中にことごとく音がしました。ねず
みが、何か引いて行くのだなと思ひまし
た。

又ことごとくつづいてきこえます。僕が
がらつとおし入の戸を明けますとらゆう
ちゆうとなきこゑがしてにけて行きます

八重ちゃんにあつた時

福島縣二本松
小學校尋五 水野タカ

又だいの所の方でがた／＼きこえます。い
まいましと思ひましたが寒いのでねて
しまひました。朝見ると大根がかちつて
ありました。

おひなさま

山梨縣北巨摩郡多摩麻枝寺三井三子

一ばんうへにはおだいらさん
二ばんめにはうらしまたらう
三ばんめにはおかいこがみさん
四ばんめにもうらしまたらう
みんなをどりをどつてゐます

のびる

千葉縣山武郡東金校寺六高橋琴

竹の子はのびる
ずん／＼のびる
私たちのびる
せいだけのびる
心ものびる

算術の時間に

千葉縣山武郡東金校寺六土屋文

私が○をつけようと思つて
考へてたら
エンピツが
一人でつけちやつた

煙突

郡馬縣高崎市中榎屋町一高見澤ミチ子(九才)

赤いベベキタ煙突が

黒い煙ヲハキ出シテ
自分ノオロノマツリヲバ
マツクロクロナシテキルヨ

死ンダオバアサン

千葉縣山武郡東金校寺六稗田武男

オバアサンガ生キテ居タ時
ブツキリ買ツテクレタツケ

ハルガキタ

大阪府長尾小學校第一門田アイ子

ハルガキタ
ハルガキタ
クサノ上デ
ネテキルト
ボチガアシヲ
ナメニキタ

貝殻

大阪市外粉濱長尾校寺六雨森錠子

波うちぎはて
真白い小貝
さらさら
さらさら
波にゆられて
光つてる小貝
さらさら
さらさら

てきたらどう」といつた。私は「はい」といつて出て来た。體操を見る時でもゆぎのやうな事を見る時でもそれを思ひ出して、ぜひあひたいもんだと思つて自分の前を通る人の顔を一心になつて見てゐたがこれと思ふ人も見つからなかつた。あんないしくてくれる先生が「あちらへいつて見ませう」とあいさうよくおつしやつた。私はためいきをつきながら「もうこゝであへなかつたら。あへないな」とざんねんに思ひながら立ちあがつた。あちこちを見物してもの所へ来た。すると高橋先生は「水野たかちやんのたか」といはれた。私は自分の名をよばれたのではつとした、なんだらうと思つたらわきにいとこの八重ちやんと八重ちやんのお父さんがをられた。私はうれしさのあまりにもしやべらないでただおじぎをした。八重ちやんは七分三分にわけておさげにしてゐた。八重ちやんのお父さんは私に「お父さんもお母さんも丈夫か」といつた。私はただ「はい」といつた。八重ちやんは「今日うちにとまつていかない」とかはいくいつてくれた。私はだまつてゐたら私の顔をのぞくやうにして「だめ」といつた。私は「今日かへるからあとでゆつくりくるから、伯母さんもちやうぶかい」といつたら「大丈夫よ」といつた。伯父さんは「それではうちによろしく」といつておじぎをした。私も「伯母さんによろしく」と八重ちやんにいひながらおじぎをした。そこで別れて私が去るとそばでみてゐた八重ちやんの同組生が「明石さんどこの人」といふこゑが私にはつかしきこえた。私はいそいでけたをはいてそとへ出た。外にはもうみんな出てゐる私がつた。外にはもうみんな出てゐる私がつた。「私」といつた。「私」といつた。「私」といつた。門を出て信天山にむかつた。一人の人が道のそばで寫生をしてゐる。それをちよつとのぞいたら向ふに見える西洋館を描いてゐるのであつた。

渡邊君の寫眞機

福岡市冷泉小學校寺六吉原健藏

授業が終つて五六人で、教場にある「ガラツ」と障子戸を開けて渡邊君が走りこ

んできた。其の時手に寫眞機をかへて居た。

友達の人

「僕等を寫眞にうつしてくれ」と皆の顔を見ながら渡邊君にいつた。

渡邊君は

「ではうつすから日あたりのよい所なれば」といつて、皆と一所に中庭に行つた。

丁度日あたりのよい所があつたのでそこにきめた。

皆そこに立並ぶと渡邊君は僕等の正面に立つて、「さあうつすがいいか」といつて、僕等を見てゐたが、「はちり」と音がして皆うつつしてまつた。

うつつたので僕等は渡邊君と一所に又教場にかへつた。

雨上りの夕方

茨城縣筑波郡北條町泉村古幡政範(十二歳)

僕は夕方二階のまどに



(賞)んさ姉 三尋校城赤坂赤市上 隆長島上

◆金の星講演部の報告◆

本誌講演部がどんなに目覚し、奮起してゐるかを御覧下さい。童話と童謡の普及のため金の星は未だかつてない大運動をしてゐるのであります。童話部講師沖野岩三郎先生は三千部の雑誌と二萬部のエハガキを持つてはるる、朝鮮と滿洲へ出發されました。また童話部講師野口雨情先生は三千部のエハガキを土産に東北各地を巡回して講演されたのであります。

沖野岩三郎先生の朝鮮めぐり

釜山第一信 (五月十日電報)

フザンデ セカイ ハナス ヨテイ

釜山第二信 (五月十三日)

昨日國際館で童話の會を開きました。千五百人の少年少女が集りました。尙、女學校、小學校などで七回話します。今日のお話の「大太郎小太郎」は大變に受けました。

釜山八回、大人小人、合せて四千五百

人は、ゑはがき五百枚は女學校の生徒にあげました。

小學校の兒童三千百名に對してゑはがきをあげる約束でしたが、雜誌が先きに着いてゐましたから其のまゝに出立しました。女學校では非常に喜ばれました。昨日は釜山から三里田舎の東萊の朝鮮兒童三百名に話しました。大變喜ばれました。朝鮮の子供は本當に可愛らしいです。今日釜山を立ちます。

新羅の古い都にて (五月十六日)

これは東洋最古の天文臺です。今日はこゝへ遊びに来ました。昨十五日までに五千八百人に話しました。こゝは新羅の古い都です。

慶尙北道金泉にて (五月十八日)

昨日は金泉で警察署長その他有志家諸氏の出迎へを受け、小學校と寺とで話しました。今日は群山に行きます。あとで詳しい手紙を差し上げます。



慶新州古蹟瞻星臺 (天文臺)

木浦にて (五月二十日)

本日こゝへ参りました。群山では尋常一年から高女四年まで千五百人に話しました。大人も五百人以上集りました。今までのどの講演會にも此の位置づたことではないと申してゐました。同地の學校から童話と自由畫を送りますから批評を願ひます。大人に若柳小學校の「蝙蝠の唄」を讀んで聞かせまして何れも大成功です。

木浦にて (五月二十一日)



(廣江鐵橋)

木浦府立尋常高等小學校には「金の星」の讀者が五十餘人ありました。其ほか私の書いたものを愛讀してゐる方が五十人程ございました。昨日は此學校で千二百人の學生に話しました。

金州多佳公園にて (五月二十三日)

昨日はこゝで三千人の大人と小人に話しました。大へん喜ばれました。朝鮮人ばかりに千人程話しました。渡來後初めてこんな所をみました。こゝへ日本人がいなり様を祭つてゐます。

太田にて (五月二十四日)

到る處「蝙蝠の唄」でよろこばれてる

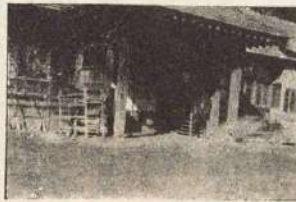
野口雨情先生東北地方講演

仙臺をはじめ各地へ

△五月六日午後一時半から、仙臺市櫻ヶ岡の公會堂で野口先生の童話講演會がありました。別項記事に詳しく書いてあります。同日午前中は木町通小學校の先生方へ童話を子供の教育に大切なわけの講話をされました。この木町通小學校は童話校として有名な學校であります。同校の黒田先生は、童話を子供の教育にとり

いた功勞者で、仙臺の教育會から表彰されたほどです。そのほか宮城縣には、上杉山小學校、野蒜小學校の二つの童話播種校があります。上杉山校では佐藤先生、野蒜校では橋本先生が熱心に童話を奨励して居ります。又、野口先生は宮城縣女子師範學校でも童話の講演をされました。同師範の附屬校を始め仙臺市の各

小学校では、「七つの子」野口先生作、本居先生曲が盛んに歌はれてをります。△秋田縣雄勝郡明治小学校校長宮原先生も野口先生の童謡の話をきかれて、童謡の奨励をお始めになりました。近く同校も童謡協賛校としていい作品を出すやうにならうと思はれます。



なん盛の童謡
(校學小一第町平縣島福)

△福島縣平町第一小学校(男子部)と第二小学校(女子部)とでは生徒さんの数が二千八百餘名あります。五月十三日初めて野口先生の童謡講演會がこの二つの學校で開かれました。いばらき支局長の宮田三郎先生が開會のことばを述べて、川崎小島先生の童謡がすむと、野口先生

仙臺市に於ける童謡會の記

仙臺 天江登美草

大正十年の三月郷土童謡會の名の下に私共が仙臺の地に童謡の研究會を興し雑誌「おてんとさん」を發行してから丁度一年になりました。その間野口雨情先生の援助がどれだけ私共の仕事を力づけて下さつたかおぼせません。野口先生に仙臺へ来て仙臺の子供達と童謡の愛好者にお話しをしていただきたいと始終希望してゐたのです。遂に五月六日、先生に仙臺へ来て戴くことが出来ました。私共の喜びは何と言つてもいかわからぬ程でした。その朝六時六分の汽車で先生は仙臺へ下車されました。東京に居られる日本一の童謡の先生は赤いネクタイでもかけた、ハイカラな洋服紳士と雖でも想像してゐましたのに、古びた袴をはいた質素な服装であつた事は、一しほ人格と藝術との一致を見られて親しみと敬愛とを深めたのでした。午前中、木町通小学校及女子師範學校で童謡についての講演を終り、午後一時から西公園仙臺市公會堂でいよいよ童謡大講演會が開かれました。

が「童謡に救はれた茨城縣若柳校の實話」といふお話がありました。若柳校の久保田校長先生と栗野柳太郎先生とが永い間苦心に苦心をして子供達に童謡を歌はせ童謡を作らせるやうにした事實談でした。聴いてゐた子供さんの中にはこの二人のたふとい先生の苦心に感動して、涙を流してゐました。これから野口先生の童謡は平町の子供さん方に歌はれるやうになります。△五月十八日午後五時から日本大學童謡研究會が開かれました。大井、横井兩幹事の熱心で、だん／＼盛んになつてまゐりました。有益な質問と、研究事項と會員作品の批判があつて、野口先生のそれに對する總括的の講話がありました。△青山の明治學院でも五月二十日午後二時から童謡の研究會が開かれました。幹事の永橋氏がこの會の主旨を述べ、野口先生が「私が主張する郷土童謡の立場と社會奉仕の意味」の講演がありました。△平和の子供の會が、五月二十一日、慶應大學の講堂で開かれました。本居長世先生の伴奏で、みどり、きみ子さんのお

でした。今迄仙臺市にはお伽會の會ならば時々ありましたが、童謡の會としては初めてです。ここに日本童謡界の恩人が來られるといふことは、どれだけおてんとさん社にあつた仙臺市の子供達に嬉しかつたでせう。第一、困つたことは仙臺市二萬の子供達をある學校の先生などばかりに童謡の好きな子供の机の中に、そつと入場券を入れて、やつたと云ふ様なこともありまして。またで競争の様なきわでです。いついではひれす、泣き／＼歸る子供もありました。やがて開會の挨拶がすむと、みんなは新しい興味をもつてプログラムの一つ、進みの待ちました。第一の「でんでん蟲」は宮崎甫君と外一人の合唱で、尋常三年に最もふさはしい、たのしい、かえんな出来栄で、われら様な拍手が湧きました。「四丁目の犬」の獨唱「呼子鳥」の合唱「人買船」「十五夜お月さん」の獨唱などは作詩者野口先生も餘程満足された程、一つ一つ上出来でした。この外「めえめえ小山羊」の外二三番獨唱や合唱があつて、その次に木町通小学校第五の鈴木正一君の自作童謡つくし「星」の朗誦、上杉通校第五の大島昭君の同じ朗誦も大へん好評でした。おてんとさん社の刈田仁氏作詩、本縣師範學校田中良亮氏の作曲になる「白い夢」の獨唱の一部が終りました。休憩後第二回は野口先生の「青い空」の合唱に始まり、次が「フリーシャ」その次がいよいよ野口先生の童謡のお話でした。

姉妹の童謡獨唱がありました。本社からは野口先生がゆかれて、童謡の普及に就いての講話がありました。講話がすむと、御自作の童謡を澤山歌つて子供さん方へお聞かせになりました。葛原、井上、中條の各先生も交る／＼面白いお話をなさいました。大層愉快な會でありました。



徒生の校柳若る透見を生先口野

△五月二十五日午後四時から淺草千束小学校に淺草區各小学校の先生方から成る童謡の研究會が開かれました。幹事の青柳先生から開會のことばがあつて、野口先生は、小學校の教育にたゞさける人が童謡の研究をせねばあまりに不親切であるといふ意味の講話がありました。



信 通

自由畫選評

山 本 鼎

△今度もいろいろ面白い良い絵がありました。選外佳作のなかにもすてがたいのがあるのですが、うすい色鉛筆で描いてあつたりこちやこちやした水彩畫ですから、一色刷りの版にしては出ないから選抜にもれました。八木米吉君の水彩畫も佳作でした。しかし、部分的にはよい處があつて、全體としての感じがにぶいのが缺點です。色—形—調子に互つて、よく全體の關係を觀察しなければいけません。横山四郎君の『スミレと鉛筆』もすなほないゝ寫生ですが、何分うすばんやりして居ましたね。猪股忠正君の繪、たいへん面白い。併し、色鉛筆ですから版にだめでした。星野和光君の『家のちやばない』といふメン畫も好きです。

△吉岡とく子さんの『峰島さん』力のある寫生です。併し、それは、首だけで着物になるから駄目です。全體を大切に考へればいけません。耳はあんまり變ですな。
△高木しげ子さんののはすべてなか／＼速者な描寫です。『弟』といふのが一番充實して居ました。
△樋口信助君の『帽子』はしつかり描けて居ます。併しトオン(調子)の感じがたが、書手本式ですな。それから、影が堅過ぎて、其處に又一個の何かの物體があるやうに見えます。△上島長健君のは、すなほないゝ寫生です。△柳澤とし子さんの『母と子』佳い繪です、活きて居ます。(五月四日)

幼年詩選後

若 山 牧 水

毎月々々、いゝ歌がたぐさん集つて來るの、どれをとり、どれを没書にしていゝか、いつもはうに暮れてしまひます。然し、いくども讀みかへしてあるうちに、これは一等いゝ歌、これはそのつぎ、つぎのつぎにいゝ歌と、だん／＼分れて参ります。一等いゝ歌は、やはり自分ひとりで経験したことを、眼で見たり心で感したりしたこと

綴方の選後に

者

△今月も皆さんの投稿をみますと、大人のやうな言葉つかひで書かれた綴方が澤山ありました。
△皆さん、考へてごらん下さい。子供が大人の言葉をつかつたり、大人が子供の言葉をつかつては、可笑いではありませんか。
△綴方は、童話やお伽噺の書き方とは違ひます。子供の童話の調子のないもの(散文的のもの)が綴方だと思つてをれば大概間違ひはありません。
△子供が大人のまねが上手に出來たとて、自慢にはなりません。いくら皆さんは大人の真似はしないと云つても、齊藤先生だの私だのがみると、嘘か本當かすぐわかります。△それから、皆さん『金の船』が『金の星』となつたことは御承知です。童話の選後に『金を讀んで下さいましたか。これから皆さん方も、勢出していゝ綴方を澤山に書いて下さい。(野口)

童話選評

齋藤 佐 次 郎

それでも、ほんたうはお氣のどくにおもふのが、たくさんあります。『金の星』一冊を幼年詩だけにしてしまつたら、この歌もあの歌も載せられるのだけれどなアと思ふほど、捨てるのが惜しいのがいくつもありました。まア、どん／＼作つてゐてごらん下さい。そのうちには自分で面白くなつて、しだいに歌のこともわかつて來るし、上手にもなつて來ます。ひとにすゝめられないで、どん／＼自分で作れるやうに、はやく／＼おな

新しく出た本

◆澄宮殿下御作童話集 新聞や雜誌其他で澄宮殿下の御関連で詩情に富ませられておいてのことは、皆御承知のことと思ひます。例へば『ミナタンカ』『ゴロカガ』『イヤカ(ルトキ)』『マチニテントノ』『ツキニケルカナ』など、詩としても實に優れた御作でございます。皇宮からかうした御幼年の即興詩人がお生れになつたことは我國民のよろこびでございます。本書は殿下の第一御作童話集でございます。紙質、装幀、挿繪、みな善美の極を盡し、殊に御一作毎に本社顧問本居長世先生が大苦心の作曲が附してございす。(定價八十錢、大阪市東區大川町 大阪毎日新聞社出版)

◆笛を吹く天人(山田邦子氏著) 愛らしい子供の國—其國から湧き出でてくるお歌のしらべにのせて、共に話し合ふ心で書いた此童話は、私自身にも嬉しいお仕事でありました。と著者が云つて居られるやうに「笛を吹く天人」以下「白露物語」「私のおもひで」「祈りの鈴」「金環の果のなる國」等十四篇はみんな著者が子供の頃の嬉しかつた事思ひかつた事おもはれた事など懐しい思ひ出を込めて書かれた出来あがりでございます。皆さんとすぐ仲好しになるやうに書いてあります。(四六判二百十五頁、定價一圓、東京麹町區内幸町一ノ五 眞珠書房出版)

◆英傑サウル(神野岩三郎先生著) 講談といへば直ぐ通俗といふ國の文化の歩みでございます。しかしそれは國の文化の歩みを盛らせるので心ある人々が今迄の通俗な表現様式を一掃して書かうとして書いたのが社會講談でございます。この本は舊約に材を取つた高尚な面白い、そして上品な西洋の講談でございます。家庭の讀物としてまことに結構な本であります。(三五版三百二十一頁、箱入美本、定價一圓三十錢、日本橋區橋本町九番地 金剛社出版)

◆童話掲載外佳作△壺の中の音楽、永橋卓介) △月のない國(及川いづら) △静ちやん(江日華一郎) △シムと村人の話(眞木信一) △魔物を懲らした子供の話(作問博) △小雀と力(△狐と人間の戦争(寺島四男) △小雀とホ、シロ(折田純至) △風船の死(山田晋一) △ハローニカ(土師砂晴流) △お寺の鐘(加藤吉都里) △紫の御殿(白江好郎) △お羊の別れ(瑞章) △存想(角川信) △長安先生と狼(眞木康人) △燕の仇撃(高末豊) △コロソゴと狼征伐

◇前々月號の選評で永橋卓介さんの作が優れてゐたのを記しましたが、今月の永橋さんの「壺の中の音楽」は一層よく完成された、作でした。壺の中の音楽といふ題から考へて、何か支那の昔話でもあるかと思ふと、それがマリ子さんといふ少女の書齋の中の出来事である處に、大人から見ると、その對照から来る面白さを感じますが、反對に子供の要求から見ると、物足りない感じを起させるだらうと思ひます。そこが童話と大人の讀物との相違點だと思ひます。

◇江口雄一郎さんの「掃ちやん」は扱つてゐる内容が單純過ぎると思はれました。大人はこれで満足するでせうが、子供の讀物としては物足りないだらうと感じました。土橋さんの「女坂」はいつもの作ほどには力が入つてゐない事を感じました。いつぞや推薦になつた「栗の木から聞いた話」のやうに純な氣持ちを作に出す事を忘れないよう、特に注意していただきたいのです。

◇尙、これ等の作の外に及川いちろう氏の、「月のない園」作間博さんの「魔物をころした子供の話」寺島昌男さんの「狐と人間との競争」折田純三さんの「小童とカ、コロ」等つたならば、私共の主筆する郷土童話に新風が吹かされなかつたかも知れません。その意味で私共は、「金の星」を自分の子供よりも可愛く思つて來ました。所が皆さん、世の中には非人情の者もあればあるもので、私共が可愛がつてゐた、「金の星」は他人にとられて了ひました。本居長世先生も、岡本露一先生も、沖野岩三郎先生も、齋藤佐次郎先生も、どんなに残念に思つたこととせう。丁度私はその折、東北地方童話講演旅行中で、齋藤佐次郎先生より、

何れも優れたところのある作でした。

童話の選後に

(童話を愛して下さる全国の皆様方へ)

野口雨情

童話の選とは、關係はありますが、童話を愛する全国の皆様方へ此際特に申上げて置きたいことがあります。

皆様方も御存じの通り私共は「金の星」創刊(大正八年十月)以來、前後四年間「金の星」誌上で、郷土童話の普及に一方ならぬ苦心と努力となつてきてまいりました。その結果といふわけではありませんが、今日では全國のあらゆる方面から、童話は郷土的でなければ駄目だとか、郷土を無視したものではないと、稱讃もされ歓迎も受けられるやうになりました。又、私共は同時に子供さん達へ童話を歌はせ、作らせて下さいと、家庭の父兄方へ小學校の先生方へ其都度御注意を促してまいりました。これも、その結果といふではありませんが、只今では、童話を愛して下さる御家庭や小學校は全國中数へ切れないほど澤山ござります。

私共の口から云ふのはへんかかも知れませんが、昨日までの「金の星」は確に郷土童話の將星であつた。もし「金の星」がな

金の星を祝ぎて

(藤澤衛彦先生より 齋藤佐次郎先生へ)

今我私共は一期となつて「金の星」によつて更に、郷土童話の普及に努めます。童話を愛して下さる全国の皆さん。雑誌「金の星」は、もう私共のものではありません。(五月二十日)

金の星

「金の星」の誌友には、いろいろの特典が御座います。今や月々非常な勢で増加して居ります。友規則は金の船社宛に申込み下さいますればすぐお送りいたします。奮つておはり下さい

藤先生から電報で知らせが來ましたが、どうして本當とは思はれませんでした。歸京してみると本當にとられて了つたことが判りました。私は残念で、人知れず暗涙に咽びました。皆さん、今まで可愛がつてゐた「金の星」はもう私共のものではありません。しかし、「金の星」といふ標題はとることが出來ても、前後四年間、「金の星」によつて私共が郷土童話の普及に努力して來た事實までどんな手段な

金の星といへば、あの一つの星(金星)明星)の事でございませう。

一つ星は、またの名、出世星長者星といはれて、一つ星を見つけたら、金持になるとか出世するとか、長者になるとか言はれるくらゐ、まことにめでたい星でござります。東京の童話にも、
へ一つ星みつけた、長者にならる。
といふのがあります。大阪では、

(橋詰芳成)美代子さんの望(中川すみれ)△鼠にあやまつた太郎さん(後藤三三)△乞食の子(今井正)△笛吹のたより(松村淑郎)△裏の山(増岡謙吾)△殺された鴉(藤澤之助)△うぐいすの姉妹(藤田裕)△二羽の鶴(橋本春子)△百姓平次郎(小田俊夫)△かへる(永田善海)△蝶とバラの夢(長谷川國光)

▼童話掲載外佳作 △石屋さん(高藤貞之進)△象牙の船(菊原長太郎)△たけのこ(大黒喜代江)△夢(藤澤つゆな)△なの花(土原紫子)△蝸牛(細井慶三)△五月のお節句(土橋力)△蛙の子供(吉田はるみ)△沖の火(大崎吉春)△親子(小田俊夫)△アルミの筆(鮎瀬健)△あやめ(小田俊夫)△アルミの筆(鮎瀬健)△おきながりさん(石川登)△別れた母さん(柳晴)△夜はなし(山田ない灯)△すばん(松野一)△夜(佐野正明)△船頭の子(飯田春壽)△雪の夜(福多眞砂子)△鴉(中山主)△草つ場(西澤武夫)△水たまり(佐藤廣志)△坊つ椿(今岡伸)△燕の母さん(中山主)△草つ場(遠藤守風)△雷(白柳碧水)△小れすみ(内田みわ路)△村のちや(内田草人)△船(渡邊肇)△男(△童と雲雀(蓮田善明)△金の船(渡邊肇)△鳩(米田延次郎)△鳥(刈田謙三)△赤い牛(蛸原八郎)△登村上草野(△おたの死(吉川まさる)△春の畫(竹内信子)△小雀(伊藤治)△燻の火(安田露月)△櫻草(芝山義孝)△寺(鈴木口豊彦)△夕(秋山善徳)△木の葉(伊藤藤)△川(藤山打子)△山(田中忠)

▼幼年詩掲載外佳作 △燕(劉果壬)△犬(黄明球)△杉(高山義秋)△下と上(城山安子)△月夜(河田照子)△一本松(神田武男)△神内さんのお顔(佐々木アサ子)△げた(中山ミユキ)△電車(兒島ハルミ)△蛇(鳥崎八右衛門)△月(竹内吉)△もり(吉川正司)△ゆふべ見たる本(小川啓吉)△ひのき(飯田正充)△時(奥村勇)△イ、カツコ(小田暉)△みつちゃん(原田多左衛門)△れ、(藤原新一)△ウケヒス(齋藤繁雄)△春の風(酒井隆江)△椿(神内ミユ)△夕日(家村ミヨ)△くるまや(井上八重子)△電燈(高知尾義通)△火ばち(戸村和)△地震(伊藤隆三)△水車(村川政市)△ぎよくらんの花(岡宗好)△錢(田中忠雄)△ざうり(西村義雄)△野口先生(瑞章)△冬の風(丸山男)△小僧(増村正義)△大根(吉越マサ)△金魚(峯村ミヨ)△母さん(中島フジ)△風(丸茂登)△けた(武田タツコ)△遣はれた草(中野谷四郎)△きりん(井上幸子)△うめぼし(島田理左衛門)△初ゆめ(大時トシ子)△夕方(渡邊庄司)青い海(峰峻)△雨あがり(玉井静)△私の心(大黒菊枝)

▼緩掲載外佳作 △春が來た(藤井孝)△橋本すきのお父さん(藤田保)△曇り夜にあつた事(武藤常子)△掃ちやん(慶徳廣)△飯田町の大火(山田明)△自轉車のけい、(不破義幹)△學校からかへつて(宮道マサ子)△火

「一つ星さん見つけた、あした夜美おく
れ。」

など申します。伊勢地方では、また、
「一つ星さん見つけた、あした朝は金拾
ふ。」

とうたつてをります。

そこで、私も、ほんのお祝ひまでに、別記
の童謡を作りました。それは、たゞ心から「金
の星」の前途の幸多い事をお祝ひしたいため
ですから、愚作の段はどうぞ野口様とお笑ひ
下さいまし。

作中「お晩が紅」とあるのは、「おまんが紅」
「あまが紅」などいられると等しく、天が紅即
ち夕やけの光景でございます。いささか私考
へがございまして、私は、關東のおまんが
紅より、山陽のお晩が紅をよりどころの正し
いものにしてをります。

では別紙を御覽願ひます。 頓首

金の星

一つ星
お晩が紅とて
天の川が流れる

明星さん光れ。

一つ星
見つけた

金の星

父母(様)にいうてやる
おいらの長者星
明星さん光れ。



編輯室より

▽皆様におわびしなければならぬ事が山程
つもつてをります。第一、五月號と六月號が
あんなに後れたことを何といつておわびして
いか解らないのです。雑誌は早く出来てゐ
たのですが、キンノツノ社と手を切るために
發行が後れてしまつたのでした。全く止むを
得なかつたのです。

▽キンノツノ社から、「金の星」の名をつかつ
て雑誌を出すとかいふ噂を聞いておます。滑
稽な氣がいたします。いはゞニヤ物で以前の
「金の星」とは似もつかぬ雑誌しか出来ない事
は明かですが、しかし、それすら多分出来い
と信じてをります。

「金の星」となつて出た譯

愛讀者の皆様にご改題の理由を申し上げます

▼愛讀者の皆様！ 六月號の巻頭の廣告
で御覽の通り、皆様と長い間のおなじみ
でありました「金の船」が六月號から念
に題が變つて「金の星」となつて出たの
であります。皆様はさぞお驚きになつた
事で御座いませう。目次やそれからお終
ひの雑誌の欄にはいつもの通りに「金の
船」の誌友募集やその外いろいろ、「金の
船」の記事が出てゐますのに、雑誌の題
だけが「金の星」となつてゐますので、
一層皆様は不思議にお思ひになつたに違
ひありません。御無理もない事です。實は
顧問の諸先生初め、同人の者達迄が全く
想像してゐなかつた事なのであります。

▼皆様にお詫びいたします。雑誌の發行
が後れ、その上、皆様を驚かせた事は幾
重にお詫び致さなければなりません。
私どもは六月號を「金の船」の名で出
す積りですつかりその準備をいたしまし
た。そして、表紙まで全部刷つて出すばか
りになつてをりました。

▼ところが、雑誌協會といふ會がありま
してその會へはキンノツノ社の名で届出
でがしてありましたのです。そのために、
本當は齋藤主幹が實際の發行者であつて
そして又編輯者であつて、キンノツノ社
はたゞほんの名前だけの發行所でありま
すのに、「金の船」といふ名を用ひる事が
出来ない事情になつたのであります。東
京堂、東海堂はじめ上田屋、北隆館、至誠堂
などの五軒の大賣捌書店の御主人や支配
人の方々までが齋藤主幹のために、此の

事やらなにやらわからなかつたこと(岡スエ
エ)△春の郊外散歩(辻上政郎)△内の猫(佐藤
義美)△昨日の夕暮のうれしさ(龜井正信)
△椿泥棒(森澤福子)△友に別れて(本正信)
△英國皇太子殿下をむかへて(神内ミエ)△八
ツ手の木と私(田中勇)△五月雨(伊藤が夫)△
お月さん(山本アヤ)△バラの花(山口ひろ子)
△家のちやぶだい(星野和光)△書齋(石原俊
水)△友達 深谷達也△羅草猛(佐羽内季郎)
△白百合(高榮登)△きょうす(牧野忠之)△進君
(高田縣治)△火をおこしてゐる子供(高木し
げ子)△アツサン(立石泰夫)△土瓶(鶴澤花
子)△峯島さん(田原よし)△品と附近の家(大
野憲一)△トケキ(今井常男)△袖(吉成金
龍)△山口さん(峯島梅子)△一輪指(伊藤登良
男)△弟に汽車を見せた(川端喜一)△ダンス
(榎垣美枝子)△門(八木光吉)△瓶の寫生(廣
谷珠枝)△雲の山門(大海操)△おもと 山下
八重子)△労働者(椿友佐美)△葡萄棚の下(山
口太一)△ガリヤ(靜田健一)

金の星誌友

- 瀧松 尾崎有司君○千
葉 山岡兵吉君○岡山 村田三男君○朝鮮
山本龍三郎君○北海道 伊東一吉君○東京 石
江口海三君○千葉 海老本有一君○東京 石
川壯一君○廣島 山口幹夫君○仙臺 越岡と
し子君○愛媛 岡部格三君○熊本 花田春二
君○東京 小田辰子君○茨城 岡田はる子君
○朝鮮 鶴田文子君○臺灣 山崎忠夫君○天
城 木本幸次郎君○宮城 村井善一君○和歌
山 藤野ひで子君○福岡 村井若樹君○熊本
飯塚友次郎君○東京 植田とし子君(以下次頁)

問題を解決しようとしていろいろ努力
へを下さいましたが、遂にそれも無駄と
なりまして、「金の船」は「金の星」と改題
して六月號から發行いたさなければなら
ない次第となつたのであります。

▼斯様な事は出版界はじまつて此の方な
い事でありまして、雑誌協會でも大層な
問題となりましたが、しかし、新に生れた
「金の星」の爲めには却つて「雨降つて
地固る」の譬の通りに、この事が一層の
勵みとなりまして、今までもよりも、もつ
とく活躍いたす事が出来るに違ひない
と思つてをります。

▼愛讀者の皆様！ どうぞこれからの「金
の星」を御覽下さいまし。私どもはきつ
と皆様の御希待に背かない、いゝ雑誌を
作つて今後毎月皆様に御覽に入れる事を
誓ひます。

東京市外田端三五一番地
發行所 金の船社
編輯所 金の船社
東京市五反田五三三番地
電話 小石川五三三七番



読者よ

▽金の船社の獨立と「金の星」の誕生をお祝ひ申し上げます。二千年前不思議な星が三人の博士を聖地メッセムへ導いたやうに「金の星」も我國幾萬の兒童を童話童話の極樂天地に安着せしめる光榮ある雜誌である事を堅く信じます。努力せられる記者様、愛護する人々、共に「兒童のノート」建設の爲に、勵り勵まうではありませんか(京都 三谷公臣)

▽六月號の「金の星」今落手致しました。今迄小學校の子供でも雑誌と言へば「金の星」と改題されると、何だか別の雑誌が新に創刊された様な感じがします。しかし、それによつて「金の星」の權威が落ちるといふことはないでせう。岡本先生、野口先生、齋藤先生の御努力をひたすらお願ひ致します。お祝ひまで。(廣島 山崎浩一郎)

▽東京の永橋卓介様、稻垣ひろし様、茨城の中山省三郎様、藏田茂夫様、大阪の都外川津様、その外大勢の方々からも御祝文を戴きました。記者一同厚くお禮申し上げます(記者)

▽春もだん／＼暖かくなって田舎はあながちに自然の恵みをほしく感じることが出来た。今日も児童を連れて川邊に腰を下して寫生を

させてなりますと、川上の方から何だかふはふはと流れて参りましたので、兒童と當てあひなして戯れ参りましたのんびりしたものです。先生方の御審問を祈る。(田村 梓)

▽自由畫の賞品戴きました。繪業會はステキですね。岡本先生、お筆には感心するの外ありません。また用紙もつさり戴いて、先生本當に有難う。また幼年時や綴りもきつと賞にならなければなりません。僕の従弟の出つちやんが、自由畫を出しましたから、下手ですが見てあげて下さい。五月號の讀者たよりに誰れか探偵小説を出してくれと言つてなりましたが、僕は出さない方がいと思ひます。(神戸 高橋久藏)

▽「金の船」を買はうと思つて本屋へ行くときまだ出てゐない。おや／＼今月はするぶん運いなあと思つて聞いて見ると、是が「金の船」ですよ。「金の星」といふ本をくれました。家へ歸つて中を見ると、岡本先生の畫、野口先生の童話等、目も覚めるやうでした。岡本先生の影繪が気に入りました。若山先生、どうが僕に可愛らしい名前をつけて下さい。西條先生の詩が僕は大好きですから時々出して下さい。(東京 松井純三)

▽晴れ渡る、蒼空高く白雲の
動かぬを見て涙／＼(茨城 山口廣四)

▽四月になつたのは、いくらまで来ないのて心配してゐましたら、まあ、ますます美しくなつて、昨日訪れて参りましたわ。嬉しくつて／＼お家の御用もしなさい。(見)

本當に一息に讀みつゞけました。父慰しはこれからどうなるのせう。伊吹子機たちに御同僚致しますわ。兄さん、私の筆は、お前が本を讀んでゐる額付は、まるで七角島のやうだ。ですつて、随分ひどいわね。記者様、御本の益々よくなつて行くのをお願ひ申し上げます。(東京 長谷川の子)

▽四月號の佐々木さんの「雀のおしやべり」は本當にいいものでした。今でも時々口ずさんでゐます。この外伊藤温子、志村照子、千葉新一郎の諸氏が活動してゐられるのは、私達にとり何より力強いことです。私もこれからしつかりと精進させよう(東京 櫻葉之助)

▽五月號童話評「猿供養」は女の方だけに落着きがあり、想もよくまとまつてあると思ひました。義經の奥州下りには武士道愛する日本の少年達は、大喜びで讀んでゐることと思ひます。しかし種田先生、餘り歴史的にならないやうに童話的であるといふ事、目的にして書いて頂きたいと思ひます。「居眠り玉」はさすがに詩人です。優美そのものが作品に充ちてゐます。子供はみんなのもの一番好んでせう。山姥の歌「はさすが大喜びで毎號の傳説研究家だ。子供も大人も大喜びで毎號讀んでゐること、特に本號のは近來中一番傑作だと思ひました。「騎打ち」は全文に意氣が漲つてゐます。大人の讀む創作としても堂々たるものです。敗者の悲哀を鮮かに描き出すき涙ぐみました。終り十行程は素朴なもので。家なき子」はさすがに世界的な作品で

讀んでゐる。昔小さい時讀んで書いた一冊のためで読んで居ります(大阪 都外川津)

▽記者様、お見舞を有難うござい。幸ひ歸りて止められたので僕の家は助りました。五月四日の十時十五分前に出火して火は見る／＼／＼／＼廣がり、飯田町の指をりの家を深山焼きました。今にございしてゐます。僕の家の助かつた事を皆様によろしく言つて下さい。(長野 山田明)

▽今度私共には可愛い男の子が生まれました。ク／＼した目や、小さな唇にこぼれるやうな笑顔を浮かべて、私共を見てはカイ／＼／＼／＼をする姿が、丁度童話にもあるやうに思はれて、何んともなく讀者の皆様がなつかしい氣が致します。(北海道 上原定吉)

▽楽しいゆつたりした春も、過ぎ去つて行きます。私は第二巻一號からの愛讀者です。殊に私は童話が大層好きです。未だこれと思ふやうなものも作りませんが、いづれ優れたものが作りたいと思つて居ます。これから振つて投書致します。(京都 草目生)

▽まだ見も知らぬ先生様、だしのけに手紙を差上げて申譯ない氣が致しますが、私は今月から読友になりました。どうぞよろしくおたのみ致します。(高知 大脇碧)

▽私は十日も前から、本屋へお百度なふみました。どうもお生憎様と云はれるとがつかりてしまいます。お母さんは「よいお本は、そんなに早くから出ないのだ」と云れられた。私はよい御本だと聞くと嬉しくつてなりました。(東京 ちよ子)

▽二年生ニナツチ、オメンツナツチ、ゴツゴツカミ、ハサミ、ナイフ、キマツナツチ(東京 小田輝)

▽シツカリゴペンキヤツナツチ(記者)

▽初めて投書した幼年時が入選したので、すあぶん嬉しう御座いました。今後よろしくお本がひ致します。それから若山先生の童話の本があつたら教へて下さい(東京 松井純三)

▽まだ出てなかりませんが、そのうちに出ることになつてゐます。(記者)

▽記者先生、「金の星」には考へ物がなく、すれ、外の本に負けないやうにしつかり／＼やつて下さい。また變名はいけなさいでせうか。(東京 城井安子)

▽變名も悪いことばありません。しかし立派な御自分のお名前があるのに、わざわざ別のお名前になさるのもどうかと思ひます。それは御自分の御勝手です。府下の立石百合子さんからもおハガキ戴きました。(記者)

▽私は友達と童話童話雑誌「童話」を出してゐます。美しい御話をお手本にして、私達の本をもつと美しい本に仕様と思つてゐます。私は童話が大好きです。私は野口先生の「十五夜お月さん」を毎日讀んでゐます。ちつともあきません。段々面白味が出て来ます。野口先生誌上で童話の講話をお願ひ致します。(東京 桑原長五郎)

▽私は五月の五日から「金の星」の愛讀者となつて出来るだけ投書し、また仲よく手を取つて遊ぼうと思ひます。私は十四ですが童話幼年時どちらへ投書をしたらよいでせうか。

○新編(先生)

○わしら、童話として御投書になつたが、からうと思ひます。(記者)

▽私も光榮ある御誌の愛讀者の仲間に入られて戴いてより、第二回目の投書を致します。わが紀州にも春はめぐつて来て、藤やつじの世界となりました。記者先生及び天下の愛護諸君の幸祈る。(紀伊 中本正信)

▽碧の衣すが／＼しく、若葉の茂み懸しい頃清涼の夕、一聲さわやかに銀鈴を敲る如き網の聲渡る頃、夏のシーズンも早一時の間近となりませう。先生方お變りもなく益々御氣練の事と存じます。私も日頃の健全、新機軸の機に親しんで居ります。此度「金の船」の獨立を心から御祝申します。先生様一層の御努力をお願ひします。(東京 高橋君)

▽私は前月號を本屋でちよいと見て、あまり面白う御座いましたから買つて来ました。それで何時まででも讀みつゞけました。これから愛讀者になりませう。(千葉 河野文吉)

▽僕は此間、茨城の若柳校の生徒さんがこしらへた「娼婦の唄」つて云ふのを讀んで、びつくりしてしまつた。どの唄もどの唄も素直に、さうして純な氣持で書かれたらしい。中にはあまりにいらしく、泣き出したくなるものもある。本當に、本當の(埼玉 藤田新吉)

▽「家なき子」はほんたうに面白い童話です。私は毎月一番たのしみに讀んでゐます。少年のルミは可愛さうで／＼なりません。ルミが早く幸福になるやうに祈つてゐます。神様ルミを救つて下さい。(北海道 千津子)

懸賞創作募集

自由綴

少年少女の創作
 山本 鼎先生選
 若山 牧水先生選
 編輯部 選

【意注】

懸賞は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにして書いてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにしてください。用紙は自由畫になるだけ重用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または牛紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は六月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は八月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の船社

童童

一般讀者の創作
 齋藤 佐次郎先生選
 野口 雨情先生選

【意注】

童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。



望ぼう 失し

100

定價壹冊參拾錢 送料壹錢
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
 半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
 壹ケ年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
 但し四月號九月號は特別號で廿五錢新年
 號は四十錢です。御注文の節はこの
 分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
 振替口座 東京五九五六番

(送) 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 金 送金は振替が一番便利で御座います
 の 切手代用は(巻錢切手)一割増しです
 注 何何巻第何號よりと書いてください
 住所姓名は必ず書き添えてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年六月六日印刷納本(毎月一回)
 大正十一年七月一日發 行(一日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 東京市外田端三百五十一番地
 印刷所 株式會社博文館印刷所
 東京市小石川區町八百八拾九番地
 印刷人 大橋 光吉
 發行所 金の船社
 東京市外田端三百五十一番地
 電話 小石川五三三八七番
 振替口座 東京五九五六番

商造の行方が解つたので、式江は長い／＼手紙を書いて送りました。伊吹子も明次も手紙を出しました。

そしてその返事を今日か明日かと待ちに待つておりましたが、商造からは何の音信もありませんでした。

手紙を出してから、もう二月になつても、まだ返事が来ないので、或日の事式江は明次を伴れて、日曜學校の熊田先生を訪ねました。

熊田先生は明次の顔を見るとすぐ、

「明ちゃん、お父様からお音信がありましたか。」
と、尋ねました。

「来ないのよ、ちツともお返事を下さらないの。」

明次は悲しさに言ひました。

「先生、何うしたんでせうネ？」と言つた式江の顔は、心配で堪らないやうに見えました。

「離れ島ですから、月に二回しか船が通はないんでせう。ひよつとすると、マダ郵便の配達が無いのかも知れません。」

熊田先生は式江を慰めるやうにもうしました。

「ね、私もさう思つてゐます。それでその島で砂糖の事業を經營してゐなさるお方に、手紙を出して聞合して見ようかとも思つてゐるのですが……」

式江は明次の頭を撫でながら、熊田先生の方を眺めました。

「それもい、ですネ。では私から大東島製糖事務所宛に手紙を出して見ませう。さうすると、商造さんの様子が、すツかり解りませうから。」と言つた熊田先生は、すぐに一通の手紙を書いて、

「居所がちやアんと判つてゐるんだし、たゞ詳しいお音信がないと言ふだけな
んですから、餘り御心配なさらないやうに……」と優しく慰めました。

「有難うございます。そのうちに、返事がありましたなら直ぐお知らせ致しま
すから……」

式江は丁寧にお禮を申して歸りました。

歸つて見ると、縁側の所で伊吹子と忠七爺さんは、庭に咲いてゐるカンナの花を眺めながら小さい聲で話してゐました。

「忠七爺さん、今日は！」と杉垣の所から明次は聲をかけました。

「おう明坊！ お父様の居所が解つてよかつたなう。」

忠七爺さんは、さも安心したやうに、笑ひながら言ひました。

「お父様のゐなさる所は解つたんだがネ、お手紙が來ないのよ、たツた一度來

たツきりて。」

明次は眼を圓くして忠七爺さんを見上げました。

「なアに、手紙なんか何てもい、ぢやないか。生きてる事が解りやア結構ぢや。」

忠七爺さんは手拭で顔の汗を拭きながらさう言ひました。

「だツてもう二月も経つんだのに、お返事が來ないんだもの。」

「今、伊吹子さんに聞いた。離れ島だと云ふから返事が遅いのに違ひない。な
アに生きてさへ居て呉れりア……」

忠七爺さんは急に悲しさうに俯向いてしまひました。伊吹子も明次も、忠七
爺さんの方を見ながら黙つてゐました。

「本當にあなたの仰しやる通りでございます。實は私も、もう二度と會ふ事は
出來ないのかも知れないと思つて居りました。」

式江も涙ぐみながら縁側に腰をかけました。

「私はあの日、太地の岬で、高造さんの美しい舟に出會つた時、兩方から（おうーい）ツて呼び交したのが、此世の別れぢやなかつたかと思ふた。けれども暴風にも吹流されず、暗礁にも乗り上げず、無事に生きて居て呉れたのは、何よりもお目出度い事ぢや。私は今まで口には出して言はなんだが、實はもう商造さんは死んだものぢやと思ふてゐた。」と言つた忠七爺さんは悲しさうに、暫く黙つてゐたが、また話を續けました。

「あなた方は御存知でないでせうが、私にも高造さんと同じ年恰好な男の子があつたのです。それが十八の時、此の濱の若い衆と一緒に綱網を曳きに行つて、それツきり歸つて来ないんぢや。暴風に吹流されたのは七十八人で、其中の三十何人だけ、小笠原島と八丈ヶ島とへ漂流れ着いたが、其の外の者は皆な死ん

でしまつたらしい。」

忠七爺さんが、話を斷つた時、明次は眼を圓くして、

「爺さん所の息子は生きて居たの？」と問ひました。

「生きて居て呉れ、ば善いかと思ふて、私は遙々小笠原島へも行きました。八丈ヶ島へも尋ねて行きました。所が何處にも悴はゐなかつた。段々詳しい話を聞いて見ると、暴風がやつて来た時、悴の乗つてゐた舟は、一番最初に引ツくり覆つて、悴が舟底へ獅咬みついてゐるのを見た人があるといふだけで、其外の事は誰も知らないんです。」

「まア可哀さうにそれぢやア爺さんの息子さんは、海に溺れて亡くなつたの？」

伊吹子は眼に涙を泛べてゐました。

「さうぢや、死骸は見つからなかつたが、もうそれから丁度十七年にもなるが、

何所からも音信がないので、私はもう、自分の悴は死んだものと思つて諦めてゐるんぢや。」

忠七爺さんは、熱い涙をポロ／＼と流しながら式江の方を振向きました。

「けれども、その息子さんは、どこか遠い所へ行つて、生きてらつしやるかも知れませんか。」と式江は忠七爺さんを慰めるやうに言ひました。

「それはもう、悴が生きて居てさへ呉れ、ば、手紙を一本くれないでも、私はどんなに嬉しいか知れせん……」

忠七爺さんは心の中に微かな希望の光を認めたやうに、涙に濡れた眼をしばたたきながら、強ひて笑顔を見せました。明次は快活に、

「忠七爺さん、あなたの息子は生きてるんだよ。屹度、今頃アメリカで、大金持になつてるかも知れんよ。」と言ひましたので、忠七爺さんも元氣な聲で、

「さうぢや、本當に明坊の言ふ通り、アメリカ邊で成功しとるかも知れん。まあ／＼然う思つて楽しんで待たう。なう奥さん。假令死んで居ても、死んだといふ證據がないんぢやから、生きてるものとして楽しんでゐませう。」と言つて濱の方へとぼ／＼と歩いて行きました。後姿を見送りながら、伊吹子は、

「ねエ、お母ア様、忠七爺さんは、十七年も息子のお手紙を待つてゐるんでせう。だから家のお父様から、二月や三月お手紙が來なくツつても我慢して待ちませうネ。」とおツ母さんに言ひました。

「ねエ、多分お父様は、お仕事が忙がしいんでせう？」

式江は弱と涙を拭きながら然う言つて、二人を伴れて松原の方へ出て行きました。松原の白い砂の上では、作爺さんと、若い時也とが、濫色の網を繕ろつてゐました。

「時也さん……」と明次は呼びかけました。

「作爺さん……」と伊吹子も呼びました。

「明坊！ 今日学校を休んだのかい？」と時也は言ひました。

「今日は日曜ぢやのう。」と作爺さんは笑ひながら言ひました。けれども式江は、何うしたものか、ちよいと目禮したゞけて、明次と伊吹子との手を引いて海の方へ歩いて行きました。そして小高い砂丘の上から、沖の方を眺めてゐましたが、「さ、歸りませう。」と云つて、涼しい松原を、家の方へ引返しました。

松原を通り抜けて、小川に架け渡した板橋を渡つた時、向ふの田圃路を、こちらへ急いで歩いて来る郵便配達人の姿が見えました。

「郵便屋さんだ！」と明次は瞳を輝かしながら言ひました。

「さうだ、屹度お父様のお手紙を持つて来て下さるのだワヨ！」

伊吹子も手を拍きながら言ひました。そして三人が橋の袂のところへ、ぢつと配達人の方を見てゐますと、大きな鞆を肩にかけた四十位の男は、田圃路から本道へ出て、橋の所に立つてゐる三人を、見たと思ふと、『手紙はお宅の縁側に置いときますよ！』と呼びました。それを聞くと同時に、

「手紙だ、手紙だ！ お父様からの手紙だ！」と言ひながら明次と伊吹子はどん／＼家の方へ走りました。配達人が杉垣の所を出て、横道に曲つた時、明次はもう裏の近路から庭の所へ駆け込んでゐました。

「明ちゃん、お父様のお手紙？」と、表の方から駆け込んで来た伊吹子は、息を澄ませながら問ひました。

縁側にあつた手紙を取上げて見てゐた明次は、不思議さうに、

「何故だらう？ お母ア様の手紙も、伊吹ちゃんのもの、僕のもの、皆な戻つて来

たよ！」と言つて、少しく顔色を蒼白くしました。

「まア！ どうしたんでせうネ。」伊吹子も符箋の文字を読みながら言ひました。伊吹子や明次と同じやうに、矢張り一分でも早く、商造からの手紙を見たいと思つてゐる式江は、前垂て額に流れる汗を拭きながら、庭の所へ駆け込んで來ました。

「お母ア様！ 手紙が戻つて來たんですよ！」

「何故でせう？」と二人は一度に言ひました。

「えッ？ 手紙が戻つて來たツて？」

式江はひどく驚いたやうに、庭の真中に立停つてしまひました。

「これ、こんなに……」

明次は手紙を引ッ掴んでおツ母さんに渡しました。三通の手紙には、一々

「受取人、此の島内に居住無之候間、差出人へ御返戻下され度候、大東島製糖事務所。」といふ符箋が貼付けてありました。

「居ない筈はないのに、どうした間違ひでせう？」と言ひながら、式江は、ちつと、その手紙を見詰めてゐました。その時杉垣の所から配達人が顔を出して、

「御免下さいませ。手紙を一通置忘れて行きました。」と云つて、一通の封状を差出しました。

「さう！」と言つた伊吹子は、走り寄つてその手紙を受取つて、裏返して見ますと、差出人の名は、「大東島、製糖事務所内、大庭一郎。」とありました。

「早く読んで下さい！」と伊吹子は、おツ母さんの袖に纏る様にして言ひました。

式江は靜かに読み初めました。二人はおツ母さんの顔を見上げながら、熱心に聞いてゐました。

「本日便船でお手紙が三通着きました。けれども宛名のお方はこちらには居られません。それでいろ／＼調べて見ました所、東京の支配人の方では、御備ひ申す事になつてゐるとの事です。どうしたものです。今に此の島へは、御見えになりません。便船した人達に訊いてみますと、もう三月程以前に那覇をお立ちになつたといふ事です。

それから牛若丸の繪を描いた、美しい舟に乗つてゐられたといふ事も解つてゐますが、此島へはそんなお方は、マダお見えになりません。

熊野浦でお育ちになつたお方ですから、ずつと臺灣あたりまで漕いで行かれたのではございませんか。それとも此の手紙が御手許へ届く頃は、もう其他へ御歸りになつて居られるかも知れません。

此方では、さういふ舟に慣れたお方を二三人、是非お備ひ申したいのです。

ら、若しも御主人がこちらへお出で下さる事を、中途でお嫌になつて、引返されたのでしたら、是非今一度お出かけ下さるよう、あなたからお話し下さりませんか。又た甚だ失禮な申しやうではございますが、御主人お一人、こちらへお出かけ下さる事が出来ないと思はれるなら、あなた様もお子様達も御一緒にお出で下さいましては如何でございますか。こちらには小學校もあつて、二人の教師が熱心に教へてゐます。小學を卒業して中學なり女學校なりへ、お入りになりたいお方は、沖繩の方へ行つて沖繩縣立の學校へ入學するやうに、方法を設けてございます。其節は會社から學資の幾分をお助け申すやうになつてゐます。

事務所の方では、舟に慣れたお方を四五人お備ひ申したいのですから、お越し下さるなら、御主人の手でお備ひの上御同道下さいますやう、其儀もお願

愛子叢書

徳田秋聲先生新著

□第一編

眼

鏡

再版

島崎藤村先生著

定價壹圓 郵税六錢 四六判紙本

眼鏡が成る年若い旦那に買はれて、時所を旅行しながら、様々の参らしい出来事や、風景を御覧るといふ筋です。全篇を通じて面白い活躍した或るお話ばかりで、少年少女の健全な讀物です。

愛子叢書は現代第一流の作家で、数人の愛子の慈父である方々の傑作を續々刊行するので、少年少女の最も安心して讀まれる書物です。

第三編

めぐりあひ

定價壹圓 郵税六錢 四六判紙本

友吉が東京へ出たのは十一の時でした。それからの長い、さまざまな生活、親子いふ同じ年の可憐な少女、酒ばかり飲んでゐる父親など、そのいろいろの周囲に、しんみりした落着のある秋聲先生の筆で、さながらに深はされてあります。

□第一編

小さな鳩

再版

田山花袋先生著

定價壹圓 郵税六錢 四六判紙本

鳩のやうな可憐な體を持つた少年の生活を描いたもの、純真な興味と清新な気分を中心として優しい、なつかしみのある筆で、何の無理もなく、すらすらと少年少女の頭に流れるやうに書いてあります。

東京 橋本 實業之日本社 東京 橋本 實業之日本社

— 安夫 —

ひ致します。誠に申兼ねますが、此の手紙着次第お返事下さいませ。

「御手紙は符箋の上御返し申上げます。」

讀み終つた時、式江は聲を顫はせながら、

「伊吹ちゃん。あんたは明坊と一緒に、熊田先生の所へ行つて、直ぐお出で下さい。さうお頼みしていらつしやい！」と申しました。

伊吹子は心配さうに、おツ母さんの顔を見上げながら、

「お母ア様、熊田先生に、どんな御用があるの？」と尋ねました。

「島から手紙が参りましたから、直ぐお出で下さい。然う言へば解るんだから、大急ぎで行つてお出で！」

式江は涙ぐんで然う言ひました。二人は心配さうに顔を見合せてゐたが、何にも言はずに、ぱた／＼と草履を鳴らしながら駆け出しました。

大正十一年六月十日
第三編 贈答品

大正十一年七月一日發行(毎月一回發行)
本

東京金の船社發行



三越の最新流行のしなぐ

爪のお化粧は文化生活
についで必要なことの
各道具一揃え五十五圓



中元御贈答品
何人にも大に喜ばれますのは
三越の品物であります、就中
便利至極なのが三越の商品券

◆夏季は殊にお化粧品も必要であ
ります、香水、白
粉、石鹸等一階
に澤山あります
◆綿、笑、ビ
ン等の流行品の利
て山た、四階に陳列し
てあります



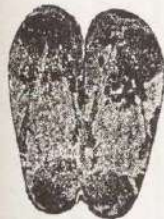
三本結中形浴衣地八圓
三越の中形浴衣は東京
の花と稱せられ、襟
がよく染がよくて安
で有名です……三



表現派機で二圓六十
五錢ジョーセット編
非常に歓迎されて居
ます

七月十日の定休日はお盆のお買
物のお便利を圖り休みません

◆夏季は殊にお化粧品も必要であ
ります、香水、白
粉、石鹸等一階
に澤山あります
◆夏季は殊にお化粧品も必要であ
ります、香水、白
粉、石鹸等一階
に澤山あります



ダンスが非常に流行致しま
すので、出来たのが此の草
履七圓八十錢、その他夏履
き澤山新着……

三越呉服店

◆町河駿京東◆